

安源寺

中野市安源寺遺跡緊急発掘調査報告

長野県中野市教育委員会

安源寺遺跡の調査に寄せて

今回県道の整備工事にともない、安源寺遺跡の調査が行われ、ここに報告書出版のはとびになつたことはよろこばしい。

この調査に当たって県土木部の御援助と調査に当たった各位のお骨折に対して厚く御礼申しあげたい。人間の生活の営みはなかなか強靭なものである。現在でもどのような山間僻地でも水のある所には必ず人間が住みついで、そこに生活の営みがある。そして皆同じような顔つきをしていて、同じような生活をしているのが不思議な気がする時さえある。しかし現在のこの同じような顔つきの裏にも、同じような生活のなかにも過去数千年、数万年の天候と自然条件、また他民族または他部落との苦しい戦いと生活を通しての人間性の培かいの歴史が積み重ねられている筈である。

この遺跡を調査することにより、古代先人のこの生活を掘り起して、その喜びと悲しみ、苦しい戦いへの姿を呼び起して現在の自分達の立っている場所を確かめたいものである。

御援助いただいた各方面と直接調査にあたられた各位に感謝して序文とする。

昭和42年3月20日

中野市長 丸 山 久 雄

序　　言

自然の恩恵を唯一の生活条件として、自然の偉大な力を畏敬し、適応し、利用する事に努めた我々人類の祖先達は、太陽と水に恵まれた居住地を探し求めた。そして、やがては自然に挑戦しこれを征服しようと努力工夫する歴史的な繰り返しの中から、人類の文化は次第に成長し発展してきた。

しかし、それらの文化財も時の流れと共にいつとはなく地下に埋没し、大地に抱かれて静かな眠りを続け幾星霜、今日に到った。

近代社会の急激な発展によって、地域開発の現実的 requirement から、心ならずもこれら貴重な遺跡を発掘せざるを得ない場合が次第に多くなった。中野市安源寺遺跡緊急発掘調査もその一つである。同地域は中野市の西端を限る高丘・長丘両丘陵の接点に位し、土地高標高斜面の日さし暖かい、眼下には広々とした延徳田園を一望のもとに收め、往昔遠洞湖として満々たる水を湛えていたであろうことを思えば、實に水陸の恵み豊かに、げん美し國として最も快適の居住地であった事は想像に難くない。

現に発掘調査の結果、1万年以前の旧石器時代から近世中葉に到るまでの巾広い年代層の遺跡地として、県下にも数少ない貴重な存在である事が如実にこれを立証していることと思う。

今回の遺跡発掘は、県道中野豊野線の拡幅工事の為、同地籍の土地を切り取ったその断面から、数多くの土器、石器と平安時代の堅穴住居と思われる遺跡を、高社中学校教諭金井汲次氏が発見した事に端を発する。たまたまこの事が新聞紙上に報道され、直接工事の責任者である中野建設事務所に迷惑、心配をおかけする事になつたが、結果的にはそれが幸いして県教育委員会の社会教育主事林茂樹先生が現地を視察され、貴重な遺跡であるから発掘調査して資料を保存する必要がある事を確認された。林先生は早速県土木部と連絡をとられ、県の事業として推進すべく設計見積りをされ、種々関係当局の間を奔走され、各方面のご理解を得て、県の委託事業として中野市長と中野建設事務所長との間に契約が成立して、中野市教育委員会がこの発掘調査を実施する事となつた次第である。どのような些細な事業であっても、それを完成するまでには準備の段階から実施の過程を経て完成に至るまでは、隙に隙に表に立ち、裏を支える多数の人々の厚意と努力がなければならない。まして斯様な学術的な調査研究に於ては尚更である。本格的な発掘調査にかかるまでの予備調査の段階に於て既に然りである。休日を利用して高社中学校の金井教頭が同校の郷土クラブ員を動員し協力していただいので本調査への準備は着々整えられ、次第に発掘に対する期待と自信が高まり、この事業の意欲的導火線ともなつた。それはちょうど3月下旬の事であった。

その後、この予備調査を基礎資料として調査計画が進められ、調査団の構成もでき地域の方々の理解ある協力によって調査本部を安源寺消防站所に置く事も認められ、5月27日には本格的調査の第1歩を踏み出す事ができた。

それから15日間、限られた日数の間に、3,500m²にわたる広大な地域の発掘調査を進めなければならぬのであるから、人夫を集めただけでも容易な事ではなく事務局の職員の苦労は並々な

らぬものがあった。しかしそれにも増して調査団の方々の努力はより一層甚大なもので、晴天の日は連日暑い炎天のもとで、埋蔵物のある地点の地は1枚1枚薄紙をはがすように繊細で根気を必要とする仕事を絶えられ、雨の日には本部に籠って土器泡ないとそれが復元の仕事に心血を注がれ、少しでも多くその時代の姿を究めようとする学究的意欲には何人も頭のさがる思いであった。なおその上に、夜は宿舎に引き上げても明日の計画の打合せや今日の発掘物の研究討論、整理等に直に昼夜をわかつぬ精進を続けられ、このような努力に支えられてそれぞれのパートによるトレンチの発掘作業も次第に進み、日とともに数多くの遺物を得た。膨大な土器と石器、それに予定しなかった弥生土塙墓24基、中世、近世土葬墓、中世火葬墓等10数基を発掘した。まだ靈氣漂うかに思われる人骨の埋葬されたものを発見、今も昔も変らぬ人間終焉のはかなくも貴い姿に接し、思わず襟を正した。僧侶にお願いして亡者の供養冥福を祈る儀を行った事もあった。人骨について、その道の権威信州大学医学部番原志勢助教授の来援を得て貴重な研究資料として今後の解明をまつ事になった。発掘調査の評価、発掘物や遺跡の考察・考証については調査員諸氏の専門的な立場からのご報告をご覧いただきたい。

調査団は学校その他の勤務や職業に従事されて居られる方々でありますので、その後多忙な職務のあい間をみて研究整理され考察を述べられたもので、この大部の報告書は實にこれ等の方々の汗と油の結晶とも申すべく考古学研究に対する旺盛な研究心の賜物と心から敬意を表する次第である。

最後にこの発掘調査のため懇の力として記録にとどめられないが心からなるご協力を賜わった地元の方々、青年団、高社中学郷土クラブ、中野高校歴史研究班、飯山南高校考古クラブ、飯山北高校地歴部、星代高校地歴部等々数多くの方々に深甚なる感謝を捧げ、多大なる成果についてご報告申し上げる次第です。

昭和42年1月1日

中野市教育委員会教育長

芳川毅

安源寺遺跡調査結果発表にあたって

県道中野豊野線は、国道18号線の開通によって長野方面より中野市を経由し、山ノ内温泉郷および上信越高原国立公園の中心である志賀高原に通ずる重要幹線道路であります。殊に近年は関東、関西方面より貸切バス、自家用車などによる観光客が急増し、近々将来には一日の交通量が3,000台になろうと推測されています。そこで本路線の緊急整備が必要となり、昭和40年度から調査段階に入りましたが、ちょうどこの計画路線の中に昔から知られている安源寺遺跡の一部分が含まれている事がわかりました。そこで中野市教育委員会に相談したところ、遺跡は埋蔵されていて始めて価値のあるものであるとの事で、中々納得してもらえませんでしたが、路線選定上どうしてもさける事ができないならば、この原発掘調査をして記録保存したいので協力を頼り旨申し入れがありました。私共もこのような重要な遺跡の保存の必要性を探る認識ではおりますが、一方道路整備を急速に促進しなければならない立場として、立地条件から路線変更は難かしい状況にありました。

その後、県および国の関係者に事情を説明した結果、幸い深い理解のもとにこの調査費として50余万円が認められました。そこで市の教育委員会と調査の方法、調査時期等打ち合わせをして、中野市に委託調査をお願いしました。

昭和41年5月から現地調査に入り、資料の収集と調査結果の取りまとめが始められました。この間関係各位の非常に熱意と、たまたま現場視察の折に拝見した遺跡発掘時の慎重なる取り扱い等改めてその重要性を感じ、私共も非常に良い勉強になりました。

そして着手以来関係者の皆様には幾多の困難を克服して、多種多様な貴重なる上古代の土器、石器、墓址・住居址・窯址および人骨等の資料が発掘され、これが完全に整理されてここに発表される段階になりました。私は、関係の一人として非常に喜んでいます次第です。本資料が上古代の歴史を記録し、後世のために良き参考となれば、我々一同工事関係者として若干のお手伝いをさせて頂いた成果が現われたものとして嬉しく存じます。

終りに、本調査に協力くださった國、県の方々、また実際に調査にあたられた関係者に深く謝意を表すと共に、深くお礼を申し上げます。

昭和42年3月20日

長野県中野建設事務所長

土屋年

目 次

序 言	丸 山 久 雄
序 言	芳 川 級
序 言	土 屋 年
第 1 章 環 境	1
第 1 節 安源寺遺跡周辺の地形・地質	中 村 二 郎
安源寺遺跡東部の地質／安源寺遺跡西部の地質／ 安源寺遺跡周辺の地形	
第 2 節 安源寺丘腰周辺の遺跡分布	金 井 済 次
第 3 節 安源寺遺跡周辺の歴史的背景	金井 喜久一郎
第 2 章 調 査	12
第 1 節 昭和40年以前の調査	金 井 済 次
明治・大正時代の調査／下高井郡誌の調査／ 「下高井」出版時の調査／戦後の安源寺遺跡調査／ 「信濃考古総覧集成」のための調査／安源寺 古窯址の調査	
第 2 節 昭和40年の調査	金 井 済 次
第 3 節 昭和41年調査の契機と経過	金井 浩次・小野沢施 緊急発掘調査の計画／発掘調査設計／調査日誌
第 3 章 遺跡・遺物	26
第 1 節 トレンチの概要	小池正彦・下平秀夫・松沢芳宏・高橋桂
Aトレンチ／Aトレンチ拡張区／Bトレンチ／Cトレンチ Dトレンチ／Eトレンチ／F・G・Hトレンチ／ K・N・Pトレンチ	26
第 2 節 トレンチ内出土遺物	川上元・関孝一・桐原健・下平秀夫
先土器時代遺物／绳文式時代遺物／弥生式時代遺物／ 土師器遺物	53
第 3 節 弥生式時代土塙墓の調査	田川幸生・小池正彦・松沢芳宏
土塙墓の形状	佐沢 浩・高橋 桂
第 4 節 土塙墓の考察	桐原 健
土塙墓のあり方／土塙墓の様相／土塙墓の編年／ 土塙墓と集落	54

第 5 節	土塚墓内出土遺物	桐 原 健	65
	石器／土製品／土器		
第 6 節	安源寺遺跡の既出資料	桐 原 健	76
	「下高井」記載の弥生式 遺物／昭和26年発掘の土塚墓と遺物／ 宮裏遺跡／高見沢伴蔵氏所有遺物		
第 7 節	窯址の調査	興津正朗・金井汲次	80
	発掘調査／窯址の構造／窯址内出土遺物		
第 8 節	土邱期住居址の調査	下 平 秀 夫	84
	発掘の経過／窯址の構造／出土遺物／まとめ		
第 9 節	中世・近世墳墓群の調査	興津正朗・関孝一・金井汲次	88
	土葬墓／火葬墓／墳墓群出土遺物		
第 10 節	墳墓群の考察	林 茂 樹	93
第 11 節	土葬・火葬墓出土人骨	香原志勢・中村登流・西沢寿晃	97
第 4 章 結 び	金 井 汲 次		98

図 版 目 次

- 図版第 1 安源寺遺跡周辺(航空写真)
- 図版第 2 (上) 安源寺遺跡遠景
(下) 安源寺遺跡よりの眺望
- 図版第 3 (上) 発掘状況
(下) 発掘状況
- 図版第 4 (上) 弥生式第 6 号土塚墓
(下) 弥生式第 7 号土塚墓
- 図版第 5 (上) 弥生式第 9 号土塚墓
(下) 弥生式第 9 号土塚墓遺物出土状態
- 図版第 6 (上) ベトレンチ発見弥生式土塚墓群
(下) 同遺物出土状態

挿 図 目 次

第 1 図	安源寺遺跡周辺の段丘面	4
第 2 図	高丘丘陵周辺の遺跡分布図	7
第 3 図	安源寺遺跡調査地点分布図	15
第 4 図	分布調査出土遺物	15
第 5 図	出土人骨の法要	22
第 6 図	県教育長の視察	22
第 7 図	調査団メンバー	26
第 8 図	トレンチ全体図	27
第 9 図	トレンチ内出土先土器時代石器	33
第 10 図	トレンチ内出土繩文遺物	35
第 11 図	トレンチ内出土弥生遺物	37
第 12 図	トレンチ内出土土師器遺物	37
第 13 図	弥生式第1号土塁	38
第 14 図	弥生式第1号土塁	39
第 15 図	弥生式第2号土塁	39
第 16 図	弥生式第3号土塁	40
第 17 図	弥生式第4号土塁	40
第 18 図	弥生式第5号土塁	41
第 19 図	弥生式第6号土塁	41
第 20 図	弥生式第7号土塁	42
第 21 図	弥生式第8号土塁	42
第 22 図	弥生式第8号土塁	42
第 23 図	弥生式第9号土塁	45
第 24 図	弥生式第9号土塁太形船刃石斧出土状態	44
第 25 図	弥生式第9号土塁植株土器出土状態	44
第 26 図	弥生式第9号土塁底部	44
第 27 図	弥生式第10号土塁	45
第 28 図	弥生式第12号土塁	46
第 29 図	弥生式第12号土塁	47
第 30 図	弥生式第15号土塁	47
第 31 図	弥生式第14・15・16号土塁	48
第 32 図	弥生式第18～21号土塁	49

第 5 3 図	弥生式第18～21号土塙の上面土器被覆状態	50
第 5 4 図	弥生式第22号土塙	51
第 5 5 図	弥生式第22号土塙上面	52
第 5 6 図	弥生式第23号土塙	53
第 5 7 図	弥生式第24号土塙	54
第 5 8 図	土塙出土石器	55
第 5 9 図	土塙出土土製品	55
第 4 0 図	土塙出土弥生式第1類土器	66
第 4 1 図	土塙出土弥生式第1・2類土器	67
第 4 2 図	土塙出土弥生式第3類土器	68
第 4 3 図	土塙出土弥生式第3類土器	69
第 4 4 図	土塙出土弥生式第3類土器	70
第 4 5 図	土塙出土弥生式第4類土器	71
第 4 6 図	安源寺遺跡既出土器・石器	76
第 4 7 図	昭和26年調査土塙出土土器	77
第 4 8 図	宮裏遺跡の住居址と遺物	79
第 4 9 図	高見沢伴彦氏所蔵土器	80
第 5 0 図	トンネル式無段登窯	82
第 5 1 図	トンネル式無段登窯	82
第 5 2 図	トンネル式無段登窯出土土器	83
第 5 3 図	土師期住居址竈	85
第 5 4 図	土師期住居址竈	85
第 5 5 図	土師期住居址内出土土器	86
第 5 6 図	第1号土葬墓	89
第 5 7 図	中世・近世墳墓群全体図	90
第 5 8 図	第11号火葬墓出土擂鉢	92
第 5 9 図	第1号土葬墓出土古鉄・釘	92
第 6 0 図	第2号土葬墓出土小柄	95
第 6 1 図	調査直後の造跡破壊状況	100

[表紙題字……中野市長 丸山久雄]

中野市安源寺遺跡緊急発掘調査報告

中村二郎・金井汲次・金井喜久一郎
小野沢捷・小池正彦・下平秀夫。
松沢芳宏・高橋桂・川上元・関孝一
桐原健・田川幸生・笹沢浩・興津正
朔・林茂樹・香原志勢・中村登流・
西沢寿晃

第 1 章 環 境

第 1 節 安源寺遺跡周辺の地形・地質

安源寺遺跡東部の地質

「別所層」：模式地は中野市更科 熱作用をうけて灰色または暗青色を呈する珪質頁岩である。板状に割れやすく、走向N 20°～30°E、傾斜15°～20°NWで、玢岩に接するところほど、強め変質をうけている。

本地域の別所層は、中野市更科から同高速にわたって小分布するのみである。したがって明らかな地質構造はつかめない。（この岩体の選入時期については、内村グループ（1957）によって、別所層の准積末期から青木層の時代と推定されている。）

安源寺遺跡西部の地質

本地域に発達する新生代層の層序は第1表のとおりである。

「大川層」：模式地は豊田村上今井より赤塩に通ずる道路
層序：上今井～赤塩間にわたり約500 m。

本層は主に砂疊と砾岩からなるが、泥岩と白色凝灰岩をはさむのが特徴である。砂岩は細粒～中粒であるが、中粒が最も多く、黄灰色・青灰色・灰白色を呈し、軟弱で凝灰岩質の部分も認められる。砾岩は硬砂岩・粘板岩・珪岩・チャートなど、よく円磨された古生層起源の岩石のはか、広く中央隆起帯に基底層岩として分布する黑色安山岩・玢岩・石英閃緑岩など
の細粒～中粒からなるが、まれに人頭大のものから、2 m前後の安山岩の巨礫もみられる。これらは粗粒の砂によって膠着されている。泥岩は下部ほど多くはされ、暗灰色・青灰色・淡褐色を呈し、かなり炭灰質の部分もあり、ところによつて軽石粒を散在している。

親川付近では、泥岩中に泥岩～亜炭の薄層がはさまれている。道光寺付近では2～3 mの厚さの白色の石英安山岩質凝灰岩が、砂岩・泥岩と互層している。この白色凝灰岩はよく北方へ連続して

年代	層 序
現世	沖 横 層
洪積世	鼎状地層及び段丘準後層
疊 野 層	
屋 取 層	
鮮 新 世	大 川 層

第一表 安源寺遺跡
西部新生代層序表

鍵層となっている。

齊藤他(1963)はこの白色凝灰岩を本層下部の最上部に含め、その上部をもって本層を下部と上部に分かれている。したがって、本層は齊藤他のいり大川層の上部層に対比される。本層の一般傾斜は30°内外で、道光寺～上今井にわたり、1本の背斜構造と1本の向斜構造を認める。

「屋敷層」：模式地は急田村替佐より古牧にわたる千曲川沿岸

層序：古牧～永江間において、約450 m。

本層の下限は替佐断層によって大川層と接している。岩相は、主として大小不規則な安山岩塊を含み、無層理の凝灰角礫岩からなるが、凝灰岩・砂岩・礫岩などを含む。凝灰角礫岩を構成する角礫は、暗灰色・赤紫色・黄褐色を呈する複輝石安山岩が最も多いが、長柱状の角閃石を含む灰褐色で、粗粒な安山岩もみられる。古牧付近では、複輝石安山岩の凝灰角礫岩～火山角礫岩からなるが一部には黒雲母を含む、石英安山岩質の白色～淡灰色の凝灰岩が含まれている。

鬼坂の千曲川沿岸の断崖では、高社火碎岩を構成する角礫と全く同質な角礫を認める。このことは、屋敷層の堆積当時から、高社火碎岩の活動が始まっていたことを物語るものである。

は含まれている泥岩や砂岩は一般に凝灰質で、ラミナが発達し、火山岩塊と接するところでは顕著となる。

一般に上部の傾斜は10～20°にすぎないが、下部になるにつれて傾斜を増し、永江付近での走向と傾斜はN 34° E, 50° SWを示している。

「豊野層」：模式地は中野市安源寺の採泥場

層序：模式地では約30 m

下位の屋敷層に整合して漸移する。下部は淡黄色～灰褐色で、層理のはっきりしない粘土状の泥岩が優勢であるが、上部は細粒～中粒の砂岩または、灰白色の凝灰岩を含み、比較的規則正しい層理を示す部分が多くなる。泥岩と砂岩とが稜状の層理を示すところでは層理面にしばしば茶褐色の酸化帯を認める。砂岩の特徴は、水成の黒雲母片を含み、また凝灰層になるところでは、安山岩の亜角礫～亜円礫を点在している。多量の軽石を混じえた部分は、クロスラミナが著しく発達する。中野市し尿処理場南方では、砂岩・泥岩・凝灰岩～凝灰角礫岩からなり、この凝灰角礫岩中には、最大50cmの砂岩・泥岩の偽円礫を混在している。

中野市安源寺遺跡の地点では、下部は稜状を呈する泥岩と砂岩で、上部は固結度の低い疊層からなる。この疊層の疊種・粒径・円度等の測定(註1)結果は表示したとおりである。(第2表)

本疊層の疊の由来に関しては、安山岩は判定し難く、現在検討中であるが、石英閃綠岩・石英斑岩・基底溶岩等の疊は、その岩質が河東地域に分布する岩体と全く同質である。このことから、本疊層の疊の大部分は河東地域から供給されたものである。

富沢(1963)は、本層中より珪藻化石として次のような化石を報告している。

Melosira granulata (EHR) RALFS 多

Eumotia rupestris W.SM 稀

Coccconeis placentula (EHR) Var. *euglypta* (EHR) CL 稀

Frustulia rhomboides (EHR) de TONI Var *amphibleuroides*
GRUN 種

Gomphonema acuminatum (EHR) Var *brebissonii* (KÜTZ) CL 種
これらの化石はいずれも

淡水性を示している。

一般走向と傾斜は、長丘
背斜の東翼の安源寺採泥場
で、N 30° E, 40° S、
西翼では中島入口で N 40°
E, 40° W を示すが、草
間地域では不規則にもまれ、
ときて 70° ~ 80° の急傾斜
を認める。

本層は岩相上ならびに地
質構造上、齊藤のいう觀音
山砂シルト岩層(1960)には対比される。

本地域の主な褶曲構造としては、1つの背斜構造上ふたつの向斜構造がある。このほか1、2の小規模な背斜・向斜が存在する。

長丘背斜：この背斜軸は、北端は古牧付近で、千曲川東岸の笠原・大俣をとおり、南端は立ヶ花にむよぶ。ほぼ N 30° E 方向に走る背斜構造で、長丘丘陵の地質構造を支配している。

上今井向斜：この向斜軸は、千曲川西岸に沿って、長丘背斜軸と並走する向斜構造である。北端は深沢付近から善佐をとおり、南端は上今井におよぶと推定される。本向斜軸は二ノ石付近で該断層の善佐断層に切断されている。

片塩向斜：この向斜軸は北端は田麦付近で片塩を通り草間にむよぶ。ほぼ NNE-SW 方向に走る向斜構造である。向斜軸の南東側は片塩では 15° 内外の緩傾斜であるが、安源寺付近からその度を増し、草間に 60° ~ 70° の急傾斜を示す。

本地域には、主な断層として善佐断層がある。このほか長丘丘陵の東縁に沿う草間推定断層がある。

善佐断層：地質構造と推定される断層で、北端は伊予岡から善佐、道光寺、二ノ石におよぶ。ほぼ NNE-SSW に走る。齊藤はこの断層の南端を浅野に達するとしている。この断層は西に向ってやや弯曲した形をしている。また断層に接する大川層はしばしば逆転が認められ、西側に分布する同層と比べて著しくもまれている。このような点から齊藤ならびに井上(1961)が指摘しているように西側上りの逆断層と解釈される。

草間断層：齊藤のいう善光寺断層に相当する断層で、次の点から断層が推定される。

① 長丘丘陵の東麓は平滑である。しかも河川による側浸食の形跡は全く認められない。

種 種		粒 径		円 磨 度	
岩 質	混合率 %	階 級	混合率 %	階 級	混合率 %
玢 岩	82	大 磨 64~128 mm	22	角 磨	5
石英閃綠岩	3	中 磨 16~64 mm	72	亜角磨	95
石英斑岩	2	小 磨 4~16 mm	6	円 磨	0
チャート	3				
基底溶岩	5				
安山岩	5				

第2表 登野面上部礫層破種、粒径、円磨度数値表

② 1953年草間部落の篠井川沿岸で実施された試験（未公表）の結果によれば、地下120 mに至ってはじめて豊野層が認められている。

この断層の性質に関しては、断層線が西に向って湾曲している。また断層線に近い草間では他の地域に比べて著しくもまれていることなどから、齊藤（1961）が指摘しているように、西側上りの逆断層と推定される。

安源寺遺跡周辺の地形

「夜間瀬川流域」

夜間瀬川流域に発達する地形面は、上段から佐野面、湯田中面の2段に識別できる。佐野面については省略する。（第1図）

湯田中面：模式地は湯田中・安代・淡の旅館がおかれている面である。

この面は湯田中疊層の Fill top (堆積物頂面) にあたるので、Accumulation terrace (堆積段丘) である。分布は山ノ内町畠野から夜間瀬川に沿ってのび、下流では夜間瀬橋を頂点とする中野扇状地をつくっている。段丘疊層の厚さは、模式地では 10～15 m である。構成する疊は玢岩・志賀火山系の各種の安山岩からなるが、現河床の砂礫と同様に新鮮である。径 15 cm～20 cm が多い。

面の河床からの比高は、模式地では 12～15 m、山ノ内町底塙焼却場付近で約 7 m、夜間瀬の鉄橋付近で約 4 m と漸次下降し、さらに下流の十三塙付近では 2～3 m となって中野扇状地へ連続する。この面上には、ロームは被覆していない。

「長丘丘陵地帯」

千曲川流域を模式地として発達する段丘は高位より赤塙面および長丘面・原面・栗林面の3段に識別される。

「赤塙面」：模式地は三水村赤塙である。

基盤の構造を切り、海拔高度は 500～600 m を示す平坦面で、かつての千曲川の自由蛇行浸食によって形成された Strath terrace (浸食段丘) である。千曲川水面からの比高は 180～280 m で、段丘端はかなり浸食され、斜面をなしていいる。この面上にはロームと断定できるロームは殆んど見あたらぬ。



第1図 安源寺遺跡周辺の段丘面 (1:60000)

「長丘面」：千曲川の東側に位置する南北約10km、東西約500～2000mのほぼ南北にのびる長丘丘陵で代表される。

基盤の構造を切り、海抜高度は400m～500mを示す平坦面で、赤塩面と同様にかつての千曲川の自由蛇行浸食によって形成された Strath terraceである。千曲川水面からの比高は180～180mで、段丘壠は北部では基盤が堅い火成岩からなり急崖を示すが、南部では浸食され斜面を形成している。

Vennerの保存は不良で浜津ヶ池東方、厚見西方において点在的に認められるのみである。疊は普通5～15cmの大きさで、円錐角礫の黒色安山岩・玢岩・石英閃綠岩・古生層起源の岩石などがあり、多くの場合内部まで酸化鉄で汚染され風化が進んでいる。

この面上には、ロームと断定できるロームは見あたらない。近年先土器文化に属するナイフブレイドが浜津ヶ池ならびに草間地籍で出土しているが、茶褐色～褐色を呈する粘土化した豊野層の二次的堆積物より出土したものである。

長丘面では、笠倉以北においては千曲川をはさんで赤塩面と接し、しかも面の海抜高度が坪原等しくなること、他から赤塩面に対比される。赤塩面と長丘面の全般的海抜高度の相違に関する原因については、背巻が指摘しているようにこの面の形成後ににおける善光寺平の階級運動と相対的に飯綱火山を中心とする曲隆運動による地盤運動によって、高度分布の相違が生じたものと解釈される。

「原面」：模式地は中野市の原である。

この面は赤塩面・長丘面を浸食して厚さ2～6mの Gravel Venner をのせる Strath terraceである。本面の千曲川水面からの比高は20～25mである。分布は現千曲川に沿い、立ヶ花・原・中新田・鬼坂・上今井・大俣・替佐等の地籍にわたる。

Vennerの疊は、安山岩・玢岩・石英閃綠岩・花崗岩・古生層起源の岩石からなり、径10～15cmが多い。これらの疊は現河床の疊と同様に新鮮である。段丘壠には、ところどころ基盤の屋敷層・豊野層の露出を認める。この面上には、ロームは被覆していない。

「栗林面」：模式地は中野市の栗林である。

この面は原面を浸食して厚さ0.5～4mの Gravel Venner をのせる Strath terraceである。分布は原面に沿い、南は浅野から北は奥手山にわたる。

Vennerの疊は現河床の疊と同質である。面の千曲川水面からの比高は、模式地付近では約12mである。本面上には、ロームは被覆していない。
(中村二郎)

(註1)

疊の採集と測定方法

1. 疊の採集方法 - 1m²の範囲内で大きい方から100個とつた。

2. 疊の測定方法

- ① 硫酸-酸化して判定し難いものは剖って判定した。
- ② 粒径-後述: 1951の分類基準による。

③ 円窓度-角碑・直角碑・円碑の3階級に分類した。

参考文献

1. 八木 貞助(1924) 下高井郡臨地質誌、下高井教育会
2. 本間不二男(1951) 信濃中部地質誌、古今書院
3. 度辺 長雄(1951) 最新地学(上)、法文社
4. 斎藤 豊(1955) 長野県上水内郡豊野村付近の地質、信大教育の研究論集5号
5. 飯島南海夫(1956) 毛無火山周辺の地質及び地下資源、長野県地質調査報告書、長野県地質調査研究会
6. 内村グループ(1957) 信州別所地域の適入岩類について、フォンサ・マグナ版1
7. 八木 貞助(1958) 上水内郡地質誌、上水内教育会
8. 八木 健三(1959) 長野県野尻湖周辺のローム層、地質学雑誌65巻766号
9. 水上 寿英(1959) 長野市北東部の新生代層、地球科学第46号
10. 斎藤 豊他(1960) 長野県飯山市西北方の地質、下水内教育会(とくに常盤・外様平の成因)
11. 小林 国夫(1961) いわゆる信州ローム、地質学雑誌67巻784号
12. Yutaka Saito (1961) A Preliminary Note on the Structure System of the Tertiary in the Northern Part of the Possa-Magna, Shinshu University版12
13. 井上 春雄(1961) フォンサ・マグナ北東部の火山層序学的、並びに岩石学的研究、信大教育学部紀要第12, 15号
14. 飯島南海夫(1962) フォンサ・マグナ北東部の火山層序学的、並びに岩石学的研究、信大教育学部紀要第12, 15号
15. 小林 国夫(1962) 第四紀(上)、地学叢書
16. 中村 二郎(1962) 毛無火山南端の地質、カゼノ平自然調査報告、下高井教育会
17. 神田 五六(1962) 豊田村々誌考古学篇、豊田村
18. 斎藤 豊他(1965) 富倉油田の層序と地質構造、長野県の地学叢
19. 宮沢 桂雄(1965) 長野盆地周縁の地質構造、長野県の地学叢
20. 中村 二郎(1964) 中野平の水理地質、信大教育学部科学教育研究室報告版1
21. 中村 二郎(1966) 中野層状地の形成に関する地形地質学的研究、長野県地理学会研究発表要項1966

第2節 安源寺丘陵周辺の遺跡分布

安源寺遺跡の立地している高丘丘陵は、各時代、各種の遺跡が複合、密集している地帯である。丘陵の東南面には、中野平の水田農耕地帯が展開し、通称「延徳田園」と呼ばれている。延徳田園を囲繞して数多くの遺跡が点在している。第2図はそれを示したものである。

延徳田園をめぐって、東には夜間瀬川が志賀高原から土砂を運搬堆積してつくった、広大な中野崩状地、南は三沢山～山田峰～雁田山の一連の山々の麓に鎌倉状に発達した小崩状地、西南には松川によって形成された小布施崩状地、西は千曲川の自然堤防をさらに補強した大堤防がある。延徳田園はそれ等にとり囲まれた後背低湿地で、沖積氾濫原であるため冠水による被害が多いところである。口碑によれば、往古は一大溜水湖で、迷洞湖と呼ばれたと伝えられ、湖にちなんだ伝説が多く残っている。おそらく千曲川、篠井川等の氾濫が頻繁で沼沢地状を呈していたものであろう。

延徳田園を囲繞する遺跡を、信濃考古総覧によって次頁に掲げよう。（第5表）

信濃考古総覧は、昭和31年5月に集大成されたもので、その後この地域における発掘調査は空白となっている。そこで、それ以降のものについて次に年次別に記録する。

1. 間山石動下遺跡 土師中期 中野市間山石動下

〔発掘調査〕 昭和35年10月
月 桐原 健 [遺構・遺物] 住居址1、土師一坏、瓦、須恵一瓦片、灰釉陶器一皿、水流片、管状土錠4
鉄器(手斧)、木炭片、灰、散石

2. 片塙遺跡 土師後期 中野市片塙道下

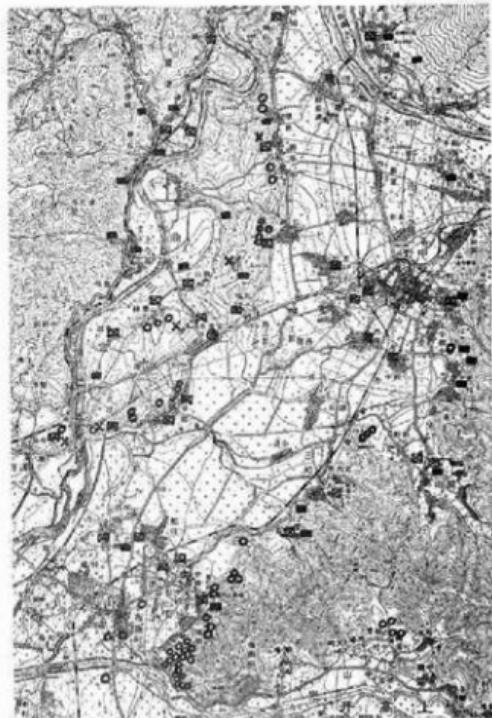
〔発掘調査〕 昭和35年10月
金井汲次 [遺構遺物] 住居址1、瓦組窓、土師一壺、枕、坏、高坏、須恵一皿、坏、布目瓦(平瓦、丸瓦)

3. 浜津ヶ池遺跡 先土器後期 中野市栗林浜津ヶ池

〔発掘調査〕 昭和56年11月
神田五六 [遺構・遺物] ナイフ形石器、彫刻器、搔器、石刀

4. 立ヶ花遺跡 先土器後期 中野市立ヶ花裏

〔発掘調査〕 昭和37年1月
金井汲次 [遺構・遺物]



第2図 高丘丘陵周辺の遺跡分布図 (1:10,000)

X先土器 ■繩文 国 莘生
○古墳(円墳) △古墳(前方後円墳)
◎要原寺道跡

① 遺跡

番号	遺跡	地形	遺物
417	七瀬	山腹	(弥) 太形蛤刃石斧・器台 (土) 前期一堵 (5ヶ) 他破片
422	安源寺 宮裏・峰 立道・石 原・日向 八幡社	丘陵	(陶) 前期破片・勝坂式 (多) 加曾利式・石鏃・打石斧・磨石斧・石劍・石槍・凹石・磨石・石皿・敲石・仄状耳飾 (弥) 林式 (少) 箱清水式・高坏壙台・土鏡・磨石鏃・打石鏃・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石庖丁・凹石・細形管玉 (土) 前期小形堵・後期系切皿 (陶) 瓷器 ガラス玉・窯滓
423	栗林 (北原・松原・野地)	丘陵	(弥) 乾山式・栗林式・百瀬式 細腰車 (土製) 打石鏃・磨石鏃・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・小形磨石斧・石鏡・石庖丁・石槌・細形管玉・勾玉・ガラス小玉・滑石模造品 (住居址あり)
426	立ヶ花 (鶴)	低湿地	(土) 前期一無文高坏・蓋・その他破片 後期一系切皿・壺
427	立ヶ花 (鳥 軒側)	△	(土) 前期一高坏・甕・後期系切皿 (陶) 瓷片
430	草間 (土塹)	△	(弥) 箱清水式 (多) (土) 前期一高坏・堵・坏壙・その他破片 (多)
431	△ (中組)	台地	(弥) 中期壙・太形蛤刃石斧
432	△ (高屋敷)	△	(弥) 緊期高坏・凹石

② 古墳

番号	部落地字	地形	名 称	外 形	外部施設	内部構造	遺 物	備 考
219	草間 西山 2109	丘上	京塚	(円) 径 50.0 高 2.2				略完存 (文) a.14
220	同 同	同	西山古 墳	(円) 径 11.0 高 1.5			直刀1・ 土師器・ 須恵器	墳丘略完存。直 刀は墳頂下約50 cm (文) a.14
221	同 上ノ上 1986〇 口	同	御嶽山 古墳	(円) 径 23.0 高 4.2				略完存 (文) a.14
222	草間 東山 2061	丘上	高山 第1号 墳	(円) 径 20.0 高 2.3				略完存 (文) a.14
223	同 同	同	同第2号 墳	(円) 径 21.0 高 2.5				略完存 (文) a.14
224	同 茶臼峯 1031	同	茶臼峯 第1号 墳	(円) 径 6.6 高 0.4				完存
225	同 同 1029	同	同第2号 墳	(円) 径 5.5 高 0.4				同 現状はやや方形
226	同 同 1026	同	同第3号 墳	(円) 径 5.6 高 0.4				同

番号	部落地字	地形	名 称	外 形	外部施設	内部構造	建 物	備 考
227	同 同	同	同 第4号 墳	(円) 径 5.4 高 0.3				同
228	栗林 西原39	同	栗林第 第1号 墳	(方)? 辺 11.0 高 2.0				白山姫墳 完存 (文)14・b16
229	同 上原39	同	同 第2号 墳	(円)? 径 8.8 高 0.9				墳丘半壊現在 方形をなすも 円墳ならん (文)14・b16
230	安瀬寺 経塚 894	同	小丸山 古墳	(円)?				墳丘殆んど破 壊さる

③ 窯址

番号	部落地字	地形	遺 物	備 考
49	草間 東池 田	丘陵	窯跡・須恵器	(武)高丘小学校
50	同 林 鹿	同	窯跡・須恵器(細切底)	(武)高丘小学校
51	同 中 原	同	窯跡・須恵器	(武)高丘小学校
52	立ヶ花 城ノ越	同	窯跡・須恵器	(武)高丘小学校
53	同 池 田 池田端 清水山 裏	同	窯址・須恵器・布目瓦・窯跡	平安期と思われる布 目瓦あり (武)高丘小学校 田川 先生

第5表 高丘丘陵の遺跡一覧表 (信濃考古総観上)

ナイフ形石器、形刻器、搔器、石刀、振斧

5. 草間窯跡遺跡 8~10世紀 中野市草間大久保、茶臼峯

[発掘調査]昭和38年12月、昭和39年3月・4月 大川清、金井汲次 [遺構・遺物]トンネ
ル式無段落窯1、半地下式無段落窯9、須恵一貯、壺、蓋、坏、高坏

6. 栗林遺跡(第三次発掘) 弥生中~後期 中野市栗林北原

[発掘調査]昭和40年11月 林茂樹 金井汲次 桐原健 [遺構・遺物]住居址1、土
爐墓1、弥生中期~壺、貯、鉢、蓋、弥生後期~壺、貯、瓶、高坏、铁器片(多件)

(金井汲次)

第3節 安源寺遺跡周辺の歴史的背景

長丘丘陵の南端に展開する高丘台地には、安源寺・栗林・牛出・立ヶ花・草間等の諸部落が点在しているが、ここには主として安源寺を中心とした歴史的環境について述べることにしよう。

安源寺部落は延徳沖に臨む新田の裏安源寺と、北側に亘る本村の裏安源寺とから成っている。俳人一茶が文化4年(1807)8月6日に今井の舟渡しをわたって、折しも馬市で賑わっている安源寺八幡の例祭にあい、「大木牛を忌し、隣ゆく駒の影も宿らぬ当社の森をぬけて、東へ出ると、渺々と開けて沖が見渡され、この国第一の田所というに、去る5月の洪水に堤破れて今は脚に植え替えられた田圃には、祭の大鼓に薄墨色の穏波を見せてはいる」と文化的な句帖に記している。

まさにこの台地は千曲川の屈曲渦水による渦水のため、洪水の毎に延徳の大潮を現出しながら大古の姿を展開してきたが、明治4年に利害関係の最も甚だしい29ヶ村の要望で千曲川の流路を変更し、さらに大堤防の完成によって水災を経り今日に至った。

同部落の市村忠兵衛氏の語るところでは、今より7年前、栗村の湖辺で耕地整理をやった際、埋木のようになった直径1m余の大櫛材3本(約50石)が地下より発掘されたが、ものとの横櫛材に使用されたものらしく、その地点は湖辺で漂流物の最もよく流れ着く所と思われるところである。この湖辺からは弥生時代や土師時代の遺物も発見され、今回発掘の追跡は、此處に連なる上の斜面である。

安源寺は、慶長7年(1602)海津城主森忠政の検地の際の石高は、187石5斗1升2合(本田、新田の区別がない)、その後松平忠輝、酒井忠利(預)、福島正則、幕府領を経て飯山城主松平忠俱の延宝7年(1697)の検地によって、本田村高289石3斗5升7合(30町9反2畝11歩)、新田村高318石7斗7升2合(32町9反1畝16歩)となり、延徳沖の開拓が著しく進み特に新田の発展がめざましい。さらに元禄の新田検地を経て、再び幕府領となり、安永の新田検地で裏安源寺村高は、610石7斗5升3合(64町2反5畝6歩)となった。本村の北方字「堀脇」には、東西71m南北25.5m、周囲に幅7.8mの堀をめぐらし、さらに高さ約5m、幅4.5mの土居をもつ館の遺構がある。延宝7年検地帳では「堀の上」「星敷添」にあたる地域である。

現在も土取場として大部分を採り、三方は殆んど埋立てられているが、館の南方に一部面影を残すことの出来る土居が遺っている。土人は今井兼平の館と称しているが、信するに当らない。この東方の長丘丘陵上、字「立道」を登り詰めた所に城山がある。東西82m、南北60m、三方に土居を造し、南と北とに大きな堀切をもつ山城で、土人は高梨氏の幕下某の居城と伝えている。

また館と山城とを結ぶ縦線上に接して字「清水」に東西27m、南北11mの旧安源寺の寺址がある。附近には五輪塔が散乱し、井戸側の石垣も塔石で組立てられている始末である。これらは中世の面影を偲ばしめるものであるが、さてその由緒に至っては全く明確を欠いている。

小内八幡宮はもと庄内八幡と称し、高梨氏の本拠であった移原庄(移原・津原・樅原・相原とも書く)といわれた今日の小布施町の六川部落附近に安源寺と共にあって、高梨氏の北進にともなって現地に移されたものようである。

新潟県高田市の本誓寺にある中世の由緒書を見ると、同寺は中野氏を頼って関東より移って中野に落着いたが、高梨氏に逐わざり笠原氏の被謫を受け、再びこの地を逐わざり牛出に逃がれ、ここで高梨氏の厚い待遇を受けさらに中野に出て、井上に居住したのは本廟寺選知の頃とし、その後上杉謙定が関東より越後に侵入した永正7年(1510)の事件を伝えている。この史実には多少の錯乱はあるにしても高梨氏の牛出に勢を伸したのは政盛以前のことになる。本誓寺を牛出に逐わざれた後主の根拠地は前記の安源寺館でその領主は高梨氏一族と見るのが妥当で、従来の安源寺村史も高梨氏の幕下某としている所以であろう。

高梨氏の以前のこの台地の姿を考えてみると、当地の自然環境からます牧場を思われる。この地方の中世の牧場といえば、かつて朝廷牧場であった夜叉南条、同北条、金倉井、中野の御牧である。中野御牧については中野郷との関係からすっきりした結論が得られない。すなわち中野郷と中野御牧の領主は同じ藤原氏(藤原秀郷流)でも前者は中野郷西条を根拠地にした中野氏、後者は御牧を中心とした尾藤氏で全く別系に属する。

私はこの御牧の中心をこの高丘の台地にもとめた。安源寺館の高梨氏の使用する以前は尾藤氏系の牧人の館で、この地に迫っている馬市も遠くこの辺に起因するのではないかと推定しているのである。

永正10年、山之内地方に起った反乱で、余瀬を保っていた中野一族も、高梨氏の重臣草間氏の目覚しい横略で滅ぼされ、すでに六川より移されていた庄内八幡宮も安源寺も、草間氏の枝腹のもとに朱え、門前聚落の発達を促したことと思われる。

さて、時は移り、武田氏の北信濃侵攻が活発となり、雄族高梨氏の攻略のため、信玄は山之内地方に調略の手を伸し、高梨政頼の中野館も自落に逐へ込まれたので、この地方もその混乱に巻き込まれた。

天正10年(1582)6月、福田氏ほろび上杉景勝が北信濃を席捲することになるとかつてこの地方を逐わざり旧領主が再び還住したが、高梨頼親(政頼の子)もその一人であった。しかし中野の御館には先住者がおって入る事が出来ず、天正10年8月景勝より安源寺を中心とした2000貫文(5000石)の地をあてがわれることになった。その領地は新井・厚貝・安源寺・七瀬・片塙・草間・柴林・牛出・篠井・大熊・六川・波場・押切等の高丘台地と延徳神をめぐる諸村であったようである。

頼親は氏神庄内八幡宮を復興し、旧例にならって10貫文の地を寄進し、本拠を旧城の前に据え、長丘丘陵上の山城を修築し、なお中野御館へ入る日を待望して景勝に運動を続け、遂に天正17年頃その目的が成就したと思われる。

さらにこの地方には草間原に墓址群があり丘陵上に仮摺堂前方後円墳(七瀬)をはじめ多くの古墳が存在する事に注意を要する。

千曲川の東岸を通る国府、都家を結んで越後に至る古代の主要交通路が腰巻辺の渡を目指して進み、ここを渡って川西通り班地山脈に来た道に迫っていたものであろうことは最近明らかに立証されるに至った。これらの道路はこの道につながる文化と見たい。

今日安源寺部落を通る県道豊野中野線と安源寺、今井を結ぶ道路は明治以降のもので、旧道は片塩部落より台地の中央で長峯通りの道と合し、八幡社境内を北側に添って柳並木の参道を進んで立ヶ花方面に至り、参道をはずれて両安源寺および草間に通じている。

天明8年(1788)の安源寺村絵図(市村忠兵衛氏所蔵)を見ると、現在の県道の部分は墓地であるが、これに接続した上段は畠地となり、ここが今回発掘された安源寺道路である。

(金井喜久一郎)

第 2 章 調 査

第1節 昭和40年以前の調査

明治・大正時代の調査

古来この台地は先史・原史時代の遺物が出土する例が多く、近頃に知られていた。普通作を栽培していた頃は歴も行き届かず、時に遺物が出土する程度であった。

大正初期に編纂された高丘村誌の第9章沿革には次のような記録がある。

「按古太古石器時代ヨリ本村ニ人類ノ居住セシコトハ述々ニ其当時「アイヌ」民族ノ使用セシ器物即チ石斧、石カンナ、石鎌及土器、其原料品等ノ発掘セシフ以テ其住居シタルコトヲ推考スルニ足ル、其ノ遺物発見地ヘ左ノ如シ」

安源寺 — 石原、宮裏及其の他 萩林 — 野池、北原、栗子ノ木 草間 — 中原、大久保、林畦
大正10年前後から収集の普及が顕著となり、素焼きによって30~40cmにまで歴が及ぶようになって、急激に遺物の出土例が増加した。古老の語るところによると、素焼きの破片は邪魔になつて困り、籠に入れて捨てたものである。しかし石器類は珍らしいので保存する者が多かったということであった。

この周辺の家庭では多少はあるが、石斧、石鎌、玉類を所蔵している例が多い。土器類も完形品ないし略々完形品は保存して置く家がある。また、教育資料に資してほしいと多くの出土品は高丘小学校へ寄贈され、現在も陳列ケースの中に展示されている。

この地域の最も熱心な採集者は高見沢伴蔵・小林浜太郎・永井和作・山崎賢一郎・市村忠兵衛・高見沢忠右衛門・片山梅吉氏等であった。

下高井郡誌の調査(下高井教育会郷土調査部の調査)

大正11年10月15日(1922年)発刊の「下高井郡誌」の歴史の項に、有史以前及び原史時代草中で安源寺遺跡関係の「土器石器等の発掘物」として次の表を掲げている。

名称	発掘地	形状・大きさ・品質	伝説	備考	所有者
土器	安源寺	素燒、球形にして口径4寸、赤色なり			高丘尋常小学校
タ	タ	タ	タ	直徑3寸	タ
タ	タ	素燒、破片扁平にて赤色なり			タ

名称	発掘地	形状・大きさ・品質	伝説・備考	所有者
石斧	安源寺	長1尺、巾3寸、厚1寸8分		高丘尋常小学校
◆	◆	長3寸、巾1寸5分、厚6分		◆
◆	◆	形態不完全、合計8個		◆
石鎌	◆	種々の形態あり、合計10個		◆
石斧	◆	長1尺2寸、巾3寸		市村忠兵衛

この期の下高井地方の石器類の出土地は59ヶ所、土器類では14ヶ所をあげている。その後下高井教育会は郷土調査部を設け、考古学部門は神田五六氏が中心になって「下高井郡先史時代遺物発見地名並所蔵者表」を作製したのは、昭和14年のことであった。総計121ヶ所に及び、高丘丘陵には安源寺、栗林をはじめ6ヶ所を掲げている。研究調査が行き届くようになって遺物、遺跡の数は2倍以上に達した。

「下高井」出版時の調査

太平洋戦争がいよいよ激烈をきわめた頃、当地方に翻訳された小野勝年氏はこの地域の考古学的調査を続けられた。昭和23年1月上旬から20日に亘って第1次栗林遺跡の発掘を実施され、その調査報告書を中心に下高井地方の考古学的調査の結果を発表された。その中に本遺跡をとりあげて、安源寺遺跡は縄文・弥生・土師に亘る複合一大遺跡であると述べ、それぞれの遺物の実測図投影写真をもって説明された。それによると

「縄文遺跡——安源寺の遺跡は水運の悪い台地である。ここから石鎌を初め石斧・石刀・石皿・敲石・磨石の類が発見されている。ただし、付近一帯は稍々広範囲にわたる弥生式・土師式遺跡であって、それらが混在し、しかも縄文式土器の採集が殆んど行なわれていないため、その性質の解明は今後に期さなければならない。」

「弥生時代——安源寺遺跡は小内神社の北側から道路をへだてた南側におよぶ広汎な地域にわたっている。縄文文化と複合した遺跡であるが、特に北側に濃厚な遺物の散布がみられる。(中略) 遺物は鉈刃、片刃の石斧をはじめとし、石庖丁、有孔磨石、凹石、管状土錐などであり、装身具としては細型管玉、小形勾玉などであり、装身具としては細型管玉、小形勾玉などが数えられる。土器は櫛目、無文、丹塗りが主で、壺、鉢、甌、高杯などをあげることができる。神社の南側は石器類の伴出少なく、土師器に属するものも見受けられる。ここで採集されたガラス玉は土師器に伴うものであろう。遺物は主として高見沢伴成、海谷貞一、神田五六、西沢特准、権原長則氏によって採集されている。」

そして、更に土師・須恵器の出土する主なる遺跡であることを紹介し、遺物の実測図を載せていく。

戰後の安源寺遺跡発掘調査

終戦後新学制が施行されて、義務教育においてもクラブ活動が盛んになった。高丘小中学校でも考古クラブが誕生し、田川幸生氏と金井が指導にあたって、丘陵一帯の表採を中心に活動を開始した。遺跡の豊富なこの地では、少し注意するとザルに一杯の土器片が採集された。縄文・弥生・土

師・須恵・布目瓦をはじめ、石器類が続々と資料室に集まつた。また草間、立ヶ花、栗林に散在する12基の古墳の実測を行つたのもこの頃であった。

時あたかも考古ブームに入らんとする昭和23年秋には長丘古墳、栗林遺跡の発掘調査が行われ、それを手伝つた児童生徒の関心と研究心が高まり、クラブ活動も一層活発になって遺物は更に多量に集積した。現在高丘小学校資料室に保存されている遺物はこの頃集められたものが殆んどである。

昭和26年10月5日から11日までの1週間に亘つて、高丘小学校が主催して安源寺遺跡（清水595番地 地主山崎正治郎氏）の発掘調査を行つた。指導者に神田五六氏を迎へ、田川幸生氏が担当して弥生後期住居址1と土器、石器多数を発掘した。調査後概要を孔版印刷で報告したまま久しく時は流れた。かねてからこの遺跡の重要性を強調していた朝原健氏は、田川氏にその発表を懇意し、雑誌「信濃」14の4（昭和37年4月号）に「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」として報告した。

地主山崎氏が普通烟にりんごを栽培する計画があつて、その移植直前に発掘調査が実施され、発掘面積は26m²であった。遺物・遺構は地表下20～30cmの黒色土層の中に検出され、住居址とおぼしきものは長径1.5m、短径60cmで、柱穴・焼土等も検出されたが住居址としてのプランは確認することはできなかつた。遺物は绳文中期、弥生時代の箱清水式土器であった。その他土師器片、須恵器片が僅少ではあったが出土した。

「信濃考古総覧集成」のための調査

信濃史料刊行会は原始社会から近世初頭にわたる信濃の史料を集成するため、昭和26年からその事業に着手した。信濃考古総覧は大場磐峰博士が監修され、永峯光一氏等が資料採訪に当られた。下高井地区は神田五六氏と金井がこれに同行し、昭和27年7月23日～24日にかけて安源寺・栗林地区的踏査が行なわれた。その後数次にわたって踏査が続けられ、信濃考古総覧に安源寺の資料が登載された。（第3表）

安源寺古窯址の発掘

昭和29年11月中旬から県道拡張工事が行なわれ、字清水584番地（地主山崎正治郎氏）畠の南側断面から窯址が発見された。当時、工事を請け負わされた故永井和作氏から連絡を受けた金井は、11月30日に平野中学校考古クラブの諸君と共に現地に行き窯址を実測した。断面からは須恵器片や焼台に使われた自然石を得た。早速この旨を信濃史料刊行会へ報告したところ、信濃考古総覧上（P.40 遺跡番号422）に登載された。

（金井次）

第2節 昭和40年の調査

国道18号線の新設によって、これらに連なる中野・豊野町の交通量が急増したために10月20日から拡張工事が進められ、3つの住居址が破壊され、遺物も土砂とともに搬出されてしまった。拡張工事の第一期は終つたが、さらに第二期工事の計画のあることを知り、ここに緊急分布調査を実施した。これが昭和40年度の調査である。

分布調査責任者：中野市教育委員会教育長 芳川 敏

分布調査員：中野市立高社中学校教頭 金井次 次 中野市教育委員会事務局 小野沢捷

分布調査参加：長野県立須坂高等学校郷土研究班 金井文司ほか
2名 中野市立高社中学校郷土
クラブ 滝沢次男ほか7名

分布調査地地主：中野市安源寺
高見沢洋蔵・山崎正治郎

分布調査を実施するにあたっては、永井忠重・高見沢忠男・永井虎夫氏等の物心両面にわたってご高配をたまわった。

次に調査経過の概要を述べよう。

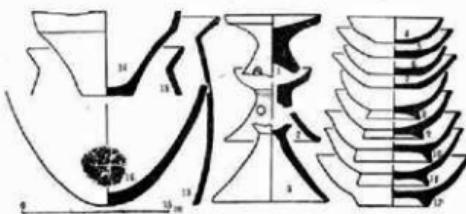
10月23日(土) 金井が中野から帰宅の車内で、永井虎夫氏から「県道拡張工事のため安源寺の庄内八幡宮南側地籍ICブルドーザーが入り、土取りが始まって3日になる。土の中に土器片がたくさんまじっている」という話を聞いた。

10月24日(日) 土取りの土砂がダンプカーで安源寺から草間へ通ずる道路わきにたくさん運ばれないので、金井文司君がそれを見ると、弥生後期・土師器片多数を拾得した。土取現場からは高台付杯を1点と土師器破片の多数を得た。金井は10時から2人の生徒をつれて現地を視察した。1台のブルドーザーがせわしく土取りをし、そのくずされた断面から土師器片を多数採集した。特にB地点には住居址らしく多量の遺物とともに木炭片も出土した。高見沢忠男氏が5年前に温室を造られた折に出土したという壺を見せていただく。地表下50cmぐらいのところから出土し、焼石2個も



第3図 安源寺遺跡調査地点分布図(1:6000)

1. 高丘小中学校施設地 (S27秋) 2. 京址(トンネル式廻設室) 3. 弥生(後期)住居址 4. 土師住居址 5. 土師住居址 6. 大けやき出土地 A-B-C-D 土師住居址(5戸)



第4図 分布調査出土遺物 (1:6)

出土したと話された。

10月25日(月) 安源寺の事情を長野県教育委員会社会教育課文化財係へ電話報告、中野市教育委員会へも連絡する。文司君は高台付近の兜形品を拾得した。

10月26日(火) 文司君は黒曜石製の先土器時代の遺物1点を採集。ブルドーザーで崩された土の中から層位は不明であった由。

10月27日(水) 文司君は土師器片多数を採集。

10月28日(木) 県教委指導主事林茂衡氏来市。市教委事務局で懇談の後現地視察され、金井と打合せのため高社中学校へ。「ほぼ等間隔に住居址の断面がきれいに露出している」と話された。

11月3日(水) 安源寺出土の遺物を水洗いする。午後はその復元を始めたが大部復元ができる資料である。

11月14日(日) 上田市上小教育会館で長野県考古学会秋季大会が開かれ、役員会の席上で金井から安源寺・栗林遺跡緊急発掘調査の必要を説明する。

11月17日(水) 中野市教委の依頼により金井・小野沢は栗林遺跡・安源寺遺跡を視察。土取場の断面に住居址3ヶ所が見事に露出していた。付近の表面採集を行ない土器・石器を得る。永井忠重(市議)から宮裏にある豚小屋建設の折に出土したという弥生後期の壺1点を贈られた。午後川島敏雄氏(湯田中)来院、高台付近1点を贈られた。草間大曲付近の土中から採集された土師片多数を後日贈られると話された。

11月23日(火) 金井文司君と安源寺遺跡の住居址を実測する。写真撮影。

11月27日(土) 午後より安源寺の県道拡張工事予定地の分布調査を開始。市役所の自動車で滝沢次男、小林鶴、山岸善行、田中功、小林賢治、中島庄一、武田耕治君等(高社中郷土クラブ員)参加。A・B・Cトレンチを設定して試掘を始める。(第3図)

トレンチ	地主	番地	遺物	トレンチ規模
Aトレンチ	山崎正治郎	597	打石斧、栗林式、土器・須恵器	1m×4m
B	高見沢伴蔵	619	箱清水式、土器	1.5×3
C	◆	◆	箱清水式(少)	1×2

午後4時30分作業中止。参観者山崎正治郎氏他多数。

11月28日(日) 分布調査の試掘続行。参加者昨日同様。Cトレンチは深さ90cmに及ぶも遺物なく、黒色土層は1.2mにも及んでいた。土手斜面で窯址を予想したが収穫はなかった。Bトレンチは北側は10cm南側は25cmで粘土層となり、昨日に統いて弥生後期土器少量を得たのみであった。Aトレンチは深さ55cmで粘土層に達し、弥生中・後期土器片・土師片多量を検出した。作業開始9時、終了5時。参観者高見沢信秀氏ほか多数。

12月2・3・4日(木・金・土) 高社中郷土クラブ員によって土器洗浄実施。

12月9日(木) 同クラブ員によって復元。

最後に調査の結果を要約してみよう。遺構については高見沢忠夫氏宅前(580番)のりんご園を

切り崩したあとに住居址が3露出した。表土下20cmの粘土層を約15cm掘りくぼめてあった。東西に路々4.5mの等間隔に並び、露出部の長さは1戸およそ4.8～5mである。遺物（第4図1～15・15・16）はここ部分から出土したものである。いずれも時代の下る土師器である。

なお第4図14は水井忠重氏提供の後期弥生式壺である。

（金井次）

第3節 昭和41年調査の契機と経過

緊急発掘調査の計画

前述のごとく本遺跡の重要性は各方面から認識され、関係各位の配慮と協力、激励を受けて、いよいよ緊急発掘調査を実施する運びとなった。

林誠司、芳川、金井、小野沢は現地の調査を数次にわたり詳密に行い、次に示す「発掘調査要項」を作成した。これ等を印刷に付し、官公庁をはじめ、発掘調査担当者に配布して、調査の完璧を期すことにつとめた。

発掘調査設計

(1) 発掘調査場所

主要地方道中野豊野線中野市安源寺地籍計画平面図（縮尺 $\frac{1}{1,000}$ ）に示された該道路用地内のC M 14600 地点からC M 16400 地点に至る距離184m巾員平均17m（総面積3128m²）の付替道路用地内である。

(2) 文化財名

安源寺遺跡（県台帳登録番号第6558号）埋蔵文化財 主として弥生式、土師式窓穴住居址および墓跡

(3) 文化財の状況

埋蔵文化財の包蔵範囲は南北約500m、東西約150mにわたり、その分布密度は濃密である。該用地内の包含状態は現地表から深さ25cmないし100cmにかけて存在し、五基以上の住居址を含む遺構の埋存が予想される。地表の現状は畠地として耕作に利用されている。

(4) 発掘調査の目的および概要

長野盆地内において著名な大遺跡である本地縄は、昭和41年度当初における中野建設事務所施工による主要道路付替工事用地として開発必須の重要な地とされている。よって施工前に学術的な発掘調査を実施し記録保存措置を行なうことにより道路開発と文化財保護の円滑な推進を図ることを目的とする。調査の概要是、発掘面積3128m²を調査対象とし 調査員を含む作業員延288人による発掘調査（発掘面積）を実施する。所要期間は6日間を最低必要日数とする。

(5) 発掘面積：該用地内 837m²

(6) 調査日程

月 日	期 日	作業種別 名称	長 (m)	巾 (m)	深 (m)	面積 (m ²)	
5. 27(金)	第1日	予備調査					
28(土)	2	準備、発掘調査					
29(日)	3	トレンチ掘上作業 Tr A	60	2	0.5	120	
30(月)	4	♦ ♦ B	40	2	0.5	80	
31(火)	5	♦ ♦ C	60	2	0.5	120	
6. 1(水)	6	♦ ♦ D	20	2	0.5	40	
		♦ ♦ E	10	5	0.5	50	
		♦ ♦ F	8	1	0.5	8	
		♦ ♦ G	8	1	0.5	8	
		♦ ♦ H	8	1	0.5	8	
		♦ ♦ I	8	4	0.5	24	
発跡発掘			15	5	5.0	75	
2(木)	7	トレンチ掘上作業 Tr K	4	2	0.5	8	
		♦ ♦ N	4	2	0.5	8	
		トレンチ拡張作業 ♦ ♦ P	4	2	0.5	8	
			30	5	0.5	150	
		(総 計)	(278)			(687)	
実測 測定作業							
3(金)	8	検出調査	第1号遺構	5	5	0.7	
			2 ♦	5	5	0.7	
			3 ♦	5	5	0.7	
			4 ♦	5	5	0.7	
			5 ♦	5	5	0.7	
			6 ♦	5	5	0.7	
			7 ♦	5	5	0.7	
			8 ♦	5	5	0.7	
4(土)	9	実測、測定、遺構の清掃					
5(日)	10	整 理					

○15日間 室内作業による造物の整理・復原・調定(1ヶ月以内) ○20日間 報告原稿作業
(3ヶ月以内) ○30日間 報告書作成印刷 (1ヶ月以内)

安源寺遺跡発掘調査委員会名簿

顧問	中野市長	丸山 久 雄
	中野市議会議長	山田 顯 五
	中野建設事務所長	土屋 年
	長野県教育委員会事務局社会教育課長	村上 富 吉
	長野県教育委員会事務局社会教育課文化財係長	徳永 正 人
会長	中野市教育委員会委員長	大月 松 二

委 員	中野市教育委員	小林沢 義郎
	◆	藤岡 善雄
	◆	宮崎 茂喜
長野県文化財専門委員、中野市公民館長		中村 浩
下高井教育会長		小林 謙暉
中野市安源寺区長		内藤 茂平
中野建設事務所総務課長		小松 政夫
◆ 設計課長		小林 正一
◆ 工事課長		石沢 正
◆ 管理係長		高野 博美
中野市議会議員		高見沢 茂助
◆		小林 小衛門
◆		永井 忠重
事務局長	中野市教育委員会教育長	芳川 錠
事務局員	◆ 社会教育係長	山本 政巳
	◆ 社会教育係	小野沢 捷

調査団編成

発掘調査 責任者	中野市教育委員会教育長	芳川 錠
顧問	長野県文化財専門委員、信濃史料編集委員	金井喜久一郎
團長	日本考古学協会員、長野県教育委員会社会教育課指導主事	林 茂樹
	日本考古学協会員、長野県考古学会幹事、中野市立高社中学校教頭	金井 涩次
副團長	日本考古学協会員、長野県考古学会委員、長野県立飯山南高等学校教諭	高橋 桂
調査委員	日本考古学協会員、長野県考古学会幹事、長野県立諏訪及東高等学校教諭	桐原 健
	日本考古学協会員、長野県考古学会幹事、長野市立下水鉢小学校教諭	森島 稔
	長野県考古学会員、中野市立平岡小学校教諭	田川 幸生
	長野県考古学会幹事、長野県立長野西高等学校教諭	石沢 浩
	長野県考古学会員、長野県立屋代高等学校教諭	小池 正彦
	長野県考古学会員	下平 秀夫
	長野県考古学会員、中野市教育委員会	小野沢 捷
調査員	長野県考古学会員、長野県立丸子実業高等学校教諭	園 孝一

長野県考古学会員、上田市立上田博物館	川上 元
長野県考古学会員	興津 正朗
飯山市立太田中学校教諭	湯本 達保
日本地質学会員、長野県地学会員、中野市立高社中学校教諭	中村 二郎
中野市立高社中学校教諭	綿田 孝
長野県考古学会員	松沢 芳宏
調査協力	中野市立高社中学校郷土クラブ 長野県立飯山北高等学校地歴部 長野県立飯山南高等学校考古クラブ 長野県立中野高等学校歴史研究部 長野県立歴代高等学校地歴部 中野市連合青年団

調査日誌

- 1月21日(金)晴後曇 金井は県教育委員会社会教育課へ出向し、安源寺遺跡の現状について報告する。
- 1月22日(土)晴 中野市教育委員会事務局において芳川・金井・小野沢3人で発掘調査計画について協議する。
- 1月27日(木)晴 小野沢は発掘調査関係について中野建設事務所へ出向し協議する。
- 2月11日(金)曇 読売新聞長野版に安源寺遺跡発掘計画について報道した。
- 2月15日(火)晴 昨秋行なった分布調査の結果を印刷に付し、関係方面へ配布する。
- 2月24日(木)晴 林茂樹指導主事米市 現地視察に芳川・金井・小野沢同行し、発掘計画について協議する。その後中野建設事務所、市当局で趣旨説明を行ない、誤解を得る。
- 3月16日(水)晴 中野建設事務所からの電話で、安源寺の山崎定吉氏宅の土取場に造構らしいものが見つかったと連絡があった。小野沢が現地を視察したが確認できなかった。
- 4月5日(火)晴 林指導主事から市教委宛の電話で発掘計画について連絡があった。
- 4月27日(水) 晴 市教委事務局で芳川・金井・小野沢は発掘計画について打合わせを行ない、要項を印刷する事にした。
- 5月17日(火)曇時々晴 安源寺遺跡発掘調査計画要項を関係方面へ郵送する。
- 5月21日(土)曇 埋蔵文化財安源寺遺跡発掘調査委託契約(委託者中野建設事務所長中屋年、受託者中野市長丸山久雄)を締結する。
- 5月23日(月)晴 埋蔵文化財緊急発掘届出書を提出する。
- 5月24日(火)曇 発掘調査委員会(発掘調査の協力機関) 委員22名および発掘調査団員19名と各学校のクラブを姿図する。
- 5月26日(木)晴 金井・小野沢は最後の打合わせを行ない、関係方面へそれぞれの挨拶をわり

をする。発掘調査本部は安源寺消防団詰所を借りて設置し、清掃して発掘調査に必要な資材、物品等を整備する。本部の庶務担当に阿部弘子さんをお願いする。

5月27日(金)晴 発掘調査を本日より開始する。計画書に従って次のトレンチを設定し、網張りを行なう。Aトレンチ—60m×2m、Bトレンチ—40m×2m、Cトレンチ—60m×2m Dトレンチ—20m×2m。網張り終了後各トレンチごとに長さ10mの区切りをつける。発掘予定地は久しく空地になっていたため雜草が繁茂し畠の畦畔には柴柵。蘆竹株があつて取り除く作業は難行した。午後6時30分終了。宿舎は湯町の翠山館とする。調査団6名、作業員5名。

5月28日(土)晴 8時作業開始 現場で発掘調査委員会委員、調査団員多数が集まつて歓迎式を行なう。Aトレンチの1区と2区の表土下20cmから弥生後期土器片多数を発掘し皆幸先がよいと喜びあつた。特に1区中央部検出の土器片は集積状態であるため「土器窓」と呼んだ。(後の1号土塁址)5区の発掘にも手をつける。Aトレンチ2区の西隅より小形の弥生瓦を得る。山崎賢一郎氏より発掘地周辺から発掘されたといひ弥生式土器5点を借用する。壺形土器、片口土器、高杯片(丹塗)で、壺形土器は1週間ほど前に上段台地の果樹園で令息が耕作の折に発掘されたものである由であった。参観山崎賢一郎氏他多数。調査団8名、作業員12名、高社中クラブ10名。

5月29日(日)小雨 曇天からついに小雨となり作業開始は8時30分となった。粘質の強い土のため小雨でも用具に粘りつき作業は非常に困難をきわめた。昨日に引き続きAトレンチ3区を発掘し、Bトレンチ1.2区の表土剥ぎに着手した。Aトレンチ3区からは弥生中期、闇文中期土器片が割合多く検出され、珍らしいものには青海波文様の須恵器片1点が出土した。Bトレンチ2区の中央部の地下30cmは高台付窓(土師)が出土し、石の配置等から住居址が存在すると推定される。雨が激しくなつたため10時30分に作業を中止し皆残念な面持ちで本部へ引き上げて土器洗いを行なう。午後は細い雨足となつたため1時30分から作業を続行する。所々から縄文・弥生・土師の土器片が出現した。Aトレンチ4~6区、Bトレンチ3~4区の表土を剥ぐ。午後5時作業終了。夕刻より雨は激しくなり、夜半まで降った。参観土屋年氏(中野建設事務所長)他多数、調査団8名、作業員11名、高社中クラブ25名。

5月30日(月)晴 8時作業開始 昨晩の雨に洗われた背陽は陽光に輝き、すがすがしい朝で、作業は進捗した。遠跡周辺の風景をカラースライドに収めた。午前中はCトレンチの表土剥ぎ作業。雨後の土は柔らかく作業は容易であった。

昭和29年秋に県道拡張の折切られた窓址を探したが、南斜面の土塊は一面の雜草、蘆竹株に覆われていてすぐには発見できず、金井旭2名が午前中を費やしてやっとつきとめた。現在の北登りの農道下だつたら半地下式登窓であろうと思つたが、相当の高さを持つ畠地の南斜面(宮裏584番地 地主山崎正治郎氏)であるため、おそらくトンネル式登窓と想定された。

中食時と休憩時間に現状報告と今後の発掘計画について討議する。午後はDトレンチの表土剥ぎを1区から4区へ進めて行くと西端に石組み遺構とおぼしきものを発掘し、土師住居址になるかと推定して拡張していくと火葬された人骨が出てきた。河原の自然石をほぎ等間隔に径30~40cm位の円座に敷きつめた上に骨片を散せている。年代推定の例等の手がかりも得られず途方にくれた。

Cトレンチ3区からは軸口の破片を検出した。中食休みに全員が本部に引きあがたす前にAトレンチ1区の高环1個、Bトレンチ2区の高台付須恵2個が、心なき者の手によって持ち去られていた。作業終了6時。参観市村忠兵衛氏（元市教育長）他多数 調査団11名 作業員15名。

5月31日（火）晴後曇 作業開始午前8時。安源寺遺跡は弥生後期と土師時代の遺構、遺物が中心であろうと思っていたが時代の巾のあるのには驚いた。本日もそれぞれ手わけして発掘調査に当る。

遺跡の発掘に着手。昨日施成部と窓の方向をほぼ確認したので傾斜、方向から窓を推定して畠地の表土を剥ぐとすぐ窓付近の部分が現われた。上部から下へ追って発掘を進めると、窓のほど中央部とおぼしきところに築造当時のままの天井部が残存していた。

Bトレンチでは土師住居址付近と推定される石組み窓を完全に発掘し、その北西部に2個の大壺を検出した。細心の注意を払って住居址の周囲の壁を探したが、ついに発見することはできなかつた。

火葬墓は6基検出され、小砂利の円座上に、しかも傾斜面に階段状になった一般上にあつた。その後の発掘によってその後方に粘土の円座の上に更に3基火葬墓を検出した。火葬墓群を清掃していると、その西側に幼児の頗る自然石が置かれていた。その一帯は土質が柔かかったので不思議に思って振り下げる、頭骨と古銭7枚が出土した。古銭の下限は景定元宝である。更にその南側に下肢骨が4本出土した。その南約3mのところからは1基の火葬墓が発掘され、火葬墓11号とした。1～6号同様に小砂利を敷いた円座があつて、その下には須恵の鉢片が4点検出された。あまり墓址群の発掘が統くので法要をもたらす事がよからうという事になって、急遽大徳寺住職上智仁師を聘して説教をしてもらい、調査に参加している者一同礼拝して懇に弔つた。時に午後5時半後6時作業終了。（第5図） 参観矢野義郎氏（県議）、村上富吉氏（県社会教育課長）、小松益美氏（中野市役員）他多数 調査団12名 作業員15名。

6月1日（水）朝時×小雨 午前8時30分作業開始 高社中郷土クラブの生徒が参加したのでE・F・G・Hのトレンチを設定し表土を剥ぐ。特にEトレンチは県の用地買収地外を含み、高見沢信秀氏の所有地に発展してかかるため試掘の許可を得る。

Eトレンチは4つの群に土器片が密集しており、土塙墓となる可能性が強く、生徒たちは張り切って発掘に従事し成果をあげることができた。時々小雨が降って作業にはさして支障はなかったが、実測図をとるのに不都合であった。

Aトレンチにいくつかの土塙墓を検出し、土師住居址の東側に石組みの炉址を検出した。宿舎翠山館において発掘調査の



第5図 出土人骨の法要



第6図 横内県教育長の視察

現状と今後の調査方針について協議する。参観小林啓輝氏（下高井教育会長）、高見沢茂助氏（市議）他多数 調査団12名 作業員13名 高社中クラブ16名 飯山北高クラブ5名

6月2日（木）晴 作業8時30分開始 トンネル式無段登窓は中央部の天井のところが開通し、床面もほぼ全貌が現われた。窓内の遺物は割合に僅少であった。

土師住居址の石組み窓は全貌を確認され土器・木炭片・灰・鏡等があって、付近に坏類が散在していた。Iトレンチを設定 発掘を進めると土塗基1基を検出し第12号土塗基と呼称する。特に弥生中期の土器片があったのが注目された。

土塗基第1号の人骨取り上げを午後2時から信大香原助教授ほか2名の助手によって入念な作業で行なわれた。下肢骨下から古銭2枚と鉄釘、竹釘10本を得た。古銭はこれで9枚発掘したことになる。人骨は香原助教授によると「中世特有の長頭型で50才を過ぎた男性と推定する」との事であった。埋葬は箱に収め眉葬で北枕にし、頭は西向きだった。Eトレンチには土器片が実に多い。写真と実測をすませて土器片を取り上げるとその下からきれいに4基の土塗基を検出する事ができた。

CトレンチとDトレンチの間に14～16号土塗基を検出した。窓址発掘によって県道側へ落下した土砂を市役所のダンプカーが除去し、6台分を運搬してくれた。発掘期間延長を依頼する。参観大月松二氏（市教育委員長）他教育委員・小林小エ門氏（市議）他多数 特別調査香原志勢氏ほか助手2名 調査団10名 作業員12名 高社中クラブ8名

6月3日（金）晴 8時発掘作業を始める。12号土塗基を昨日に引き続き発掘。長径1.5m、短径1m、深さ0.4mのきれいな遺構を検出する事ができた。Aトレンチ2区南側にいくつかの土塗基を発見し検出に努力する。特に複合した形で検出され、調査団員はじめ参加者から注目された。

窓址は次第にその全貌を現わしつゝあるが、焼きついた窓檻などがあつて作業はなかなか進展しない。残った天井部は幅約80cmで立派なアーチ型を残して振りすすめられた。

Eトレンチの土塗基の発掘を続ける。大小4基の凹みをはっきりと検出する事ができた。各トレンチ、遺構の実測をはじめ。参観横内秀雄氏（県教育長）、土屋伝氏（県監査委員）他多数 調査団11名〇作業員16名〇高社中クラブ6名（第6図）

6月4日（土）曇後雨 午前8時作業開始。午前中は整天で時々小雨が降ったが作業を続行する。Aトレンチ2区南下に土塗基の遺構をみつけ発掘する。4号、5号、6号と命名する。土器片の発見は箱清水式で弥生後期のものらしい。

土師窓址付近のピットを発掘。Cトレンチ1区に土塗遺構を発見し、11号、13号とする。窓址は午前中には発掘を完了し、窓の上下は多少切られているが現存遺構の長さは7.6mであった。全貌を撮影する。Eトレンチは昨日に続き掘削。午後は大粒の雨が落ちてきて、作業は中止のやむなきに至った。本部において土器壳をし、出土遺物の整理をする。

本部に片山宣人氏から弥生後期の大甕片12点、宮島信男氏から須恵大甕片19点、高見沢定吉氏は須恵大甕片5点をそれぞれ提供された。いずれも本遺跡周辺の出土品である。参観市村忠兵衛氏他多数 調査団8名、作業員9名、高社中クラブ5名、飯山北高3名。

6月5日(日)晴 当地の土質は晴天が続くと固くなり、スコップでは刃がたたない。ツルハシで僅か掘れる程度で作業は難行する。また雨が降ると粘質が強く用具、履物に付着してやはり作業は困難となる。本日は昨日の適当なおしめりで発掘ははかどり、その上日曜とあって近隣の高校生中学生の手伝いがあつて大いに進歩した。

Aトレントで土塗4号、5号、6号を発掘。特に塗彩土器が多く、また口辺下に半円形の輪描文様土器片も珍らしかった。

Cトレント2区西端で17号土塗を発掘し小形無文壺形土器2個を得た。完形である。更に北へ拡張すると11時過ぎに骨片の塊り付近に青銅色に輝く利器の一部分を検出した。青銅器が出土したというので慎重を期し、中食後急入りに発掘すると全長21.4cm、刃部12.4cmの鉄製の小柄であった。皆を落胆させた。小柄は腰骨のあたりにあって、頭骨も北に位置して検出され土葬墓2号と命名したが興味あるものであった。

CトレントとDトレント区間に飯山北高生連は14号、15号、16号の土塗を検出。Eトレントはきまる。

金井(喜)顧問は安源寺城址、草間茶臼峯(山城)を視察し、茶臼峯按部で宝篋印塔・五輪塔を発見した。市村忠兵衛氏宅で天明8年(1788)の絵図を見せてもらい、発掘地の南斜面は墓地であったことを発見する。日曜日につき参観者は特に多かった。参観市村孝左エ門氏(市選管委員長)ほか800人、調査団16名、作業員14名、高社中クラブ4名、飯山北高14名、中野高4名。

6月6日(月)晴後晩夕刻俄雨 8時作業開始。6号土塗は栗林式土器片が出土するので注目していたが、5号土塗より一段さがり、径約1.2mのはぼ円形のプランである。A、Bトレントを清掃し写真に収めて実測する。A、Bトレント2区の中間にピットの存在を知り、北方からと土塗6号址から西に向って発掘を進めると一面に土器が散りつめであり大きな土塗ではあるまいかと思われた。4本ピット址と仮称する。4号址付近に太形始刃石斧の刃部破片があった。

人骨の件について信大医学部(松本)へ連絡したところ明日現地へ来られるとの由だった。夕刻俄雨あり。参観市村忠兵衛氏他多数。調査団4名、作業員8名。

6月7日(火)晴 作業開始8時。4本ピット址は発掘が進むにしたがつてその全貌を把握することができるようになった。9号土塗址と命名する。東西に長い隅丸長方形のプランで、上面には後ろように土器片が置かれ、東側に太形始刃石斧刃部破片1点と打製石斧1点を得る。午後1時すぎ信大医学部香原志勢助教授と3人の助手が松本から自動車で来られ、ただちに土葬墓2号の人骨取り上げ作業にからられた。非常に縦密な作業で頭骨、下肢骨4本の取り上げを終了したのは3時50分を過ぎていた。その後火葬場の入骨を蒐集され、医学部へ持参された。夜のNHKテレビニュースで安源寺遺跡発掘が報道された。参観者永正夫氏他多数。特別参加香原志勢助氏3名。調査団4名、作業員5名。

6月8日(水)晴 8時作業を始める。6号土塗址を発掘する。地表下40cmに箱清水式が少量あって、地表下60cmのところに栗林式土器片が20点置かれ、それから約10cmで遺構は終った。更に下層の状況を知るために深掘りすると、縦文前期土器片少量と黒罐石片が出土した。

Eトレンチ全般に発掘する。4基の土塙址北部には箱清水式土器片、古式土器片が多かった。作業終了7時。参観高見沢信秀氏他多数。調査団5名、作業員5名。

6月9日(木)曇後雨 午前8時作業開始。Eトレンチ統括。とにかく遺物の出土量が多いのに驚くはない。9号土塙址の発掘を続ける。土塙の性格が次第に鮮明になってきた。

火葬墓11号の発掘を完了し、遺物を取りあげるとその下に墓址があるらしいので発掘を続けると地表下70cmのところに土葬墓があった。午後2時過ぎ雨となり作業は中止して遺物の整理を行なう。参観永井忠重氏(市議)他多数。調査団4名、作業員4名。

6月10日(金)雨 雨のため作業中止。本部において遺物整理。調査団1名、作業員1名。

6月11日(土)曇 作業開始8時50分。Cトレンチ東端に土塙22号址を検出する。周溝をめぐらし、今までにない大きな規模で直径1.1×0.8mの横円形プランのようである。半分ほど発掘をすませただけで日没になってしまった。周溝寄りに小形無頸壺、土製鍵車を得る。

9号土塙址統括。4個のピットの西側に各々1個ずつのピットを発見する。これで5個ずつの平行の間に9号土塙址が挟まれている事になった。9号址の西中央に枕状の自然石を発見した。

土葬墓4号を続けて発掘するも炭粘土のため作業は困難をきわめた。

Kトレンチを設定。弥生を主体に縄文、土師、須恵片等40点ちかく検出する。参観山崎正治郎氏他多数。調査団6名、作業員3名、飯山北高3名。

6月12日(日)晴 作業開始8時。9号土塙の発掘をつづける。土塙のプランは2.5×1.5m、深さは50cmである。Cトレンチ1区東端の22・23号土塙の発掘を飯山北高、中野高生徒が中心になって行なう。

土葬墓4号址の発掘を続けたが粘土質が強く昨日同様に難航した。人骨を得るも崩れが甚しかった。見取図を描いて念入りに取り上げ、頭骨、下肢骨に別けて梱包する。

Aトレンチ第3区東端で土偶を検出する。縄文中期のものと推定した。付近に土器片、河原石が直径1.5m位の範囲に散布していた。N・P各トレンチを設定する。縄文・弥生・土師の破片多量と須恵器片も割合多かった。参観小林正一氏他多数。調査団8名、作業員2名、高社中クラブ6名、飯山北高14名、中野高6名。

6月13~17日 土器洗いと整理。

6月18日(土)晴 9号土塙址の南側のピット3個の発掘と清掃をすませる。ピットの東より1号には小石が詰めてあり、2号には縄文土器片、3号には縄文打製石斧1点を検出した。更に南側へ拡張すると縄文土器片が數き詰めるように存在した。それら等は縄文中期の遺物であった。

Eトレンチ西北部を拡張する。弥生後期土器片とともに古式土器片多量を得た。参観内藤茂平氏(安原寺区長)他多数。調査団3名、作業員1名、飯山北高6名。

午後からは1時発掘を始める。9号土塙址南側ピット3個を清掃、更に南側へ拡張する。中期縄文土器多量を検出した。

Fトレンチ西北部拡張。弥生後期土器片を主体に古式土器片多量を得る。また石棒(縄文期)破片を発掘した。磨滅の跡があり砥石的な役割を果したのではないか。参観市村寅郎氏他多数。

調査団5名、作業員1名、中野高6名。

6月19日(日)晴 9号土塁址を発掘し清掃する。その規模のすばらしいのに調査団員は目を見張った。土塁基址群中唯一のものである。

22号土塁基はスケールの大きさで注目され、遺物には袖珍小壺、土製品等をはじめ土器片が多かった。

25号土塁基は北寄りのため、その形状全体をうかがえなかつた。しかし周溝をめぐらし、出土物も他とは異なつたケースで興味があった。何かしら女性的なものを感じたのは思ひ退してあろうか。参観小林芳一氏他多数 調査団2名、作業員1名、飯山北高6名、中野高6名。

6月25日(木)晴 安源寺遺跡緊急発掘調査中間発表を午後3時から中野市役所会議室で行なう。

6月25日(土)晴 22号土塁基を精査する。その他残余の個所を試掘した。

6月26日(日)晴 25号土塁基を精査する。周溝西側から太形始刃石斧片1点を得る。9号土塁基を清掃していると西隣りに土塁を発見し24号址と命名する。長径1.2m、短径0.7mであった。実測を完了した。参観北原義吉氏他、調査団5名、作業員1名、高社中クラブ4名、飯山北高5名、中野高9名。

以上6月26日をもって、緊急発掘調査は終了した。その間、日誌の本文中に一々記載しなかつたが特に協力いたたいた方々の芳名を次に記し謝意を表する次第である。

有賀忠治・山本政巳・北川昭一・小野沢巖・堀内芳子・神田誠治・山崎盈・涌田金市郎・金井光正・小野沢京二・小野沢健治・若林繁作・金井正彦・金井文司・田尻二郎・佐々木正大・阿部弘子氏等のほか、中野市連合青年団長松島敏正氏ほか団員の皆さん、高社中学校郷土クラブ長島庄一君ほか22名、中野高等学校社会科クラブ(クラブ長富田久子さん)、飯山北高等学校地歴部長百井憲郎君ほか14名、さらには安源寺区長内藤茂平氏、元地主山崎正治郎、山崎賢一郎、高見沢仲藏氏等、その他地元でお世話を下さった小林正一・永井ちか・山崎三郎氏等。



第7回 調査団メンバー

(金井汲次)

第3章 遺跡・遺物

第1節 トレンチの概要

拡張される県道中野・豊野線の北側に東西に長く並行するトレンチを設定した。途中に宮裏地籍へ登る農道があるので、それを境として、東方上寄りをA、下よりをB、農道西方上寄りをC、下寄りをDと命名した。トレンチの長さはA、Cは60m、Bは40m、Dは20mで、共に幅員は2mである。又、のちにP・N・K・I・H・G・Fの接続トレンチを設け、遺構の広がりにしたがつ



第8図 トレンチ全体図(1:100)

て、A 1 区南方、C 4・5 区南方にそれぞれ掘削区を設けた(第8図)。

Aトレンチ

発掘地点の中央を、県道から宮裏の農地へ抜ける農道の東側に、幅約東西60m、巾2mのトレンチを設定。これを6等分して西から1区、2区、3区、4区、5区、6区とする。

本トレンチの土層は、表土をなす茶褐色土層が全区域を被りほかは、区域によってかなりの変化が見られる。この地区は丘陵の縁辺に稍々近く位置するため、南北に緩傾斜を示し、更に2区及び3区の境界で急にレベルが下り、次第に東側4区、5区、6区へと低くなっている。ちなみに1区を基準としてそのレベルをみると、2区と3区、4区と5区のそれぞれの接続地点では75cm、125cm、6区の中央地点では150cmの差がみられる。

最上層をなす表土層は、1区、2区、3区が約10～15cm、4区、5区、6区が20～25cmで、地点による堆積の厚薄はあまり顕著ではないが、2区と3区の接続地点においてのみ40cmの厚さがみられる。

表土層の下部は、1区及び2区のみに25cmから40cmの黄褐色土層が部分的にみられその下層には黒色土層が厚く堆積している。隣接する3区、4区は表土層下に25cmから30cmの黒色土層があり、更にその下層に黄色土層がみられる。しかしながら、3区においての黄色土層が粘着力に乏しかったのに対し、4区の黄色土層は色調も黄褐色を呈するとともに、粘土状の土質となり粘着力を増している。またこの地層は、4区の後半部から次第に落込み黒色土層に厚く被われてしまう。5区、6区の地層は表土下に黒色土層が厚く堆積しており、その下層部の色調をつかむことは不可能である。

次に遺物と遺構についての大略は、第1区の中央より西側及び第2区の最西端に、弥生式土器片が最も多く散布し、以下第3区、4区がこれにつき、5区、6区にいたってはまことに密々たる状態である。なお、第3区からは縄文時代の遺物が発見されている。遺構は弥生土塙基が1区、2区、3区にそれぞれ1基、3区に2基発見されている。

次に遺物の出土状態及び遺構を地区別に詳述すると、第1区においては表土層中から黒耀石の剝片1点、須恵器破片1点、弥生式土器破片少量の出土をみ、また第2区との境界付近からは小鉄片4点が発見されたほかには遺物はみられない。そこで順次掘り下げるに従って、黄褐色土層中より弥生後期破片が出土しはじめ、特に第1区の西より約3m東の地点においては長さ南北2m、巾東西0.8mにわたりその散布は顕著であり、この土器群の下に堅穴遺構が存在していた。これが1号土坑である。

この遺構（土塙墓1号）に接してトレンチ内東側に電柱吊線用根加丸太が2ヶ所針金で結ばれて、地表下120cmに埋められていた。次に第2区においては、第1区の隣接地と東側の表土層内に、弥生式土器片が若干見られたが、黄褐色土層になるに従い、隣接地を除く他の地域にはみられなくなり、黒色土層においても同様な状態を呈した。

さて、隣接地点の土器破片の周辺を東側に掘り進めると、黄褐色土層中において長さ東西1.5m、巾南北0.9mの範囲で弥生後期の土器破片多数と粘板岩製打製石斧1個が出土し、更に黒色土層まで掘り下げると土器群の形が明瞭となった（第3号土塙）。

第3区は前述した如く、極端にレベルが下ってはいるものの、表土層より須恵器破片4点と弥生後期土器片少量の出土をみ、更に黒色土層より土器群のかたまり2ヶ所（土塙墓7.8号）を検出した。土塙墓7号は、3区の西側1m東寄りに長径東西100cm、短径南北90cmのほぼ四角形で発見され、8号は3区の中央に長径南北110cm、短径東西80cmの長方形を呈してみられたが、土器片の量は比較的少ない。土塙墓8号の東側床面においては何の変化もなく、遺物も須恵器片2点、弥生式土器片3点にすぎぬため更に黒色土層を20cm掘り下げると、黄色土層との境界面で縄文時代の土偶2個体分が胸部を上にして30cmの間隔で発見され、ついでその東側にも打製石斧1点が、また拳大の自然石5個が確認された。

第4区は表土層より弥生式土器片、打製石斧1点が、黒色土層中からは青海波文の須恵器片3点、木炭及び弥生式土器片少量が出土した。また、4区西より3m東の黒色土層地点において巾1mの砂土層があり、周囲を拡張し遺構をつかむべく努力したが、確認するまでには至らなかった。

比較的遺物の少ない5.6区においては、第5地区より寛永通宝1点、黒耀石剝片2点を表面採集し表土をはぐ。しかし遺物の出土なく、黒色土層へと掘り進めたが、僅かに須恵器片1点、弥生式土器片少量、貢岩製の石鏡1点、黒耀石剝片1点及び黒耀石剝片3点の出土をみたにすぎない。また、第6区は表土発掘のみのため出土遺物は皆無である。

（小池正彦）

Aトレンチ拡張区

本拡張区はAトレンチ第1区、第2区の南側Bトレンチとの間に土塙墓群を完めるために拡張した。層序はA、Bトレンチ第1、2区の地層と大差なく、上部から表土層、黄褐色粘土質土層、黒色土層の順となり、厚薄の著しい箇所は殆んど見られない。しかしAトレンチから南側は、Bトレンチに向って傾斜を示すため、土砂の流失を考慮しなければならない。

本拡張区には表土層に弥生式土器の小破片が土塙墓の上部と想定される地点を中心に散布し、黄褐色土層に至り多量の土器破片の出土をみるほか、土塙墓7基（2.4.5.6.9.10.24号）とピット8

側が検出されている。

まず黄褐色土層中にその全貌が明白にされた2号土塚は、やゝBトレント1区側IC近く、Aトレント2区内3号土塚の南西3.6mの地点に存在し、また3号土塚の南東の隣接地点に4号土塚があり、黒色土層と接触する層位においては4号土塚の南側25cm地点に5号土塚が存在する。

この層位と同じものIC24号土塚があり長軸の東側が2号土塚と接觸し、その下部に位置している。これら2.3.4.5.24号土塚の遺物は弥生後期の土器破片ばかりであり、その包含層は表土下、黒色土層直上に最も多く、以下黒色土層、表土層の順になっている。

更に掘り下げるに第5号土塚の西南に近接して9号土塚が発見された。9号土塚の西端部上には2号土塚の一部が乗っている。さらにこの9号土塚と同じ層位に3.4.5.9号土塚に跨されて、10号土塚があり、多くの土器片の出土をみている。9号土塚の東側1.6m地点の黒色土層内においては、本遺跡唯一の円形土塚（第6号）が検出され、弥生中期の栗林式土器破片の出土がみられている。

一方、拡張区の8個のピットの状況をみると、すべて表土層下から穿たれている。うち2個は9号址内も北壁に近く82cmの間隔で東西方向に並んでおり、一つは長径24cm、短径22cm、深さ20cmで舟底状に凹み、一つは長径44cm、短径26cm、深さ22cmを測り、共に不整円形で内部よりの出土遺物はない。

また他の6個のP₁～P₆は土塚9号を中心とした両側——北にP₁～P₃、南にP₄～P₆がほぼ対称に並列し、その形状その他は次の通りである。

このうちP₄～P₆の深さは

上部を除去されたため本来の深度はわからないが、層序からして50cm以上あったものと推定される。すなわちP₁～P₃の底面は9号、10号土塚の土器群表面の層位で止っているのである。

P番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	P内出土遺物
北	P ₁	40	38	45 弥生後期土器片1
	P ₂	46	42	* 2
	P ₃	60	56	* 5
南	P ₄	46	42	打製石斧(14×6)1
	P ₅	50	50	小石(10×8)1
	P ₆	56	56	* (10×12)1

次に各ピット間の距離をその

中心から計測すると、北側P₁とP₂、P₂とP₃共に1.1mで、南側P₄とP₅は0.9m、P₅とP₆は1mであり、南北の間隔はP₁とP₄、P₂とP₅、P₃とP₆がそれぞれ2.9m、2.7m、2.8mの数値を示している。

以上の状態から本拡張区内の遺構を層位的にみると、ピット群がもっとも新しく、次に土塚9号、4.5.24号、3番目に9.10号土塚となり、最も古いのが土塚6号ということになる。

(小池正彦)

Bトレント

Aトレントに平行して、傾斜面にBトレントを東西に40m×2mを設定した。東から10m間隔に

4等分して1~4区とした。地表は以前果樹園、桑園であったということで、廃拾した桑畠の跡が斜面と平行に走っていて、表面はかなりでこぼこしている状態である。

層位はトレンチの南面でみると、1.2区では表土、明褐色土層、黒褐色土層、地山（粘土質の茶褐色土層）という順序で下層に連なっている。表土は一時の耕作も行なわれないまま放置されたので、腐植土で稍々灰色の強いものである。これが約10cmの堆積をしている。

第2層の明褐色土層は、ほぼ平行に続いているが、東方に稍々傾斜していて、厚さは20cmである。その一部には30cmになるところもあるが部分的である。この第2層までは、遺物は殆んどみられず、上方からの流れこんだ土器片が数点発見されたにすぎない。

第3層の黒褐色土層は、稍々粘土質の強いもので、この上部から土師器が認められた。カマドが発見されたのは、表土から30cm前後の第3層中である。当然耕作によって擾乱されていると思われるが、Bトレンチの遺物はこの黒褐色土層中からである。

黒褐色土層は西方から東方にかけて厚くなっている。西端においては20cm、中央部では40cmと測ることができ、2区の東端では落ち込み状の1m×1mのピットとなっている。最底層土 1.6mであった。この地山となっていて、粘土質の強め茶褐色土層である。

1区にみられた遺構はカマド址のみで、Bトレンチの北側壁で石組みを発見し、これを中心に北方に拡張した。カマド址と炉を発見したが、住居址のプランの発見には表土下50cm前後であったこと、耕作による破壊、斜面上における複雑な地層によって、壁はもちろん、床面の認定は困難であった。これに接してAトレンチの拡張区で6号址が発見され、距離的にも、層位的にも本住居址との複合は考えられず、カマド址は住居址の西南隅にくるものと思われる。

第1、2区の出土遺物は、カマド址からの土師、須恵器以外は殆んど破片であって、器形の判るものはなかった。

第3、4区について、層位は表土、黒褐色土層、地山といふ層位を示した。第1、2区でみられた明褐色土層は確認できない。斜面上といふ地形からくる複雑な地層を示している。

第1層の表土は1、2区と同様であって、ここでも10cm前後であった。第2層になると黒褐色土層に連なり、前述したように明褐色土層はみられなかった。第3区でみられた黒褐色土層の堆積は厚く、西方から東方への傾斜を示している。40cm~50cmである。この下に地山が連なっている。第3、4区において遺構、遺物は何もみられなかった。

（下平秀夫）

Cトレンチ

丘陵の南斜面のうち、丘陵上面の宮裏地蔵へ通ずる農道の西方、東西に2m巾で60mのCトレンチを設定。10mを1区画として6区に分割し、東から1区、2区と命名した。

まず層序から触れるならば、第1層（表土）が灰褐色土層で、地点によっては第2層との境に小礫を含み、第2層黒褐色土層、第3層黄褐色粘土層移層、第4層黄褐色粘土層（基盤）と続いている。ただ、第4.5.6区は黒褐色土層を欠き、表土から直接、基盤に連している。また1区の22号土坑付近においては、第1層の次に黒色土層を若干はさみ、黒色土層に移行している。

トレンチの各層の厚みは、地点によりかなりの異同が認められている。各区ごとにその厚みを列

記すると、第1区では第1層50cm、第2層160cm、第3層20cm。第2区では第1層30cm、第2層90cm、第3層15cm。第3区では第1層50cm、第2層40cm、第3層15cmで基盤に達し、第4、5、6区では第1層30～40cmの次に直接基盤に達している。

トレンチ内発見の遺構についてみると第1区で13、22、25号弥生式土塙、第3区内に中世の火葬墓12号と土葬墓3号を検出した。

出土遺物としては、2区南壁に接して窓口を出した以外、とりわけ心地よい遺物はなく、弥生式土器、縄文式中期土器、土師器、須恵器等の土器片が表土と黒褐色土層中に少量認められるのみであった。

ところで、第3区以西に遺構の露呈はなかったが、第4区のトレンチ南壁近くで東西に走る基盤の落ちこみがみられたので南方に拡張してみたところ、中世墓址群（土葬1号、4号、火葬墓1～11号）が列をして検出された。土葬墓1号は火葬墓1～10号の南側に近接し、火葬墓11号は土葬墓1号の南側に発見された。また火葬墓11号の下層に土葬墓4号が認められた。特に土葬墓1号は長方形の土塙の中に頭骨と下肢骨が発見され、伴出遺物として古銅12枚・鉄釘・竹釘数点が検出された。

火葬墓群11基のうち、7基は小腰を30cm位の円形に設けた上に、4基は粘土の円座の上にそれぞれ火葬骨を径20cm程に盛るよう載せていた。1～10号火葬墓付近では、鏡の半次1点と陶器数点が見つかったが、決定的資料に乏しく、11号火葬墓のみ、須恵質の壺鉢が縁に挿まれて出土した。次いで第2区北側を2m×2m拡張したところ、土葬墓2号が見つかり、腰骨の付近に短刀が出土した。墓跡の形跡は無く、崩れた頭骨と下肢骨1が検出された。

2区南拡張区（4m×6m）では厚さ10～15cmの表土の下がすでに黄褐色粘土層となっており、弥生式土塙14、15、16号が黄褐色粘土層中に掘り込まれていた。

黄褐色粘土層（基盤）は当地点まで、現在の地表傾斜に沿って登っていたが、Cトレンチに達すると逆に下っている事がわかった。従ってCトレンチでは基盤が深く、その上層に黒褐色土層が堆積しているので、弥生式土塙13、22、23号は黒褐色土層中に掘り込まれている。（松沢芳宏）

Dトレンチ

Cトレンチと平行して、その南方に同じく2m巾で20mのDトレンチを設定。10mを1区画として東から第1区、第2区と区分した。

Dトレンチは、深さ15cmで表土から直接地山である黄褐色粘土層に達し、何らの遺構も認められなかった。

そこで遺跡の南限をつかむために、CトレンチとDトレンチの間に、1m巾で西からF（4m）、G（5m）、H（5m）、I（2m巾で5m）のトレンチを、南北方向に設定した。

（松沢芳宏）

Eトレンチ

Cトレンチに併行して、同トレンチ4.5区の北部に5m×2mのEトレンチを設定した。該トレンチを設定した理由は、本発掘調査以前に行なった試掘時に、多量の土器破片が出土したからである。

該トレンチの層位は、北壁においてみるとおおよそ次のとおりである。

表土、黒褐色土層(第1層)、黄褐色土を混じた黒土層(第2層)、黒土層(第3層)、黄褐色土層(第4層)、黒土層(第5層)に区分され、表面より地山である粘土層に到達するまでに約12mの深さがある。

近接するCトレンチの層位(表土層の下に黒褐色土層を挟み地山に到っている)とは大きく異っていて、ここに本トレンチに現れた遺構が何等かの意図をもって造成された特殊な施設ではなかろうかと推定される一端がある。そして、それは東壁のセクションに顕著に示されている。すなわち、Cトレンチに近接する部分においては、表土層には若干の黒褐色土層を含む地山に達しているのに對して、土器が多量に出土する北側寄りでは、北壁に認められたと同様な層を形成しているからである。従ってEトレンチ地域は意図的に掘りくぼめた箇所と推定できるのである。北壁を切り崩してさらに北部を追求したならば、一層明確に把握し得たと思われるが、種々の制約からなしえなかつたのは残念である。

遺物の出土状態は、第1層黒褐色土層において弥生式土器片が多量に出土した。その出土土器の含まれる層の厚さは、15~20cmで、その下に無遺物層である黄褐色土を混じた黒土層、黒土層の2層を含めて、第2遺物包含層である第4層黄褐色土層に連なっている。黄褐色土層における遺物の出土量は、黒褐色土層よりもはるかに多量であった。黄褐色土層出土土器の時間的位置は、箱清水式に属するものである。器形としては壺形土器、小形壺形土器、高杯等がその主体をなしており、それら土器の殆んどは横積ないしは逆さの状態で出土した。

黄褐色土層の土器を取り除くと、若干の黄褐色土の無遺物層を含めて、土器の密集した状態の場所が4ヶ所確認された。このあたりは他の土塗上部の土器出土状態と同様であり、その下部に土塗のある事を察知させた。黄褐色土層の下部は第5層の黑色土層である。土塗は黄褐色土層を掘り込み、造成されている。黑色土層の下部は地山の黄色土層になっている。

(高橋桂)

F・G・Hトレンチ

F・G・Hトレンチは、すべて表土から直ちに黄褐色粘土層に達しており、その深さはFトレンチで20cm、Gトレンチ20cm、Hトレンチ15cmであったが、Iトレンチに限り表土下25~55cmの黒褐色を挟んで基盤に達していて、同所からは弥生式土器12号が検出された。その他の各トレンチからは何等の遺構、遺物も発見されなかった。

(松沢芳宏)

K・N・Pトレンチ

AトレンチとBトレンチの間に南北3.5m、巾1mのトレンチを3本設定、西側よりK・N・Pトレンチとする。各トレンチはAトレンチおよびBトレンチの第3区と第4区を直結するものである。

K・N・P各トレンチの層序は、Aトレンチ3区、4区と同じく表土層が25cm前後あり、その下層に黒色土層が相当厚く堆積しており、これはBトレンチ寄りになるに従いさらに深くなっている。

さて、各トレンチともに遺構の存在は認められず、遺物もさほど多くはない。Kトレンチにおいては表土より若干の弥生式土器片の出土をみ、黒色土層において打製石斧1点がAトレンチ第3区

寄りにみられ、Nトレンチにおいては黒色土層中より弥生式土器片少量と土師器破片3点、生焼きの須恵器片1点が出土し、表土層からの遺物の発見はなかった。またEトレンチの表土層より弥生式中期の土器片、土師器片、青海波紋打文の須恵器片が若干みられ、黒色土層からはほとんど土器破片の出土がなくなり、かわりに打製石斧1点、黒曜石製石器3点、黒曜石の剥片8点の出土をみたが、いずれもAトレンチ第4区に近接して発見されている。

(小池正彦)

第2節 トレンチ内出土遺物

先土器時代遺物

遺物はかなり広い地域から採集することができる。今回の調査においては、表層より数点の資料を得たのみで、1次的な包含層は確認されずに終った。したがってここに報告する資料は表層および表面採集の資料によっている。

安源寺から採集された石器は2群にわけ把握される。(第9図)

(1) 安源寺I群石器

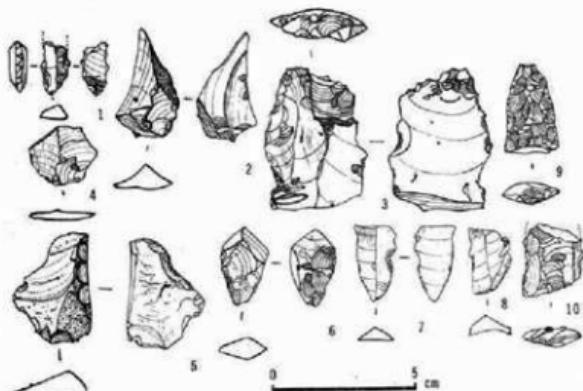
器

B. ナイフ形石器(1)

分厚い小形の黒曜石製剥片を素材としており、主要剥離面は再び平行に加刷され、ネガティブに調整されているのが特徴である。両側縁は殆んど直角に刃溝しが施されていて、基部調整も入念に行われている。尖端部を失しているが、小形の切り出し形ナイフである。

D. 使用痕のある剥片(2) 図示したものは打面の方向の一定しない剥片を用いたものであるが、2次調整は基部に若干見られる程度で、その他には認められない。正面左側縁に著しい使用痕が観察されるが、剥片の形態から考えられるのは、右側縁の直角に近い自然面を背部とした切り出しナイフ様の石器であったかとも思われるものである。黒曜石製。

C. 彫刻器(3) 黒曜石製のかなり大形の削った石刃を用いた凸形整形彫刻器である。打面の方向を調整打し凸出部を作出した意図を読みとくことができる。ナイフ期終末に通常に検出される彫刻器



第9図 トレンチ内出土先土器時代石器(1:2)

である。

d 不定形振器(4・5) 4は小柄片の一端に直線的な振刃部を持つもので黒縞石製。5は右側縫に抉入状の援刃部を持つもので、抉入状振器とも考える。安山岩製。

e 直剪鐵の要素をもつ石器(6) 図示したものは基部調整は入念に行われ、先刃部は剝離されたそのままの鋸へ鋼錐を残している。基部にはピッチ様の付着物を認め、嵌着されたことを物語っている。黒縞石製。日本列島ではナイフ期終末に現われ、近くは、それに類似したものが信濃町伊勢見山(註1)、あるいは諏訪湖底曾根遺跡(註2)で、遠くは九州(註3)に多い石器である。

f 石刀(7・8) 7・8とも黒縞石製である。ともに石刀技法の存在を示している。周縁に刃とぼれが観察される。

(2) 安源寺Ⅱ群石器

a 植刃(9・10) 安源寺部落の農業小林芳一氏が採集されたもので、植刃というべき性格の石器である。2点とも黒縞石製で、9は両面加工の尖頭器の折れのようにみられるが、基部および尖端部を意識的に折り、その断面に細部の2次加工が施されていることから、尖頭器の単なる折れと区別される積極的な理由がある。10にも同様なことを認められる。植刃の出現は今のところ縄文最初期に位置付けられていて、新潟県本の木(註4)、小瀬ケ沢(註5)の各遺跡にその例を見ることができる。しかし、この2点のみで他に採集された遺物がないため、Ⅱ群の石器は一応その性格を明らかにしない。

(川上 元)

- 註(1) 須口 勝之 「伊勢見山遺跡調査概報」国学院大学考古学第1研究室刊 (1964年)
註(2) 小林 達雄
註(3) 藤森 実一 「諏訪湖底曾根の調査」 信濃第12卷第7号 (1960年)
註(4) 彦浦 茂介 「佐賀県伊万里市平沢の石器文化」 史学論叢12号 (1962年)
註(5) 戸沢 光則
註(6) 中山 淳子 「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」 越佐研究第12号 (1957年)
註(7) 中村 孝三郎 「小瀬ケ沢調査」 長岡科学博物館考古研究室調査報告書 (1960年)

縄文時代遺物

かつて、昭和28年に小野勝年氏は「下高井」の中で安源寺遺跡について触れられ、「安源寺の遺跡は水便の悪い台地である。ここから石器を初め石匙・石斧・石皿・敲石・磨石の類が発見されている。ただし、附近一帯はやや広範囲にわたる弥生式土器式遺跡がある。それらが混在し、しかも縄文式土器の採集が殆んど行なわれていないため、その性質の解明は今後に期さなければならぬ」(註1)と述べられている。

以後10余年を経た今日、ここにその一端をうかがう機会を得た訳であるが、今回の調査でも遺物の主体は弥生時代関係のものであり、縄文時代の出土遺物はごく限られた地点において土器(早・前・中・晚期)・土偶・石器(石縛・石錐・打石斧・磨石・凹石・石棒片)が亂状態で出土しているにすぎない。また、その内容も資料としては極めて貧弱なものであり、当遺跡の文化的様相をうかがい知るにはなお不十分なのである。むろん出土遺物以外の住居址等については確認されなか

つた。以下各出土遺物について述べておこう。

(第10図) 繩文土器(1~14)はいずれも破片で50片余り出土しているが、そのほとんどは前期と中期土器に限られている。その他のものでは、早期に押型土器1片、晚期前半土器1片が認められた位である。出土土器中、比較的量が多い前期・中期土器には次のような形式併行の土器が含まれる。

(1) 繩文前期土器(1~5)

1・2とも胎土に横縦を含み、1はボタン状突起、竹管工具による施文の特徴から神ノ木式に相当する関東的なもの、2は羽状繩文施文の黒浜式併行土器であろう。3は口縁に爪形を施文した焼成良好な土器で、前期型式の特徴を有す。5はCトレンチ出土の黄褐色・雲母混入土器で、施文構成等からして、前期末蹲ヶ峯式に比定されよう。

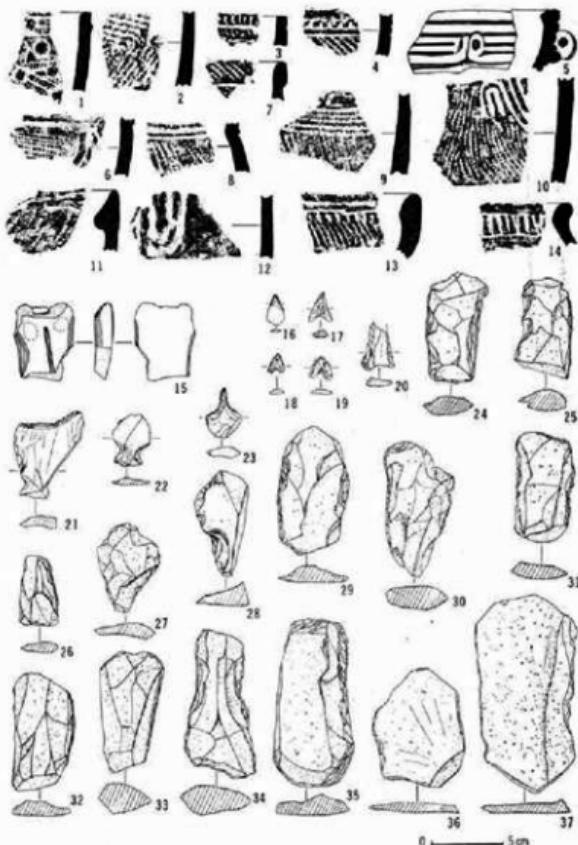
(2) 中期土器(4~6~14)

前期に比較すると土器片数は増加している。4・6は中期初頭型式土器の施文構成と共通する。7は口縁が特徴的であり、中期型式に固定されよう。8・9は中期中葉に併行するもので、8は多く北陸的な趣をとどめている。10~14は加曾利式に併行するもの。破片数からすれば加曾利式が最も多い。

(3) 土偶(15)

Aトレンチ3区出土のもの。乳房を欠き、脚部のみを残す平板な形で、黄褐色を呈し、焼成は極めて粗雑であると共に、胎土に雲母類を多く混入している。施文は体表面中央に浅い沈線が一本存し、中期に通有する一般的な土偶である。この他に土偶足部の破片が1個出土している。

(4) 石器類(16~57)



第10図 トレンチ内出土繩文遺物(1:4)

a 石鏃(16~20) 全てで5点出土している。材質に黒曜石(17・18)、粘板岩(16・20)チャート(19)を用い、形は16以外無類である。19は鉄形鏃に相当する。全般に粗雑な整形である。

b 石匙(21・22) Cトレンチ出土の21は頁岩質、Aトレンチ出土の22は珪石の材質を用い、形は2つともいわゆる扇形の模型に属す。この形は関西地方に分布するものと類似し、関西的要素の波及を類推することができる。21は原石部分を多く残し、整形は粗である。22はつまみのくびれに磨着材が附着している。

c 石錐(25) Aトレンチ出土のこの一点だけで、珪岩質の材質を用い、整形は精緻である。

d 打製石斧(24~37) 打製石斧は出土石器類中最も多く、50点以上を数える。しかしこの中には縄文前・中期にみられる特徴とやや趣の異なった粗雑な整形を施している弥生時代の打石斧が混在していて、中には区別しがたいものが多く、注意しなければならない。材質はほとんど頁岩であるが、硬砂岩質のもの(57)等もある。形の特徴として最も多いのは縄文中期にみられる短曲形のものである(24~26・29・31~34)。この中でも刃部の整形によって、いろいろの特徴を指摘することができる。また他に27・28・30等のように比較的小形で、前期あたりに認められそうな先端が尖る形のものも目立つ。56・57は整形面が少なく剥片石器に相当するが、中期初頭頃のものに類似したものがある。55の例は先端部を局部磨製したものである。

以上の外に凹石2個、石棒の小破片1個が出土している。また以前には磨石斧・石槍・石皿・玦状耳飾等の出土が知られている。(註2)

以上、縄文遺物についてみたが、これらの出土地点は大体Aトレンチに多く集中しているものの、いずれも弥生時代遺物に混在した状態で散乱出土している。したがって資料はかき集められたような遺物であったが、それでもある程度の文化的特色をうかがうことができた。先にみた如く、出土遺物は大体縄文中期に集中し、水便の悪い台地道路は中期遺跡立地的一般性と共通している。また土器様相の一端は、関東地方の要素を有す一面、北陸地方からの影響も認められたし、他に関西地方に分布するものと通有する要素も把握されている。このことは文化的内容が千曲川下流域地方における一般的な大勢とそれ程差違を感じさせていないことを示すものであろう。(関孝一)

註1 小野跡年地「下高井」長野県埋蔵文化財発掘調査報告I(194頁)

註2 信濃考古館蔵(上)地名表

弥生式時代遺物

トレンチ内で発見された弥生式土器破片はその殆んどが土塙墓の上面に置かれていたもので土塙墓に所属しない土器片は極めて少量である。

出土した場所は表土下の黒色土層上面で、住居址などの特別な造構内の出土ではない。ただ分布箇所はAトレンチ、Aトレンチ西半の拡張区およびBトレンチ内発見の土師住居址附近で、遺跡の東半分に限られていることや、土器片が一部を除いて中期後半に位置する型式に属していることなどが注意される。なお、土師住居址の北には同じく中期後半と考えられている6号土塙があるので、

ここに掲げた土器片の一部はその土器群の散逸したものかとも思われたが、整理した結果関係は無からしく、やはり遺跡の東半部には小規模な中期後半の包含地を認める事が妥当と考えられた。ちなみに採集された14片の出土位置は1号址附近(第11図11)、3号址附近(4.5.7.14)、7号址附近(1.5.6.8~10)、24号址附近(2.12)、土師住居址附近(15)で、したがって6号土塗址は同時期の遺物包含地域内に設けられていたことになる。

1、2は口縁部破片、口唇部とひとつの裏面には施文が押捺されており、裏面上には捺描きによる波状文がうねっている。1は直口縁と思われるが、2はそのカーブから飾られた脛につく。栗林遺跡や松本城山遺跡に類似を見る。3~8は壺頸部破片、細かい筒文地文の上に捺描きの横線文が続いている。ただ6はその横線を引く施文具が原始的な櫛状器具に代っている。9は壺最大腹底部位に近い破片、捺描きによる重山形文が整形用の刷毛目擦文上に置かれている。描力はもう大部弱くなっている。10~15は壺形土器破片、10は飾られた脣の主文様であるコの字重ね文様の一部で、13は同文様の末端部分であり、コの字重ね文様の一番芯になる縱線が屈折しているところは栗林第二次調査出土の大形文様と同一である。この底部破片は12号土塗の壺と同様な胎土、焼成をとており胎線性が認められている。11~12は腹部破片、棱形的な文様で整形されているが、その施文具は未だ櫛に移行していない。14は後期の壺形土器、上腹部破片でこの同類は丘トレンチの18号土塗で出土している。細かい捺描波状文を横走させ、その下に半截同心円文を置いている。

なお、この他土器以外の遺物としては打製石斧があげられる。縄文時代遺物中に図示してはいたが、これについては後章で詳述する。

(桐原 健)

土師期遺物

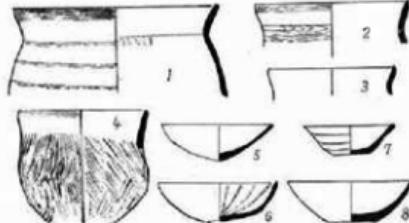
各トレンチから土師、須恵器の出土をみた。須恵器の器形の判別できるものではなく、全て破片であった。Bトレンチの土師式住居址からの出土品については、項を改めて報告するので、Bトレンチ以外の遺物を報告する。(第12図)

(1) 壺形土器(1~4)

2・3はCトレンチから出土したもの



第11図 トレンチ内出土土器片(1:6)



第12図 トレンチ内出土土器部(1:6)

のである。胎土、焼成はそれほど良くない。色調は明褐色である。口縁部が稍々外反する。口縁部には指による整形痕がみられ、2には頸部にヘラで削り取ったような整形痕を残している。1はAトレンチからの出土である。胎土には雲母が混入され、焼成は良い。色調は茶褐色である。ゆるやかに外反し、肩部が稍々張っている。頸部が短く、まきあげ痕がみられ指頭による整形がある。

4はBトレンチからの出土である。胎土焼成もよく、明褐色を呈する。小形壺形土器である。底面は鉈による整形をしている。体部は内外共に刷毛自痕が著しい。

(2) 壺形土器(5・6)

5はAトレンチから出土したもので、焼成はそれほど良くない。色調は稍々赤褐色を呈し、鉈状工具による整形痕がみられる。6はBトレンチからの出土である。胎土焼成は普通である。口縁は稍々外反する。内面は擦により黒磨している。色調は明褐色である。

(3) 环形土器(7・8)

胎土に砂粒が混入しているが、焼成共に良好で、赤褐色である。口唇部が稍々外反しまきあげ痕が明確で、底部は糸切底である。

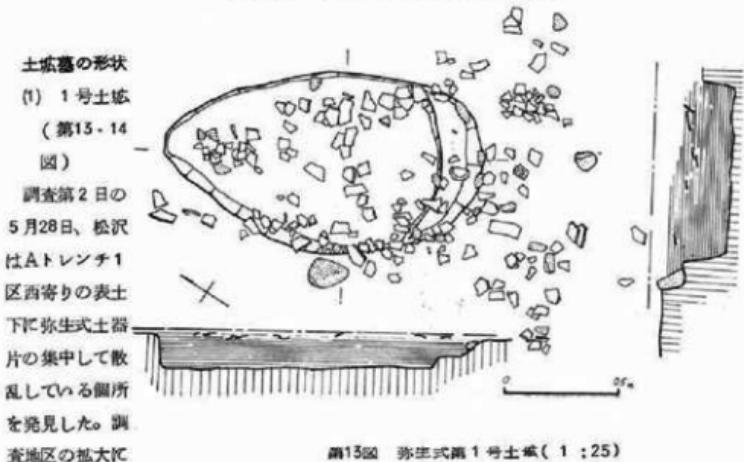
以上各土器についてみてきたが、いずれも出土地点を異にし、セットとはならないが、その属年を考えると、壺形土器、环形土器に糸切り痕がみられ、圓分式に併行するもので、城ノ内第6様式(註1)、平出第5様式(註2)以後と比定されよう。壺形土器(6)もやや浅く、城ノ内第6様式に近いようである。

(下平秀夫)

註1. 岩崎卓也「城ノ内」東京教育大紀要8

註2. 大島義雄著「平出」平出追跡調査会(朝日新聞社)

第3節 弥生式時代土塙墓の調査



第15図 弥生式第1号土塙(1:25)

ともない、田川がその板を受け継ぎ発掘を続けた。当時はまだ土塗墓である事が明らかでなく、一応露呈した土器片を取り上げた。完形品は1点もなかったが、この下方には更に土器片、石塊が存在し、より広く散布していることも明らかになったので拡張調査を続けた。

その結果、蛇紋岩質の小形磨製石斧1点が山積している土器片中から発見された。（第38図4）その位置は後に記す土塗墓内の頭部辺とおぼしきところである。次いでこの土器片を取り上げるにあたり、土器片集中地区の土質が軟かく黒色の強い点が不審をよび、桐原の協力でこの下に土塗墓の構築されていることが確認された。土塗墓の形状は船底形で、底面はほぼ水平に近いが後部の端は若干ではあるが高く上っている。

この造構は黒土層中に築造されているにもかかわらず、壁部と底部は黄褐色の粘土をはる事によって堅く造られている。また、数個の河原石が土塗墓周囲に配してあったが、特に中央左側の石は拳大の大きさを有していた。右側については残念ながら電柱吊線用根丸太埋設工事による壊瓦で確認できなかったが、おそらく同様に存在したことであろう。

土塗の規模は長径144cm、短径80cm、深さ19cmで大人ならば仰臥屈脚が考えられる。なお、下方から発見された土器片から2つの高环が復元された。（第41図44・45）（田川幸生）

(2) 2号土塗(第15図)

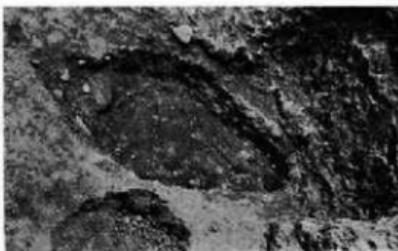
Aトレント西半の南方拡張部に発見された。この付近は土器片の散乱が激しく、土層も搅乱していたため確認は困難を極めた。その事由は、後に発見された9号、24号土塗と重複していたためである。

土塗上面の土器は殆んど小破片であったが土塗内部の土器群は环部、脚部などで、（第43図116・117）その外に拳大の河原石が中央と北部に5個存在していた。特に中央の河原石は稍々大きいものであった。

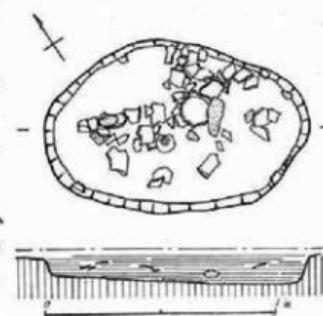
土塗の規模は長径120cm、短径80cm、深さ15cmで、プランは梢円形である。土塗の周辺はやわらかく当初は確認が困難であったが、壁と底部共に黄褐色の粘土で固められていたことは明確であった。（田川幸生）

(3) 3号土塗(第16図)

Aトレント第1区の東寄りに位置している土塗で、



第14図 弁生式第1号土塗



第15図 弁生式第2号土塗(1:25)

1号土塗の状況と類似している。この遺構の方が土器片の散布状態は密で、壺形土器の完形品が3点（第45図107～109）と打製石斧が1点発見され、住居址発見の組みさえ持たせていた。

これに対して土塗内遺物は僅少で、壺形土器、胴部破片が南壁下に散乱している程度であった。土塗は東西に長い兩丸方形で、長さ140cm、巾50cm、深さ15cmであった。底部の北半と北壁は黄褐色の粘土がはられて比較的堅いが、底部南半及び南壁は土質が軟弱で土器を敷いたり差し込んだりして補強されていた。（田川幸生）

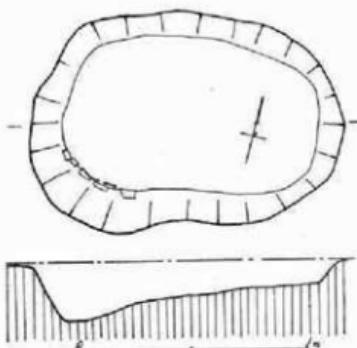
（4）4号土塗（第17図）

Aトレンチ第1区南方拡張区も東寄りで、3号、4号、5号と小土塗墓が集中している地点である。そのため確認は手間どり、上層部の土器をまず取り上げ、次いで遺構内の土器を取り上げ始めて確認した土塗墓である。内部は粘土で固めたり張ったりした様子もなく、從って土壇の色の変化も少なく、土塗内部の黒色土は竹べらの触感だけで掘り上げた。

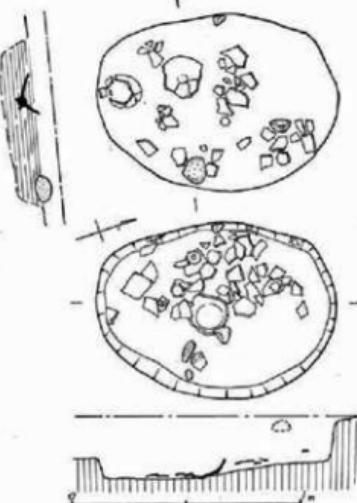
内部の遺物の状態は他の例と同じように土器の破片が散乱しているが、上層部には少なく大部分は底面に近く落ち込んでいた。壺形土器の破片が多く、だいたい2ケタ分と思われたが復元は不可能で、たゞ上層に近く高环1点（第45図115）が完形を呈して置かれていた。石器は1点であるが、北壁より打製石斧の発見をみた。また石器ではないが遺構中央部左右に拳大の川原石が置かれていた点は1号土塗墓と類似している。規模は稍々小形で長さ110cm、巾80cm、深さ25cmの短橢円形を呈しており、床面は地形にそって南北方向へ稍々傾斜をしている。なお、この土塗の下からは後に10号土塗が検出された。（田川幸生）

（5）5号土塗（第18図）

この土塗も土塗集中地区の1つで、4号土塗の南に隣接している。この付近は土器片の散乱



第16図 弥生式第3号土塗(1:25)



第17図 弥生式第4号土塗(1:25)

がはげしく、ずっと南西方へ続いていた。この結果、土塗の西壁及び南壁の一部はついに確認できなかった。土塗がこのような状態であるから、これに所属する遺物も確実には把握出来ず、土器は殆んどが小破片で下層に移ってもこの状態が続いた。石器としては中央部から発見された石錐がある。土塗のプラン、規模は隅丸の長方形で長さ140cm、巾80cm、深さ20cmであった。(田川幸生)

(6) 6号土塗(第19図)

Bトレンチ第1区に発見された土師(新)期の窯址付近から、先行土器の破片が検出されたので、松沢と小野沢が下層を掘り下げたところ弥生中期栗林式土器片がまとまって出土し中期に遡る土塗が予想され、田川も加わって調査のち確認した。

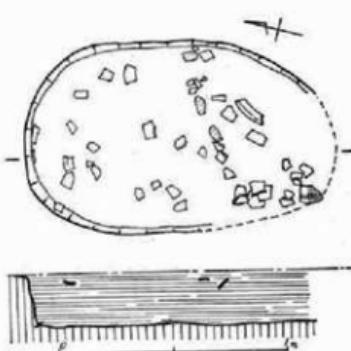
黒色土層中に構築された本土塗はべつに粘土で固めた様子もなく、周囲と比較して稍々黒色が強く歎弱を感じる程度の差異で、触感、色感を勘かせて形状を明らかにした。遺物はあまり多くはないが、栗林式を主体とした土器破片が全面に散乱していたが、やはり底部に近く中央部に集中している。河原石の配置を見るに、遺構中央部左右に大きいものが置かれ、若干の小石をまわりに配してある。

形状はほぼ円形に近いもので、他の後期に位置する土塗とは若干異っている。規模は長径120cm、短径100cm、深さ10cmで床面は南へやや傾いている。本遺構では唯一の中期に位置するものなので注目された土塗である。(田川幸生)

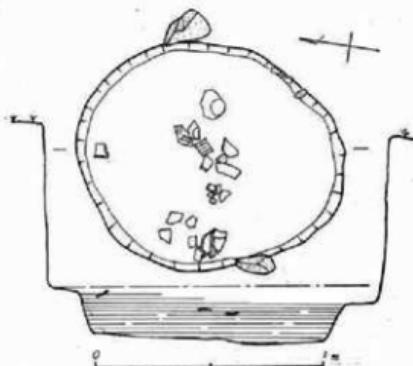
(7) 7号土塗(第20図)

1号から6号までの土塗は、黒色土層中の構築になるものであるところから、非常に苦心したが、この土塗は傾斜した粘土層の中へ切り込んで作られているために、プランは明瞭であつた。その位置はAトレンチ第3区の西端である。

遺構内における土器破片の散布状況は、中心部にその密度が高く、一部は拡張壁外にも及んでいたが、他の周壁付近には遺物は少ない。浅い土塗のため土器片は底部までついている。図示



第18図 弥生式第5号土塗(1:25)



第19図 弥生式第6号土塗(1:25)

できる土器は第41図の54・45くらいで他に四石1個が中央部より発見されている。土塗の規模は110cm×90cm、深さ10cmで、不整な両丸方形をとる稍々小形のものである。

(田川幸生)

(B) 8号土塗(第21・22図)

Aトレンチ5区内で7号の東に発見されたもので、安原寺土塗群最東端を画する土塗である。この付近になると土塗の分布も疎らで7号との間隔は4m前後である。

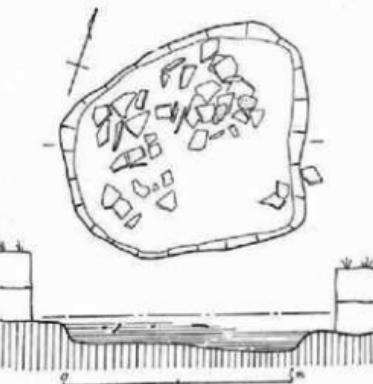
土器は土塗墓内だけに集中していたが、その量は少なく、細かに碎かれた赤色塗影の壺1ヶ体分と甕1ヶ体分、それに完形を呈する高环(第43図118)1点程度である。

土器を取り除き6cmほど掘り下げるとき土塗墓の底面である。土塗床面は斜面にそっているため若干南へ傾斜している。7号址同様に粘土層の上面に底部を置いてるので、堅緻であり壁も比較的容易に検出できた。規模は長径110cm、短径90cm、深さ18cmの両丸方形をなし、主軸方向はN-152°-Sをとる。

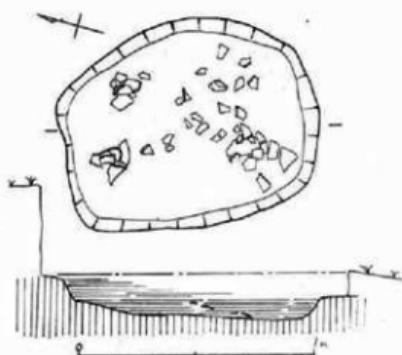
(田川幸生)

(V) 9号土塗(第23~26図)

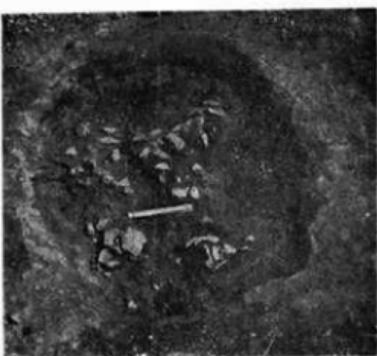
本址はAトレンチ第1区の南方拡張区内に位置し、その長径は東西2.4m、短径は南北に1.5m



第20図 弥生式窯 7号土塗(1:25)



第21図 弥生式窯 8号土塗(1:25)

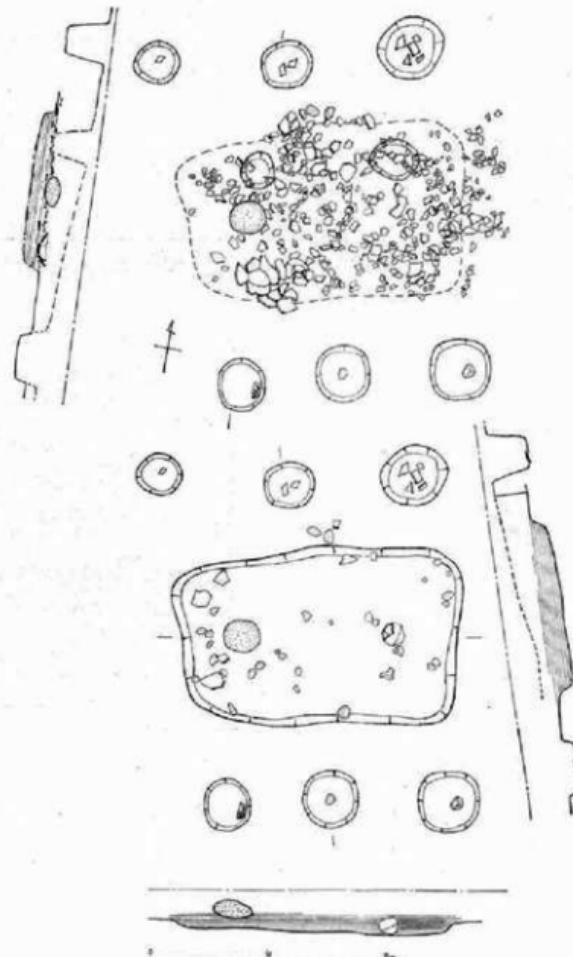


第22図 弥生式窯 8号土塗

で、土器群上面から底部まで 15 ~ 26 cm で、黒色土層内に掘りこまれた床面平坦な兩丸長方形の土塗墓である。(第23図)

現地表面から床面までの深さは 55 cm で、表土層が 10 ~ 15 cm あり、次へて黄褐色粘質土層が 10 cm 見られ、その下層に 10 ~ 15 cm 厚みの遺物密集包含層があり、さらに床面まで遺物を少し含んだ黒色土が 15 cm にわたって堆積している。

発掘の経過にしたがって遺構を詳述すると表土層では遺物は弥生後期土器の小破片が散点見られた程度で、この層を除去すると、黒色土層中に黄褐色粘質土層が方形の縁郭をもつてあらわれ、そのうちの一隅には、相当に大きい自然石の埋蔵している事も知られて、この下に何らかの遺構 - 土塗の存する事が予想された。



第23図 弥生式兩？号土塗(1 : 50)

そしてこの層を剥離すると黒色土があらわれ、その上面には土器破片が大量にくまなく散布し、

その厚さは10~15cmをかぞえるほどで、散布範囲は東西2.8m、南北1.7mで、これまた長方形形状の輪郭を形成していた。

主要遺物の出土状態を西部、中央部、東部に区分し、西側から順次みると、南西側に壺形土器大底部が原形を保持した状態で破壊されて置かれ、その破片が50cm²に散布しそれに接して東側に底部径12cmの壺形土器底部が逆さまに、その近くにも3個体分の底部がいずれも逆さまの状態で散乱してみられた。

また、大底部の北側24cmの土器密集群最西端中央地点に、長径54cm、短径30cm、厚さ18cmの錐状模様のある自然石がおかれ、その周辺部からは特に多くの木炭片が出土した。

この自然石の北側には土器胴部の破片が多量に散乱していたが、境界を意味するような遺物はこの層位からは確認できなかつた。しかし、下層においては底部に穿孔された大形高坏の坏部(第41図46)の出土をみている。

土器群の中央部中央地点には穿孔された高坏の坏部(第41図47)、壺形土器底部がそれぞれ1点検出され、北側においては長径12cm、短径8cmの自然石が1個あり、ここより北は土器片が少なくなっている。

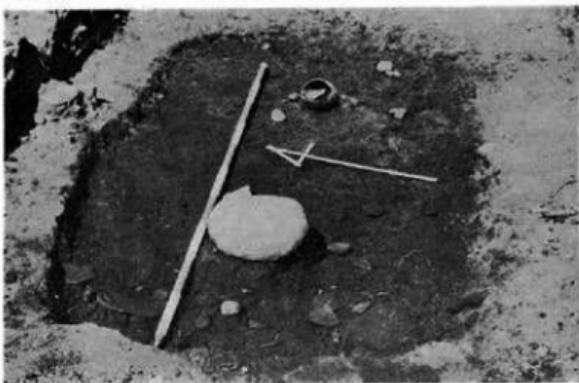
一方、東部においては多くの貴重な遺物の出土が目立つた。(第24・25図)。まず、神珍的な小形壺形土器(第41図59)、太形始刃石斧の刃部破片2点(第38図1.2)、石斧の



第24図 弥生式第9号土器底部破片出土状態



第25図 弥生式第9号土器底部破片出土状態



そばに壺形土器の底部2点があり、ともに破壊され逆さまの状態で出土したが、そのうちのひとつは最初底部のみ逆さまに置き、その中央部に人為的な圧力を加えて打碎したものと想定されている。また、やや下方、床面に近接して口縁部を欠いた箱清水式の壺形土器（第41図38）が拳大の自然石3個とともに出土している。なお、このほかに土製筋轆車の破片1点が整理中検出されたが、その出土地点は遺憾ながら不明である。

主要遺物については以上であるが、遺物包含層において遺物量が圧倒的に多かったこと、土器片のほかに拳大の自然石が相当数みられ炭化物（木炭）が少量ではあるが一面に存在したことなどは注意されることである。

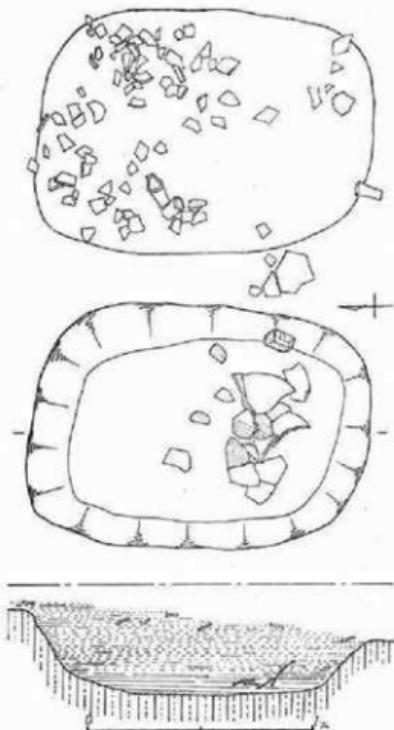
さて、遺物包含層下をさらに掘りすゝめると木炭まじりの黒色土層となり、遺物も僅少で、土塙の床面には粘土を覗いた点など見られる。しかし、黒土の床面は敲打して固められたものらしく、容易に検出する事ができた。（第26図）。

なお、壁外の施設についてはトレンチの項で既述したが土塙基長軸に平行して北壁南壁外それぞれ50cm離れた地点に相対する6個のピットが発見されている。径は50cm前後で壁はほぼ垂直であり、黒色土層上面から穿たれ、40cmで終わっている。ピットの底には土塙上面を被っていた土器片の一部が検出された。

また、同様なピットは土塙内北壁寄りにも2ヶ見られ、その底は黄褐色粘質土層上面でとまっていた。土塙より時期の下る遺構の一端でもあろうか。（小池正彦）
(1) 10号土塙（第27図）

Aトレンチ西半部南方拡張区で1番最後に発見された土塙である。9号土塙の北に近接しており、その北東隅と南東隅に4号、5号をのせている（第27図）。地表から土塙までは約45cmの深さがあり4号底からは12cm、5号底からは7cmの深さがあった。

土塙は長軸を南北にとり、その大きさは長軸1.5m、短軸1.1mを数え、隅丸長方形プランを呈している。壁高は北端で35cm、



第27図 發生式第10号土塙(1:25)

南端で25cmを数え、塙底はゆるい舟底状に凹んでいた。塙は、亜黑色土層中に掘り込まれたものであり、塙内の土層は粘土の混じる黒褐色土が大部分を占め、塙底上わずか10数cmの厚さに黒褐色土が存していた。

土塙最上面においては土器片が 1.3×1.5 m の範囲に散乱していたが、土器片の並ぶ範囲は必ずしも土塙上にとどまらず、土塙の外側に稍々はみ出している状態であった。これらの土器は壺形土器の細片を主体とし、高壺脚部の破片が比較的多くみられた(第41図29～31)。

これら壺や高壺の破片群の下方は、無遺物層となっており、深さ20cmの塙底付近に至って下腹部を欠損した大形壺形土器が検出された(第41図28)。これは東に向って押し潰された状態で発見され、周囲に他の遺物は無く、ただ拳大の安山岩砾が3ヶほどみられるのみであった。

(松沢芳宏)

(11) 11号土塙

Cトレンチ1区で22号土塙の上部にその一部がかかるて発見されたもので、赤色塗彩された壺1ヶ体分と壺形土器の破片若干が一ヶ處にまとめていたために土塙であることだけは確認されたが、浅く、後世の搅乱が著しいためにプラン、規模等について明瞭にすることは出来なかった。

(松沢芳宏)

(12) 12号土塙(第28・29図)

Cトレンチ1区の南

側に、それに直交して

南北に長い工トレンチ

($2m \times 5m$) を設け

た。このトレンチは南

に向って傾斜し、地表

面の平均傾斜度は8度

である。

層序の状態は、表土

である黄褐色土層が北

側で5cm浅く、南側の

傾斜の強い所では25cm

と下降するに従へ、漸

次堆積が深くなつてい

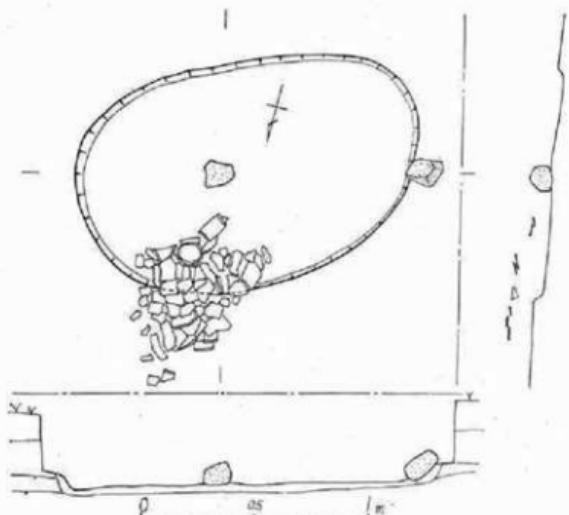
る。第2層には黒色土

層が10～15cm、第3

層には黒褐色土層が10

cm、基盤層として黄褐

色粘土層が最下層に、



第28図 弥生式塙12号土塙(1:25)

地表面とはほぼ同様の傾斜を示しながら認められている。

第12号土塗址は、このIトレンチのほぼ中央に長径1.5m、短径1mの長軸円形のプランをもって発見された。長軸の方向はN-65°-Eである。本土塗址の確認は、床面及び側壁面に約5cmの厚さで固く張られていた黒色土を若干混入させた黄褐色粘土の張り土によってあって、それによると、土塗址は第2層の黑色土層上面から10cm下方のところから基盤層上部まで掘り下げ先記した張り土で側壁及び床面を補強させている。壁高は北側で5cmと高く、南側では3cmでこれは最少の数値である。土塗址床面は南向して3度前後のゆるい傾斜をしている。

土塗墓内の遺構としては、長径15cm、短径8cm、高さ10cmの角の比較的よくとれた複輝石安山岩塊が中央よりほぼ西に偏した所に床面に接して、また、長径19cm、短径15cm、高さ10cmの複輝石安山岩塊が壁面に接して発見された。遺物は土塗北壁下に直徑約35cmを計る範囲内に弥生式中期後半に属する壺形器破片がいずれも小片で発見された。出土層位はいずれも土塗址床面より10cmから15cm上に位置した黒色土層中に見いだされ、土器片を境として、その上下には地層の変化は見いだされなかった。

出土した壺形土器は、復元の結果口縁部分から底部にかけて半壊された形で、かつては北壁に寄りかかる如く置かれていたものと考えられた。
(笠沢 浩)

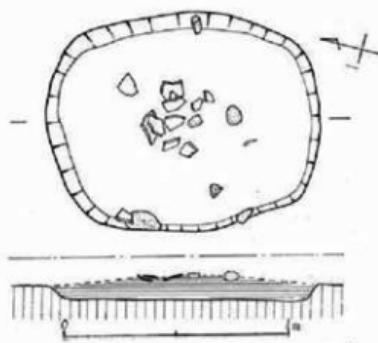
(13) 15号土塗(第30図)

本土塗はCトレンチ1区の西端で、25号土塗から5mほど離れている。長軸1.2m、短軸1mの隅丸長方形プランを呈し、壁高は8cmで底面は水平な状態であった。

土塗は地表から約20cmの深さで、黒褐色土層中に造成されたもので、塗内に少量の炭片の混じる濃黒色土が充満していた。塗底上10cmの間隔を置いて、多少の土器片と小砾の並



第29図 弥生式第12号土塗



第30図 弥生式第15号土塗(1:25)

ぶ面があり、並中央に遺物が集中していた。土器はほぼ壺1個体分で上半分だけ復元できた(第45図104)。

西壁において、径15cmほどの縁と径8cmほどの小縁が認められ、また東壁にも径7cmの縁1個がみられた。意図的に配置されたものかもしれない。(松沢芳宏)

(14) 14号土壺(第31図上)

Cトレンチ南側に設けた拡張区(Fトレンチ)において第15号、第16号土壺と接して発見された。それらは第12号土壺とほぼ同様の傾斜地に構築されていた。

14号土壺の長軸はN-30°-Eで、そのプランは南西部において変化をもつ不定形円形である。プランの規模は長径80cm、短径62cmである。現地表面から床面までの深さは23cm、壁高は北部で高く10cm、南西部で6cmである。出土遺物は後期弥生式土器で、器形をうかがうことのできるものは口縁部に輪目文をもつ赤色塗形の壺形土器片5点及び高环破片1点、壺形土器破片4点である。いずれも復元不可能である。これらは本土壺のほぼ中央に床面より10cm程上部に集積されて発見された。(佐沢 浩)

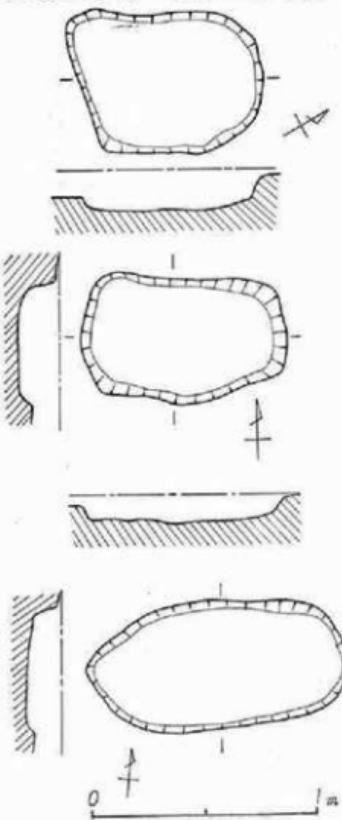
(15) 15号土壺(第31図中)

14号土壺の下方2mの所に発見されたもので、長軸N-90°-Sである。長径90cm短径60cmのほぼ隅丸方形のプランをもつ。地表面からの高さは20cmであり、壁高は5cm前後であるが、北側の壁高は15cmと高い。出土遺物は後期弥生式壺形土器1ヶ体分と思われる小片24点と壺形土器片2点とともに復元不可能であった。(佐沢 浩)

(16) 16号土壺(第31図下)

長径1.2m、短径0.6mの長楕円形プランの土壺で、長軸の方向はN-85°-Eである。表土から床面までは北側で最も深く20cm、南側では浅く12cmである。壁高も北側で高く10cm、南側では5cmである。床面は船底形をもちながらも、約5度の傾斜で北から南にかけて傾斜している。

出土遺物は後期弥生式の壺形土器片30余点であ



第31図 弥生式第14号(上)第15号(中)
第16号(下)各土壺
(1:25)

り、復元されうるものは皆無であり、出土状態は14号土塙址とはほぼ同様であった。（徳沢 浩）

(17) 17号土塙

Cトレンチ2区に発見されたもので、搅乱がいちじるしく、プランを明瞭に把握することのできなかつたものである。土塙上面には他の例と同様に土器破片が散布し、壺形土器破片が主体で中形のもの4ヶ体分ほど、高环も2ヶ体分の破片があつた。

（徳沢 浩）

(18) 18号土塙(第32・33図)

長軸150cm、東壁寄りの巾の狭い部分で50cm、広く西側の部分で80cmの椭円形を呈する土塙である。深さ10cm。底面は黄褐色土層を堅く固め、土器破片を敷きつめた状態になつてゐた。西部の壁の北側には拳大の石が数個置かれていた。

壁は黄褐色土層でつくられている。出土土器についてみると、完形土器は殆んどなくいずれも破片であった。高环の脚部が比較的多く出土している。

（高橋 桂）

(19) 19号土塙(第32・33図)

長軸90cm、短軸70cmの低座椭円形を呈する土塙である。深さは15cm。黄褐色土層に底面が造成されている。壁は黒色土層である。この壁中には土器破片や石塊が多く認められた。この土器破片と石をもつて壁を固めたものであろうか。土塙内出土土器は全て破片である。この他、注目すべきは非常に細かくそして直ちに破壊消滅してしまつたが、骨片と思われるものが検出された。

（高橋 桂）

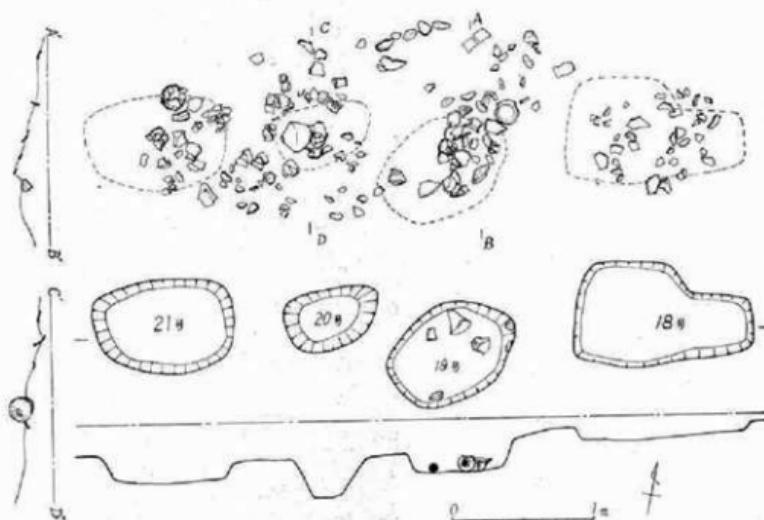


図32図 弁生式第18～21号土塙(1:40)

(20) 20号土塙(第32・33図)

長軸70cm、短軸40cmの橢円形のプランをもった土塙である。深さは25cmで18号、19号土塙より深い。底面は粘土で固めている。壁は19号土塙同様に黒色土層であり、土器破片を使って壁面を構成している。この土塙の上部で、箱清水式の完形壺形土器が横転した状態で出土した。(高橋桂)

(21) 21号土塙(第32・33図)

長軸90cm、短軸70cmの橢円形をとる土塙である。この土塙の上部の土器は他の土塙上部にみられた土器の量より少ないので、底面には土器破片を敷きつめ、土器破片を欠く部分では黄褐色土をもって固めている。深さは25cmである。壁中には19号、20号に認められたと同様に土器破片が置かれている。Eトレンチの頂でも記述したが、これら4つの土塙は幅2mの狭い範囲内にほぼ一列に並んで黄褐色土層下に発見された。規模、主軸、方向とも同一ではないが、土塙上面にさして厚くはない無遺物層の黄褐色土層が敷かれている点だけは共通している。

この層について、私見では土塙を造成した後にこれを覆うために敷きつめたもので、その上辺に各種の土器を配置せしめたものと考えている。

(高橋桂)

(22) 22号土塙(第34・35図)

本遺構は周溝をもつ土塙で、Cトレンチ1区東端で検出され、25号とともに土塙墓群の中心に位置している。これは黒褐色土層中に造成されており、地表面から遺構面までの深さは斜面上方(北側)で45cm、下方(南側)で20cmを数えた。

周溝の輪郭は2.4m×2.4mの不整潤丸方形で、溝の巾は北端の狭い所で20cm、南西隅の広い所で40cmであり、深さはほぼ一定し15cmであった。溝の断面はU字形を呈していた。次に南東隅では小さな突出部が認められ、その巾40cm、深さ10cmを測った。

溝中には濃黒色土が充満し、土器と拳大の石が多くみられたが、特に土器はほぼ一定の間隔を置き、周溝がカーブする所に集中していた。

主な遺物として、北西隅に小形無頭壺の完形品1個(第45図155)と土器片数点、北東隅に劔鉗車状土製品1個と土器片数10点、南東隅またはその穿出部内には高环台部破片1個と土器片10数点が発見された。これらの遺物は周溝底より若干浮いた状態で出土した。周溝の内側で



第33図 弥生式第18-21号土塙 上面
土器の被積状態

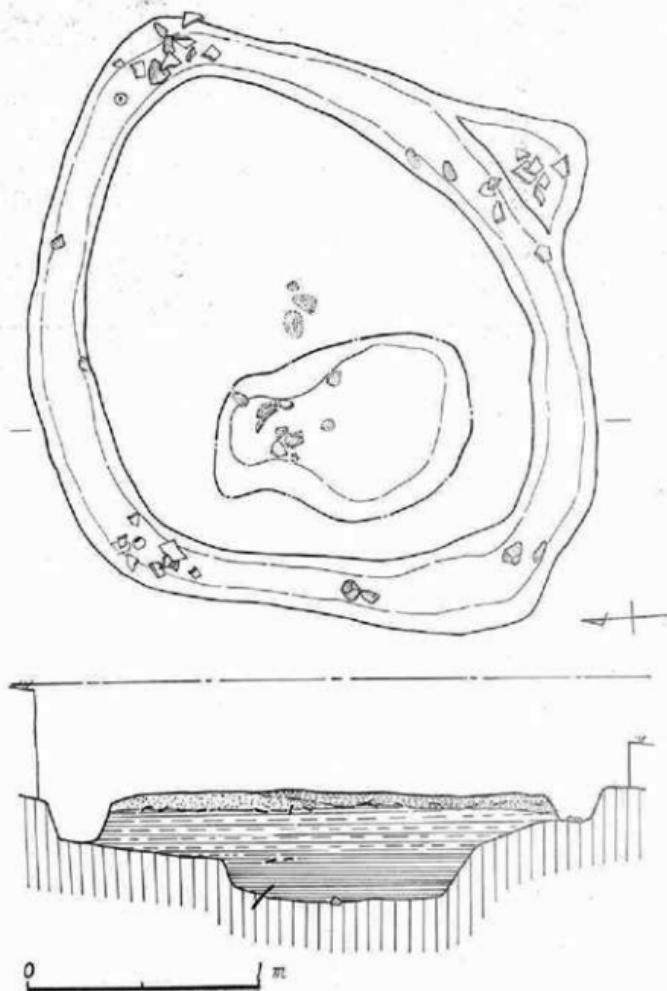


圖34圖 弐生式第22号土城。(1:25)

は土層は2層に分けられる。まず第1層として粘土と褐色土のミックスした層が見られたが、北側半分では、厚さ8~10cmの純粹な粘土層が堆積していた。またこの粘土の一部は周溝底に小さな塊となつて点在していた。



第1層から第2層に移行する所で

第35図 弥生式第22号土塙上面

は、土器片が平面的に散布していた。これは破片だけであり、他土塙の最上面での土器散在状態と近似し、周溝内に見られる土器遺存状態とは性格を異にしている。第2層は粘土質黑色土層であるが、下部に移るに従い、黒色の度合を増していく。この土層は20cmの厚さで黒褐色土層に達していた。この黒褐色土層面が後記する第1次の底底で、周溝底と同一面をなしている。

1次底底はゆるやかに中央に向って傾斜しており、中心より西に片寄って濃黒色土の落込んだ主體部土塙が存在していた。土塙は長径1.1m、短径0.8mの楕円形を呈し、南北に長径を置いている。塙の深さは20cmで、塙底の形状は緩やかな舟底状であった。塙内の濃黒色土中では数10点の土器片が発見されたが、特別な状態ではない。ただ小石が圓形の狭い部分に集まり、加えて大形土器片1個が底に直立てていた等、何か偶然ではありえないような感じを受けた。

さて、ここで現状から本遺構の造成過程について推定してみると、まず大きな第1次塙が掘られたのち、その底底からあらためて小さな主體部土塙が造成されたものと思われ、その土塙上に土が積まれ、ある高さに至って土器片が置かれた後、さらに粘土と褐色土が盛られたものと推定される。

次に本遺構の周溝は、第1次塙の外縁と一致し、また第1次地底底を掘込んでいないことから、周溝の存在が疑われる場合もある。だが前記したように、周溝内の土器遺存状態は、第1次塙内における第1層、第2層間の土器遺存状態と性格を異にしているのだから周溝が襲撃されているものと考えられる。しかし、本周溝が計画的に掘られたものでないだけはいえよう。周溝の造成された過程は次のように想像される。

主體部土塙に厚く盛られた土は第1次塙底の大半に盛られた状態となる。その土のゆきとどかない所は低い外縁として残るのであるから、逆にそれを利用して周溝が造られているものと思われる。従って本周溝は、土塙に土が盛られると同時にめぐらされた溝といえるだろう。（松沢芳宏）

(25) 25号土塗(第36図)

前記した22号土塗に近接して、23号土塗が認められた。これは周溝を回らした土塗と推定されるが、後世の搅乱を受けていたため、明瞭に把握し得ない状態であった。斜面上方(北側)は道路用地外であるので未調査であるが、調査済みの部分から判断して周溝の規模は $5\text{m} \times 4\text{m}$ 程度と推定され、長辺円形をとるものと思われる。

周溝のレベルは22号と同一面であり、また同じく黒褐色土層中に造成された遺構である。ただ主体部と思われる土塗の掘られているレベルは周溝の掘られている面と同じと思われる。

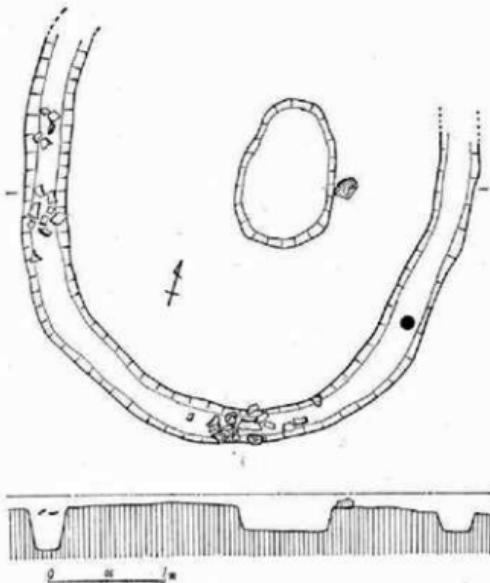
溝の巾は広い所で 40cm 、狭い所で 30cm であり、深さは左側周溝の斜面上方で 45cm 、他は約 15cm と場所によってかなりの差異がある。溝中にはやはり濃黒色土が入っており、土器片の存在している位置も第36図に示すように地点により集中している。

周溝内側の中心より稍々東に位置して、長径 1.3m 、短径 0.8m の主体部と思われる橢円形土塗が掘り込まれていた。しかし、この付近が最も他遺物混入の激しい地点で、須恵器片、土師器片等が箱清水式土器と混在しさらに決定的なものとして窯跡が発見された。周溝内発見の遺物は箱清水式土器に限り、また土塗の位置も適当であるので、土塗が周溝と関連した主体部であることは推定できる。(松沢芳宏)

(24) 24号土塗墓(第37図)

本土塗墓は9号土塗墓の西側 60cm の地点にあり、その長径は東西に 1.2m 、短径はもっと巾広い東側において 0.7m を示し、その深さは 20cm 前後で平坦の床面を呈するややくずれではいるが、隅丸方形の土塗墓である。

現地表面から床面までの深さは $60\sim 68\text{cm}$ で、表土層が 10cm 被り、その下層に 35cm の厚みをもつ黄褐色土質土層がみられる。表土層内での遺物出土はなく、次の黄褐色粘土質土層中より弥生後期の箱清水式土器小破片がすこし出はじめると、その出土状態は全体的に散



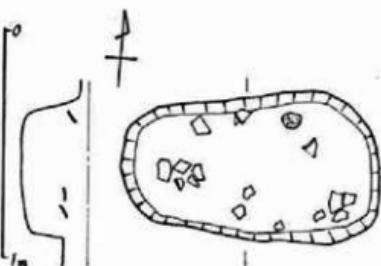
第36図 弥生式塚25号土塗(1:50)

布しているのではなく、土塗墓上部を中心とした地域に限られている。しかもその下には黒色土層が堆積しており、この接触面に弥生後期の大きな壺形土器破片15点と高坏破片1点および拳大の自然石2個が発見されている。高坏を復元すれば南西隅に坏を上にして据えられていた。

さて、土塗墓内部には木炭の混合した黒色土層があり、その壁は厚さ1cmの粘土で被われ、しかも土器片が粘土の中にくい込んでいる。このことは床面においても同様であり、弥生後期の小破片散点が平坦部の薄い粘土上にみられる。

第57回 弥生式第24号土

(小池正彦)



第4節 土塗墓の考察

東日本における弥生式墳墓の研究は昭和14年の「多方遺跡」(註1)や「岩橋山遺跡」(註2)の調査に始まる。これらの墳墓は西日本のそれが整棺墓・配石墓・支石墓・土塗墓と種類あるのに対し、いずれもが土塗墓であったので、弥生式墳墓研究の焦点からいさか外れた存在であったが、現在までに50年に近い歴史が形づくられていた(もっとも、多方遺跡の調査者である田中国男氏は祭祀遺跡と解され、岩橋山や新田山ではその出土した土器により焦点が当てられていたため、東日本における弥生式時代の墳墓——共同墓地として考究されるには25年の杉原教授の発表まで待たねばならなかった(註3))。

以来、西日本に比すればその数々たるものがあるが、同種資料の集成が進み、50年には東日本の弥生式墳墓に関する二つのレポートが発表されている。(註4)

ただ、考えねばならないところは、その一人・亀井正道氏の掲げられた資料10例のうち、8例までが弥生中期に属し、地域も相模・下締・常陸・下野・上野・磐城・岩代など関東地方とそれに接する太平洋岸域に偏っていることで、この時点における東日本弥生式墳墓の研究は時期と地域が限られたものであることが知られる。なお、その墳墓——土塗の様相は小規模な円形プランで相当の深さがあり、うちからは乳幼児の遺骸を納めた甕棺や供獻祭祀用の完形を保つ飾られた壺、或いは勾玉・管玉などの玉類が発見されている。

50年以降、関東地方では引き続いて良好な資料が増加を見せており、人面土器の発見が相次ぎ、その例にも埋葬と関係ありとする考察がなされたこと(註5)や、天神前(註6)や出流原遺跡(註7)のビット内から成人骨を納めた壺が発見されて複葬の事実が明らかにされたことも特筆いたさねばならないが、これと共に36年頃から従来のそれらとは時期・性格を異なる墳墓の発見が始まったことも注意いたさねばならない。36年に下津谷達男氏は野田市堤台遺跡(註8)で、38

年には静岡県浜北市芝本遺跡(註9)で周溝を繞らす遺溝の発見と、39年には大場豊博士による八王子市宇津木の方形周溝墓の発掘が行なわれた。(註10) 時期はいずれも弥生後期も末であり、宇津木遺跡に例をとれば万形土塚を廻んだ周溝中から穿孔されて明らかに仮器としての性格が与えられている土器が一定の間隔を置いて発見されている。次期——古墳時代の墳墓に至る變がおぼろ気ではあるが勞働としてきたのである。

これらの発見が機となって、同様例は五指を屈するに至り、長野県においても40年の8月に飯山市須多ヶ峯遺跡で小判形の周溝を繞らした2ヶの土塚墓が発掘され、その1基内からは鉄鏡や便玉製勾玉1種が検出された。周溝内からは弥生後期の壺・高杯・甕が一定の間隔をとって出土している(註11)。また同年秋に行なわれた中野市栗林遺跡の第三次調査(註12)においては、従来、土器が大量に出土するも住居跡の遺構が跡星できず、「土器溝」と称されていた遺構が土塚であろうと云う見極めがついた。そして、昭和41年、県道長野・中野線の付替工事が中野市安源寺地籍で行なわれるに至り、同地に存する安源寺遺跡の緊急発掘調査が行なわれて24基のばる土塚墓群が発見された。東日本における弥生後期の墳墓様相を明確化する一資料が加わったのである。

土塚墓のあり方

安源寺遺跡の土塚は現在判明しているところでは24基であるが、26年発掘の遺構(註13)も土塚墓と考えられるに至ったので、50基前後はこの辺一帯に存するらしい。斯様な遺跡には全面発掘調査が求められるのであるが、緊急発掘調査の故に僅か4本のトレンチ設定に留まってしまった。しかし、その後における土取り工事中の観察によれば土器片の大量出土が見られなかったとのことであるから、工事区域内の土塚数は前記の23基に抑えて良いものと思われる。

即ち、21号以西、8号以東には土塚の無いことから土塚墓群東西の広がりが判り、D・Bトレンチでは未発見であったところからその幅も大凡は既定でき、この墳墓群は延徳沖の沖積地を臨む丘陵南線(水田との比高差17m)から5mほど離れて幅20mほどで長さ70m前後のベルト状に構成されているものと思われた。現在のところ、分布密度の高いところはAトレンチ西半部の南方強張区で、9号を中心とする24・5・10・4・3号、少し離れて6号・1号がある。これに次ぐのがEトレンチで、18号から21号までが一列に並んでいる。もっとも23基の土塚は土器様相から3期に区分され、また9号を中心とする7基の土塚はその切り合の状態から更に詳しい前後關係が判明しているので、一時期に限って見る時には70mのベルト内に散在構築されていると解するのが妥当である。なお、集落との関係については土塚墓の時期細分後で触れるので、ここでは沖積地に面した丘陵南部に構築されていることと、工事終了後、カッティング面に埋められた黒土層の落ち込みから、土塚墓ベルトの北方に接して溝状遺構が存したらしいことだけを注意しておきたい。

土塚墓の様相

個々の土塚墓の様相については、前節での報告に詳しいが、要約すれば次頁の表の如くである。プランは栗林式土器片を出土した6号だけが円形で、他は橢円形乃至土丸方形をとる。

土坡	位 置	平面形	主軸方向	規 模 (m)	幅員 (cm)	高 度	床面材質	土坡内部の状態	そ の 他	相対年代
1	A 1	構 円	N-32°-E	1.4×0.8	19	壁上端に小窓配列、四隅付に縫1ヶ	粘性の黄褐色土を入れて盛打	上面に土被覆下 面に散布		3期
2	A1底	*	N-122°-S	1.2×0.8	15		南へ傾斜	上面に土被覆下 面に縫1ヶ、上部に リ-10cmまで 盛らこむ	9・24号 の上に薄く 盛らる	4*
3	A 1	隅丸方	N-75°-E	1.4×0.5	*	南壁下部に縫配列	西へ傾斜	上面に土被覆下 面に散布		4*
4	A2底	構 円	N-16°-E	1.1×0.8	23	南壁上端に縫1ヶ	南へ傾斜	上面の土被覆以 上まで土被覆下 面に縫1ヶ、土被覆は 下部に盛し、縫 は盛らされている	10号の上 面に薄く	4*
5	*	隅丸方	N-165°-S	1.4×0.8	20			上面に土被覆下 面に散布	*	4*
6	*	不規円		1.2×1.0	10	南壁上端に縫1ヶ 付近に縫1ヶ	南へ傾斜	南面に土被覆 下部に散布		1*
7	A 5	隅丸方	N-65°-E	1.1×0.9	10		南へ傾斜	上面の土被覆 北側に土被覆 下部に散布		3*
8	*	*	N-152°-S	1.1×0.9	18		南へ傾斜	上面の土被覆 上部に土被覆下 面に散布		4*
9	A1底	*	N-76°-E	2.4×1.5	15	上面に土被覆下 面に縫1ヶ	水 平	上面に土被覆下 面に散布、右側 は傾斜せず、左側 は土被覆下に縫1ヶ	南北に 縫1ヶ、 北側に 縫1ヶ	3*
10	*	*	N-7°-E	1.5×1.1	55		壁、V字型	上面に土被覆下 面に縫1ヶ、下部 を多く大掛盛 1ヶ	4-5号下 に薄く	2*
11	C 1									4*
12	I	構 円	N-63°-E	1.5×1.0	12	南壁上に縫1ヶ 土被覆下に厚い縫1ヶ	水 平	上面に縫1ヶ	4号下に薄く	2*
13	C 1	隅丸方	N-161°-S	1.2×1.0	8	南壁上端に縫1ヶ 中間に縫1ヶ	*	上面に縫1ヶ	4号下に薄く	4*
14	C2底	*	N-30°-E	0.8×0.6	15		*	上面に土被覆下 面に散布		4*
15	*	*	N-94°-S	0.9×0.6	15		*	*		4*
16	*	構 円	N-85°-E	0.6×1.2	16		*	*		4*
17	C 2									3*
18	E	隅丸方	N-80°-E	1.3×0.8	10		西へ傾斜	上面に土被覆下 面に散布、その上 に縫1ヶ、裏 面に存在		3*

土塗	位 置	平面形	主軸方向	横 條 (m)	深 高 (cm)	施 設	床面内側	土塗内部の内側	そ の 他	相対代
19	E	圓丸方	N-54°-E	0.9×0.7	25	土割跡をもつて 壁を無し	水 平	上面二輪土を張 りその上に砂利 をなす壁・裏・ 高等存在		5期
20	**	横 円	N-55°-E	0.7×0.4	25	倒れ落葉樹木等 が多	*	*		5*
21	*	圓丸方	N-80°-E	1.0×0.7	18		*	*		5*
22	C 1	四隅子	N-5°-E	1.1×0.8	20	土塗の左不整方 形の跡(壁なし) (2.4×2.4m) 遺物の痕跡は出 土	舟 形 状	上面二輪土を張 りその上に 粘土を張る		4*
23	*	横 円	N-166°-S	1.5×0.8		土塗の左不整方 形の跡(壁なし) (5×4m)			土塗内、後 壁の痕跡を 残す	5*
24	A1本	圓丸方	N-85°-E	1.2×0.7	20			黄褐色土層下よ り土塊(砂利)布 置(跡もみ)		5*

第4表 安原寺辺跡弥生式土塗基一観表

長軸方向はN-18°-Eの4号からN-66°-Sの22号まで広角度に亘っており、頻度から4グループほどに区分できるが、時期別に、または規模や内容の点などから見ればあまり意味はない様である。また土塗の壁は大部分が不明瞭で、壁中に土器片の喰い込んでいるケースも二、三存するが、これらの土塗が当時の生活面と考えられる表土下の黒色土層上面を穿って構築されたがためである。その深さについて、一覧表には掘り凹められた黄褐色粘土層の深さだけを記したので10~15cmが普通で、12号に至っては黄褐色粘土層の面が軽く削られている程度である。しかし、先記した表土下の黒色土層上面から計測すれば15~40cmプラスすることができるるので、極高は浅いもので25cm、平均して40~50cm程度となる。須多ヶ峯墓塚の深さは25cm、宇津木墓塚は40~45cm、また平原の割竹木棺形の土塗の深さは50cm(註14)で、須多ヶ峯や平原では上にマウンドを設ければ充分に埋葬は可能であると考究している(もっとも、40cmの深さがあれば必ずしもマウンドを考慮なくとも埋葬はできる)。筆者等は安原寺土塗は封土を有していないかったであろうと考えている)。焼損については土塗内の施設を勘案して考えなければならないが、円形の6号や19号・20号などは蹲居の姿勢をとらせなければ埋葬はできかねるが、鹿児島の峰埋葬遺跡(註15)の実例などからすれば他の仰臥屈葬が可能であり、9号には伸展葬による理葬も考えられる。

土塗内の施設として、床面は大体において水平であるが、底を黄褐色粘土層上に置いたものうちには同層が北から南へ流れているので、その傾斜に従っているものもある。広庭Cは1号の様に粘性ある黄褐色土を入れて敲打したケースもあって、構築時に粘土層の面を敲打すると云った程度の作業は行なわれたことであろう。塗内には組合せ木棺の側板痕を検出していないので、おそらくは無棺であったであろう。したがって、土塗上面の土器片散布状況をも考慮に入れて、土器群上を更に黄褐色土や粘土で被った9・22・25号など一、二の例は除いて、多くの土塗はマウンドの

ない埋葬法をとったものと解している。塙底上には柱穴らしき小孔も存していない。ただ石塊が落込んだ状態で底面より5乃至10cm浮いて発見されているケースはあって、その位置は中央より、東寄り(2号)、西寄り(9号)、中央(12号)、南寄り(15号)、北寄り(7号)と様々である。多くは径10cm程度の拳状の石塊であるが、ただ9号のそれだけは径35cmを算える安定のよい円形の安山岩で、仮りに東に視線を向けて仰臥伸展する遺骸を想定すればその頭部上に置かれていた公算が強い。

なお、土塙上縁に沿っては小砾の配される例が多く、直径15cmほどの目につき易い石塊を上縁の東・西、或いは北端に据え置いている。北縁に置かれているものは9号のみで、1・12号は西端に4・23号は東端に、6号は東・西両端に置いている。これだけのケースで云々するは難かしいが、土塙の位置を示す標石としての役割を果しているものではなかろうか。

さて、安原寺土塙墓群を特徴づける最大のものは、土塙上面に現われている土器破片の集積である。二、三の例外はあるが徹底的に破壊され、その破損面は磨滅が著しく、復元作業は難渋を極め且つ充分ではなかった。一応復元できたもの(図上復元も含める)と、復元できずに放棄した破片数を列挙すると第5表の如くで、例えば9号土塙出土の土器片は壺形土器破片1842、甕破片292、高杯破片56点と云う物すごさで、このうち復元できた壺は僅かに2点。それも上胴部だけであった。

して、これらの土器破片はいずれも表土下15乃至25cmから、或いは更に横たわる黄褐色土層下から始まる黒色土層上面から出土し始めて土塙底面に至っている。

土塙によっては土器量の上方に多いもの、下方に多いもの等々あるが、塙内を埋める黒色土を15から20cm下ったところに位置するのが最も多い。現在は小破片となって発見されてはいるが、平坦部に設けられている土塙よりもその北方——地表傾斜が転換をしていて土砂の堆積の早かった丘トレントで発見土塙に塗彩された赤色は色褪せてはいたが比較的完品の多かったことから、埋葬時に土器は完形をとっていて、それが地表に永らく放置されたが故に破壊されたものもあるものと思われた。

しかし、大部分の土塙においては2・4・6・9・11・18~21号に見られる如く、土器底部が据え置かれた恰好で発見され、その上部周辺に復元不可能な状態で散乱しているので、土器を一応据え置いた上で意識的に破碎したと考えるべきである。土器片が黒色土層上面より少しく下った位置に多いのは遺骸消滅後に陥没した結果であろう。

斯様に土塙墓上に土器を置く例は附近の栗林遺跡などで知られてはいるが、全国的に見た場合には稀少なケースであるらしい。土井ヶ浜201号(註16)では中期の土井ヶ浜Ⅲ式壺6ヶが一ヶ所にまとまって出土し、その下から1体の人骨が出土したと云うし、鳥ヶ峰では遺骸上部を後うⅢ号後石上に細かく碎かれた壺破片が副葬され、古墳時代に下るが島根県安来市籠尾遺跡(註17)のA地区においては器台と壺が多数密接して発見されたとのことで、類例は少なく、しかも副葬された土器は供獻的な性格の強い壺、器台である点が本遺跡と違っている。ただ、地城と時期は異なるが、埋葬後、櫻土上に石を積み重ね、同上に土器の置かれたケースが北海道御殿山報告(註18)中に記

土 器 名	量		質		高 坏		その 他		備 考
	完形	破 片	完形	破 片	完形	破 片	完形	破 片	
1 490 大形品2-3ヶ体分 分荷包型	2	41			2	4			5 開口式 4 線目式
2 157			15	1ヶ体分	1				1 横刃式高坏
3 211 2-3ヶ体分 大形品、赤色繪影	4	11				5			1 開口式
4 121 中形品2ヶ体分			15		1				1 開口式
5 59 中形品2ヶ体分 赤色繪影			7			2			
6 51 2ヶ体分 深井式			10	開口式					1 横刃式
7 312 中形品2ヶ体分 赤色繪影			32	2ヶ体分	8	1ヶ体分			11 開口式 横刃式
8 88 1ヶ体分 赤色繪影			30	1ヶ体分	1				
9 1 1842 大形品10ヶ体分 以上			292	4-5ヶ 体分	1	36			5 開口式 9 横刃式
10 1 大形品5ヶ体分				少なし		10			
11 1ヶ体分 赤色繪影				8					
12 1 1				2					
13 1ヶ体分 無繪影なし				3					
14 3 赤色繪影			4	1ヶ体分 にならず		1			1 開口式
15 24 1ヶ体分				2					1 横刃式高坏
16 34 1ヶ体分				4					6 横刃式質
17 554 3-4ヶ体分	1	47			14	2ヶ体分	2		1 横刃式
18 1 大形品5ヶ体分	5	20	2ヶ体分		2		3		1 横刃式質
19 164 大形品3ヶ体分 うち1ヶ底荷包 次く2ヶ底荷包	2	36			8		2		1 横刃式口 モリ横刃式口 横刃式底荷包 横刃式底荷包
20 55 2ヶ体分 無繪影なし			15			4	1		その他の大形品は 横刃式質
21 1 301 下部の繪影なし し	2	77			16	3ヶ体分	3		15 開口式質 4 横刃式高坏 1 横刃式口 モリ横刃式口 横刃式底荷包 横刃式底荷包
22 大形品2ヶ体分				少なし		少なし			
23 121 5ヶ体分			28			4			5 開口式 10 横刃式
24 15						1			

第5表 安原寺遺跡弥生式土器墓出土物一覧表

載されている。その土器は縄文後・晩期のもので、完全なもの、破壊されたもの、土器の底に穴をあけたもの、あらかじめ用意した副葬品土器などいろいろな種類があるとのことである。

もっとも、弥生後期には鹿児島・成川群集墓(註19)の様に2号人骨に副葬された壺の下腹部に

は小孔が穿たれて壺としての機能を失なわせており、報告者は「小形の研磨・赤色に塗られた壺には穴をあけてはいないが、実用に供されていたと思われる壺形土器にかぎって穿孔している。小形壺のように祭祀用としての用途を持っていない壺形土器を副葬に用いる場合、穴をあけることが慣習となっていたのではなかろうか」と述べられており、同様な例は岡山・上東(註20)、茨木・上穂積(註21)の壺館にも、また宇津木の周溝内発見壺にも現われ、その点からすれば安源寺土塚の土器破碎現象は広く九州から中国・畿内、そして東日本までひろがっていた仮器とするべく土器本来の機能を喪失させる風潮の一つとして理解することもできる。殊に9号出土の高环^イ环部中央に焼成後穿孔のある例(第41図46-47) 19号の壺・壺の底部に同じく焼成後穿孔のある例(第42図75-76)などはより強調できる資料となる。

壺形については壺・高环^イ・堀と貯藏・供献・煮沸の三形態がそろっているが、量的には壺が第一で、次いで高环^イである。貯藏と供献の二性格を合せ持つ赤色塗彩の壺や、供獻の具である高环^イが壺よりも多く据えられていることは興味深い。また壺にても脚付のものが少なからず存したことから、その裏が単なる煮沸の具ではないことを思わせる。

土器以外の副葬品としては、石器では石斧・土製品では袖珍土器と紡錘車が見受けられる。出土をした土塚は1・9・22・23号で土塚の中では問題のあるものである。

1号出土の石斧は土塚上面を覆う土器破片の内面に密着した形で発見された。玉斧とも云うべきものか。小形の緑色を呈した硬度の高い偏平片刃石斧で、あまり実用的な性格は窺われない。9号・23号址では閃綠岩製の大型始刃石斧の刃部破片が土器破片に混って土塚上面から出土をしている。

広大な氾濫原に恵まれた千曲川流域において、弥生の磨製石斧類は中期末の百瀬期に盛行をみるが、後期に入れば消滅をする。少くとも筆者の管見に触れるところでは弥生後期跡から大型始刃石斧、扁平片刃石斧の出土を聞かない。(註22) しかも発見された石斧は非実用的であり、刃部だけの欠損品である。時期の異なる破損品や非実用品の副葬——閃綠岩製の石斧を鉄斧の模造と見てて除離の具に供されたとするは行き過ぎではあるが、何らかの意味のあることだけは確実である。

紡錘車は、糸を紡ぐ、挽るに必要な弾み車で、土製・石製の二種があるが、本遺跡出土のものは土製で、しかも表面平坦、表面が僅かに盛り上って研磨されているものが多い。古墳時代に入ると滑石製のものが古墳中に副葬され、また祭祀遺跡からも屢々発見され、その表面には直弧文など呪術的文様が描かれて本来の機能をはずれた様相を見せているものがあり、それらは截頭円錐形をとっている。

筆者はかつて、巴形鋤器との関連において考えてみたことがあったが(註23)、本遺跡において土塚墓内から、しかも22号においては周溝内から等間隔に出土をした点などから、あらためて考えてみたい遺物である。

なお、9号と22号出土の袖珍土器は一つは壺形土器、一つは無頸壺のミニチュアで、あきらかに仮器である。

土塗基の編年

発見された土塗基のうち、重複しているものはAトレンチ西半の拡張部であって、9・10号上に5・4・2・24号が存在している。その重複状態については、新しい土塗が先行時期のそれを切り込んでいると云うものは1例もなく、總てその上、その上へと造られている。死者のための土塗を穿つに当り、下方から先に造った人に供えた土器片があらわされた場合、それを毀してまで深い塗を掘り込むほどの無神體は持ち合せてはいなかつたであろう。そのことは数年前、或いは十数年前につくった土塗の位置がもはや不明になっていたことを示し、マウンドなど地上の痕跡の乏しかったことを物語っている。

ところで、本題に戻るが、この様な状態は墳墓群中の一剖に限られているので、重複状態だけで土塗基の編年を樹立することもできず、やはり出土土器の様相から推して行かなければならぬ。古く置かれるものに安源寺I類土器を出土した6号址がある。円形プランをとっている。そして、同類の土器（栗林2・3類）（註24）を出土した栗林第II次調査時（註25）・第III次調査時発見のピットも円形で、従来、東日本で発見されている中期のピットのあるもの——原塚（註26）・新田山（註27）・女方・野沢（註28）・南御山（註29）のそれと同形で、6号の壁高は黒土層上面から計れば50cmを算えるので深さの点からも似通っている。ただ、従来の東日本の中には完形土器が副葬され、複雑の痕を示すものもあるが、安源寺6号では、例えは安源寺35号において、堅穴内の土器は離れ存し、形殆んどなしと記載されている。

また、安源寺6号では硬玉製管玉が副葬品として発見されているが、信濃においても中期の栗林式から百瀬式にかけて玉類を壺形土器中に収めて埋納するケースが數例あり、いずれも単独に発見されている。岡谷・天王塚外（註31）・長野・吉田（註32）・佐久・御社宮司（註33）・須坂・須坂園芸高校校庭遺跡（註34）がそれで、うち、須坂園芸高校校庭遺跡では限られた範囲内から2点の完形土器と11点の管玉、及び多量の土器片と木炭片が出土した。また発掘の際、床面、壁を思わせる様な堅密な土層には遭遇せず、木炭片は出土したが焼土は検出されなかった由であり、これらの資料を媒介とすれば今後において安源寺6号土塗との間を一線で隔ぐことができるかもしれない。6号に続く土塗は10号・12号で、壺形土器の形態から後期も前半に做られると思われる。プランは12号が橢円形で、その出土土器は壺形土器1点と壺形土器破片であり、10号は隅丸方形となり、出土土器は大形の壺上半部と数ヶの赤色塗装された高杯である。

副葬品の系列から云えば、中期末の壺中心に対して高杯が新たに加わった証である。また、12号の壺は北壁に寄りかかる様な形で破碎していたのに対し、10号では土器片は土塗上面に散布していた。どうも安源寺における葬列の変化はこの辺にありそうである。即ち、円形プランが東日本中期の土塗の平面形であったのに対し、隅丸方形的なそれは大津・南滋賀（註35）・茨木・安威（註36）・尼ヶ崎・田能遺跡（註37）発見土塗など西日本において中期頃から多く見られる土塗のプランであり、また、古墳時代の葬法に連がって行く仰臥屈葬～仰臥伸展葬のための形態でもある。土器型式の上から云っても後期は中央の様式流出の時代であり、信濃——千曲川流域の後期土器は特

にも瀬尾・東海地方と親縁性が強いので、保守的性格の強い墓制面においても少なからぬ影響があったのであろう（もっとも、百瀬期にも隅丸方形をとる土塚一墓群遺跡における京大発掘時の矩形石積墓（註38）、同じく第Ⅱ次調査においてトレンチの8・9区に亘って発見された長さ1m、幅45cm、深さ15cmの隅丸方形土塚の存在から、東日本的な墓制と西日本的な墓制とが成る期間この北信濃において併行して行なわれ、その間に徐々に西日本的な墓制の採用が優越して行なったとも考えられる）。

次に、残った既存の土塚が置かれる。ただ、甕や高环形土器の形状から7・17・21号は若干遅らしく、土塚の重複状態から見れば先記した如く、9号より後に2・3・4・5号が掘鑿されている。そしてこの整った隅丸方形をとる2～5号とはほぼ等しい規模・形態をもつ8・13～16号も同一の時期に築造されたと考えてよい。また24号は2号より古く、その形の未だ定形化に至らぬところから7・17・21号と同時期辺に置くことが妥当であり、Cトレンチ東端の5基は挖出されていて定かではないが、22号は周構内の土器型式から下降が考えられている。かくて一応表示をすれば第6表の如くに四時期に相対編年することができる。

時 期	土 塚 墓 名
1期（中期後半）	6
2期（後期前半）	10・12
3期（後期後半I）	1・7・9・17～21・23・24
4期（後期後半II）	2～5・8・11・13～16・22

第6表 安源寺辺跡弥生式土塚編年表

そして、3期、4期になると土塚数も増え、形態も隅丸方形になり、規模も大凡に似通ってくる。そして特に注意しなければならないのはこれら定形化した一群中に特殊な土塚の一、二見られることで、3期においては25号、4期では22号や26年発掘土塚が挙げられる（9号は規模の大きいことと、周壁破壊された土器量の膨大なこと、石斧・防護車・袖珍土器を出土したことで調査時には論議されたが、そのプランは3・4期に通有な隅丸方形をとっているのでここでは取り挙げなかった）。

22・25号については、後世の擾乱を受けているのが残念であるが、共に宇津木・須多ヶ峯と同様な周溝を拂らしている点が問題であり、また22号からは周溝内から間隔を置いて袖珍土器や防護車が出土した点については野田堤台や浜北芝本、それに宇津木や須多ヶ峯と親縁性が認められて興味深い。そしてこの2ヶの土塚は共に安源寺土塚群中の上方、且つ中央辺に位置している。この点に何んらかの意義が認められるはしないだろうか。土塚自体については他の土塚と何らかわりがないうえに特別な周溝を有しているとは云え、北方に認められた溝状遺構以前の共同墓地中に位置している訳であるから、土器型式をも勘案して宇津木土塚に先行するものであり、むしろ南滋賀の墓制と共に通する点がある。ともあれ、共同墓地の中央に特定な個人の墓がつくられたと云う現象は問題とすべきことである。

土塙墓と集落

以上、24基の土塙墓の形状・埋葬品のあり方、4時期に分けての編年を考えて見た。第1期と第2期との間には葬制上へさかの飛躍があるらしいことや、第1期のそれは東日本弥生中期の土塙と関連の持てそうなことや、第2期の土塙からは西日本のそれと親縁性のあるらしいことを、また、第3・第4期においては特定な個人の墓が出没するらしいことを記述してきたが、あらためて集落との関係の上からこれらの考えを再検討いたし、安源寺集落の復元図を描いて紹介したい。

一般に土塙墓は沖積地に臨んだ丘陵上縁部に多く設けられていて、これは安源寺遺跡も同様である。この丘陵上縁に位置する土塙に住む人々の集落はどこに求めたらよいだろうか。

千曲川流域における中期後半遺跡の立地は氾濫原に細流の注ぐ地点に点在するのが常であり、その規模はさして大きくなはない。果林遺跡では土塙は1基が集落の北限、1基は南縁に発見されたが、集落址のほぼ中央に設定されたトレンチ内にも2基ほど露呈をして、集落に接近して設けられたことが判明している。そして、安源寺遺跡において中期後半の土器片は今回の調査では24号の西方と6号址に近接している石組築の附近から発見されている。また26年の調査時にもトレンチ内から土器片の出土を見ている。遺跡の主体は既出資料の探査からもこの丘陵縁端部にひろがっているものである。

次いで、弥生後期に入る。遺跡の規模は中期のそれよりも拡大すると同時に中期におけるアンタメーネの克服が始まり、丘陵上に大きな面をもった集落が形成されるに至る。本丘陵では丘陵縁辺部には無く、勾配4度で土塙群の北を75m登ったところの比較的平坦な丘陵上面に発見されている。現在ここは一面の林檜園で、ここまで登ると南方の氾濫原は見えず、代りに西方が抜けて千曲川の流れや信越五山が望まれる。未だ正式な調査を受けてはいないが、丘陵上面で土塙群から130m離れた宮裏地籍で1住居址の存在が確認されている。しかも、集落との間には溝が走って、生きる者の地と死者の地とを判然と割している様であった。

時代が更に下り、弥生最末期(柳町式期)(註39)に入るや、集落は丘陵縁前方の氾濫原に向って進出をして行く。集落と墓地とは水平的に、垂直的にその距離を増して行ってしまう。山口県の壱智墓を資料として、前期は集落内部、集落に近い場所に、後期はかなり離れた同じ高さの台地で群集墓を形成し、土器が土器器種相を帯びてくる頃になると集落址と水平距離が遠くなると共に、垂直的位置関係を生じ、同時に単独墓の様相が強くなると云う小野忠源氏の考察(註40)は、中部山岳地帯中の善光寺平においても適応できた訳である。

(桐原 健)

註1. 田中国男「弥生式編文式接触文化の研究」昭19年

*2. 長田実「上州岩槻山岩窟跡発掘記」考古学11の2

*3. 杉原莊介「東日本弥生式土器文化における葬礼」日考古5回総合研究発表要旨

*4. 亀井正道「東日本弥生式文化における葬制について」医学院雑誌56の2

神沢第一「弥生式時代の生産——埴輪」日本考古学講座4(河出書房)

*5. 亀井正道「人面土器の新例」考古学雑誌45の1

坂詰秀一・岡俊彦「弥生後期の人面土器について」考古学雑誌48の1

- 註6. 杉原莊介・大塚初重「千葉県天神前遺跡における弥生時代中期の墓地」日考古50回総会研究発表要旨
- 註7. 杉原莊介・大塚初重「栃木県出澤原における弥生時代の墓地群」日考古51回総会研究発表要旨
- 註8. 下津谷通男「野田市堤台遺跡」上代文化55。
- 註9. 下津谷通男・大谷純一「静岡県浜北市芝本の特殊遺構」日考古58年大会研究発表要旨
- 註10. 大場勝雄「東京都八王子発見の方形周溝特殊遺構」日考古59年大会研究発表要旨
- 註11. 高橋桂「北信濃多ヶ峯 弥生式土器調査報」考古学雑誌51の3
- 註12. 林茂樹・金井次次・桐原健「長野県長野市栗林遺跡第三次調査報告」信説Ⅲ18の4
- 註13. 田川幸生・桐原健「長野県安原寺遺跡の弥生式土器」信説Ⅲ14の4
- 註14. 原田大六「実在した神話」学生社
- 註15. 盛岡尚孝「鹿児島馬ヶケ峯埋葬遺跡の調査」日考古56年大会研究発表要旨
- 註16. 金剛文夫・坪井清是・金剛忍「山口県土井ヶ浜遺跡」日本農耕文化の生成
- 註17. 山本清「島根県安来市鶴尾の土器群とその土師器」日考古29回総会研究発表要旨
- 註18. 河野広道・森本英夫「御殿山墳墓群について」考古学雑誌46の4
- 註19. 西口貞徳・河野治雄・重久十郎「成川弥生式群集墓」考古学雑誌45の4
- 註20. 關根義子「岡山県都窪郡庄村上東遺跡出土の土器」瀬戸内考古学2号
- 註21. 田代克己「茨木市上柳原出土の弥生式土器」古代学研究21.22
- 註22. 桐原健「石器より見た信説弥生式文化の一様相」信説Ⅲ11の12
- 註23. 桐原健「上に金峰塚出土の巴形飾金具」古代42.45
- 註24. 桐原健「栗林式土器の再検討」考古学雑誌49の3
- 註25. 高丘小学校編「昭和25年度第2次栗林遺跡発掘」
- 註26. 杉原莊介「静岡県安倍郡原塚遺跡」日本考古学年報1
- 註27. 杉原莊介「下條新田山遺跡調査報告」人類学雑誌58の7
- 註28. 杉原莊介「下野野沢遺跡及び越前村形遺跡出土の弥生式土器の位置について」考古学7の8
- 註29. 杉原莊介「福島県北会津郡門田村南御山遺跡」日本考古学年報2
- 註30. 神林淳雄「磐梯郡棚倉町上石原時代の遺跡について」上代文化8
- 註31. 鳥居電蔵「磐梯史」1卷
- 註32. 神田五六「東日本における弥生式文化の研究」信説Ⅲ2の7
- 註33. 八幡一郎「長野県野沢発見の弥生式遺物」考古学雑誌58の5・6
- 註34. 桐原健「長野県須坂市須坂園芸高校校庭出土の弥生式土器について」信説Ⅲ13の8
- 註35. 田辺昭三「大津市雨濱宮遺跡調査報告」大津市教育委員会
- 註36. 免山篤「無津安威の土塹跡跡」古代学研究12
- 註37. 村川行弘「尼崎市田能遺跡第一回調査報告」日考古32回総会研究発表要旨
- 註38. 塚井厚足「高丘村弥生式遺跡調査」下高井
- 註39. 桐原健「北信長峯丘陵における弥生式遺跡」考古学雑誌45の1
- 註40. 小野忠志「本州の西端地方における弥生式土器の性格」日考古20回総会研究発表要旨

第5節 土塙内出土遺物

石器(第38図)

土塙墓内出土の石器として明確なものは磨製石斧4点である。第38図4が1号、1・2が9号、3が23号土塙出土で、1号・9号址の場合は土塙上面に散布していた土器破片と共に発見され、殊に1号址においては重なり合っていた土器破片中より検出されて、あたかも土器内に収納されていたらしい様が認められた。なお、23号

址の場合は土塙内の出土ではないが、周溝区内からの発見である。

石質は4が便賈の樹欅岩である。他は閃綠岩製で、形態は1～3が大型蛤刃石斧、4が小形の扁平片刃石斧である。

これらの石器の特徴の一つは、太形蛤刃石斧の3点はともに刃部

だけの破損品であり、4の小形扁平片刃石斧も頭部が欠損をしている。大型蛤刃石斧の剖面には別段再加工された痕跡を見ていないので、9号址に見られた高環状部に穿孔あるケースをも勘案して、利器としての機能を喪失させて副葬したものと考えられている。

なお、これらの磨製石斧は当地方においては中期末に盛行するもので、後期に入つてからは発見された例を聞かない。(註1) この点にも何か問題がありそうである。

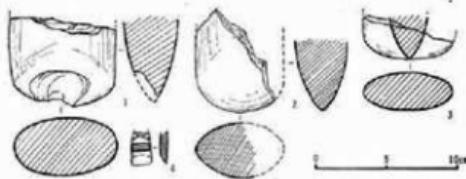
土製品(第39図)

土製品は総て防錆車であつて、破片まで含めて6点が発見されている。第39図の1～4が22号土

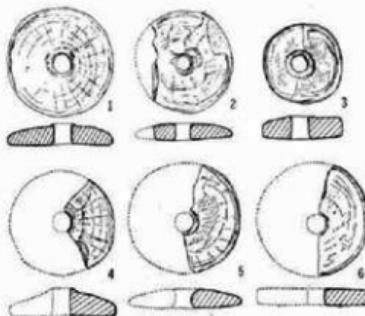
番号	出土地点	直径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	22号址	57	11	38.5	
2	▲	52	9	25.0	
3	◆	43	12	33.5	
4	◆ (56)	14			破片
5	5号址 (60)	10			◆
6	9号址 (61)	9			◆

第7表 防錆車計測表

この周溝底から、5が5号址、6が9号土塙の出土である。これら防錆車は土器片などを再加工したものではなく、大きさ、重量につ



第38図 土塙出土石器(1:4)



第39図 土塙出土土製品(1:5)

いては第7表に表示した通りで、径は推定6.1から4.5cmまで、厚さは中央辺での計測で1.4～0.9cmを算え、円板のほぼ中央に径1cm前後の円形孔を貫通させている。穿孔は焼成前に一方（裏面）から行なわれたものらしく、1.3.4などには上面の孔周縁が僅かに盛り上りを見せている。

その形態分類を断面形から考えると、一つは3.6の如く厚さ均一の円板状をなすもので、胎土には砂粒が含まれ、表面の感触はざらざらとしたもので窓研磨は行なわれていない。もっとも6は表裏面に亘って微かに赤色塗装の痕跡が残されるがこれとても研磨はなされていない。重量も3などは小形のわりには重い方である。その二は明瞭に上面・下面の区別がつくもので、一面は平坦であるのに一面はその度の強弱はあるも笠形に盛り上りを見せている。1.4は度の強いもので焼成は堅密であり、特に上面は窓で放射状に周縁部に走ってよく研磨が為され、2.5は上面弯曲度弱く、さして厚くもないが、窓研磨の為されているのは上面のみで、下面是ざらざらとした素面のままである。

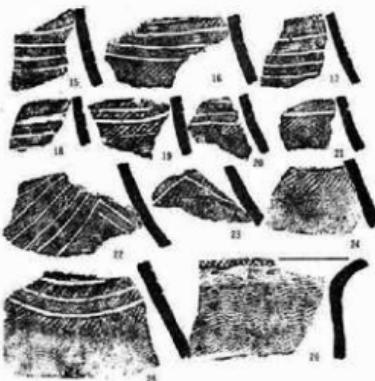
佐原真氏は成形・穿孔がともに焼成に先立って行なわれたものは東日本における紡錘車を代表するもので、重量は畿内・瀬戸内のそれよりも重いとのことであり（註2）、それによれば本遺跡出土の紡錘車は東日本に普遍的な形態をとっているが、それと共に考えねばならぬことは、裏面が粗耗平坦で、上面研磨のあるものには紡錘以外の使用をも考えてみると必要があることである。（註3）本遺跡の如く土塚内出土と云う点や、原治絵画の描かれている例品の存在、古墳時代の石製紡錘車中に直弧文の描かれているなど問題点が多くあるからである。

土器（第40～45図）

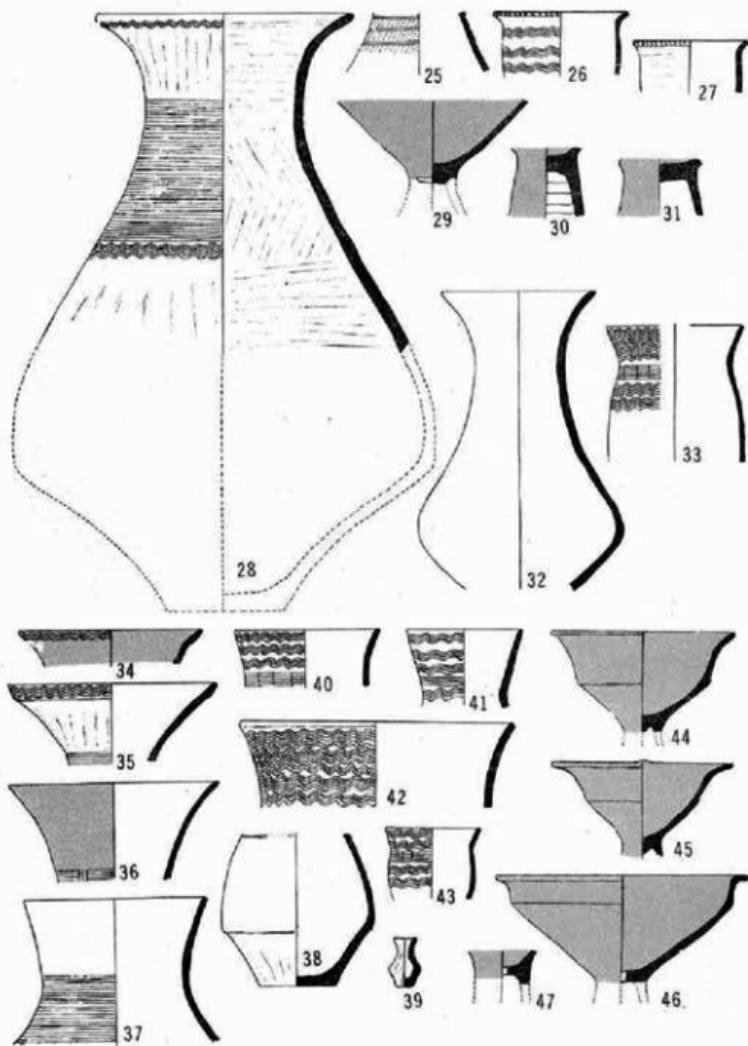
23基の土塚墓のうちの幾つかはその重複状態から構築の前後関係が判明している。それぞれの土塚内出土土器中には埋葬後の供獻と云う性格の故に多少の時間差を認めることがあったが、後出するそれは数量的に僅少であるので区分が可能で、一土塚内出土の壺・高杯を1セットとして把握することは容易に出来た。出土した土器は膨大な量に亘っているが、その多く——特に壺においては破片が著しくて器形を窺うことの出来ぬもののが多かった。

第1類（第40図15～26 第41図25～27）

6号土塚出土のもので、壺・甌の二形態が存在している。壺は長頸壺で、頸部には竪描き直線文が数条、纏文地文の上を横走している（15～21・25）。上腹部は平滑で無文のものが多いが、



第40図 土塚出土弥生式第1類土器（1:3）



第4188 土塙出土弥生式第1類・第2類土器(1:6)

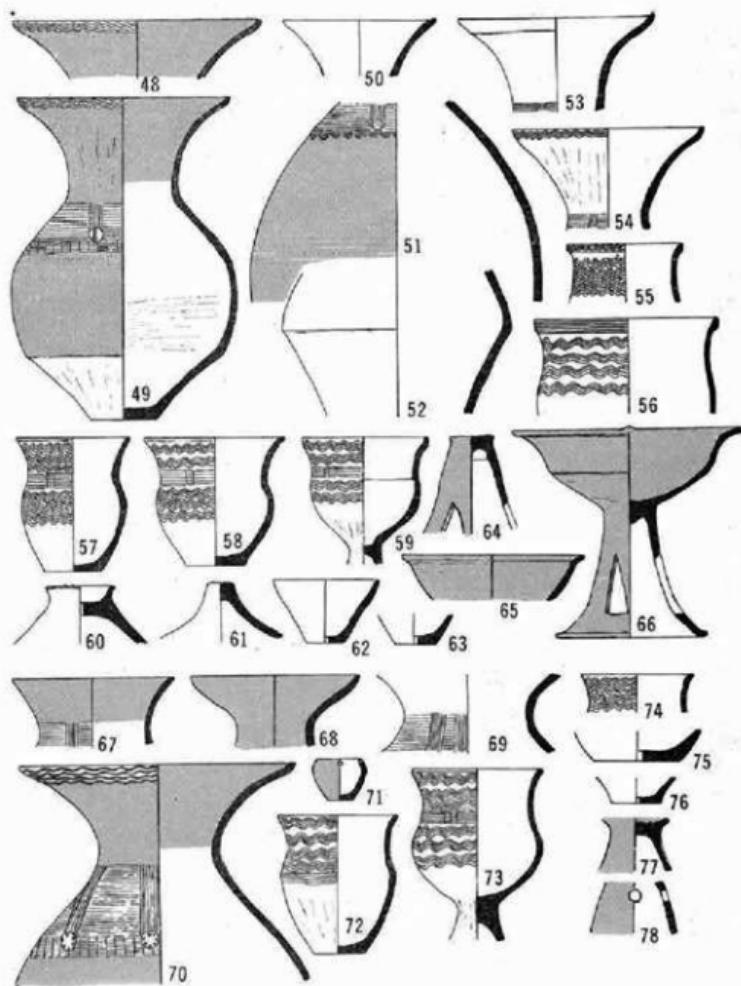


图42四 土坑出土仿生式陶5组土器(1:6)

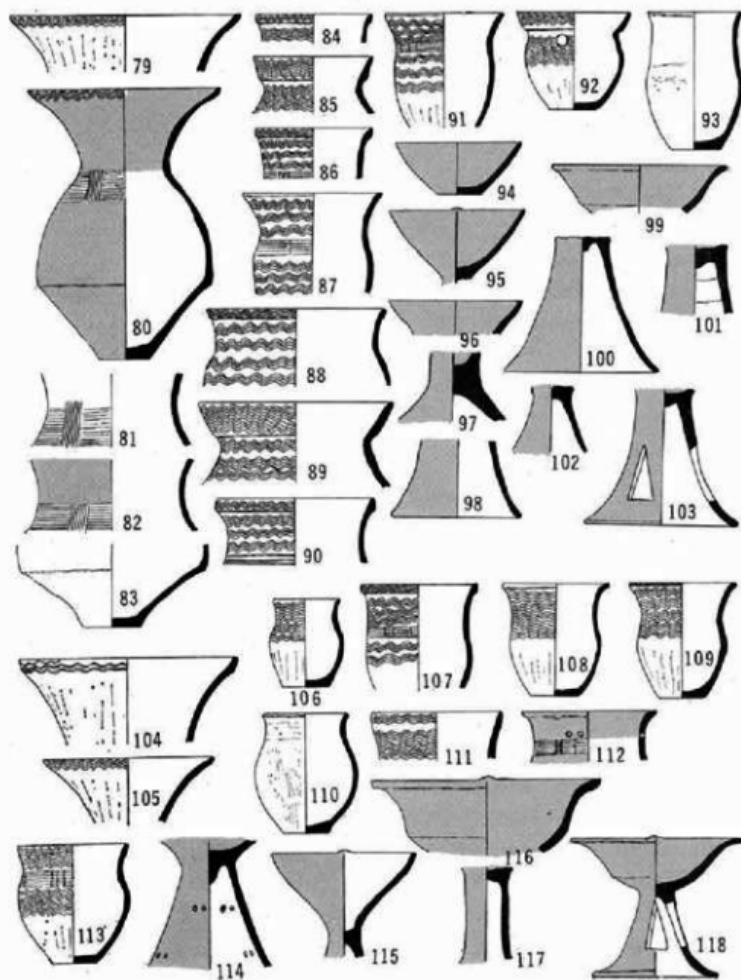


图4500 土坑出土仿生式第3组土器(1:6)

22・25においては最大腹径部位に近く縄文地文の上に竪描きによる連続重山形文が置かれている。墻は口縁の短かく強く屈折するもので、口唇には竪先による加飾がなされている。頸部から上胸部にかけては垂直に近く、以下は急速に収約して底部に至る形態で、上胸部を飾る文様として26の如くやや乱れてはあるも帯を為す横描波状文を数条繞らるのが一般的である。

第2類(第41図28~35・37・46)

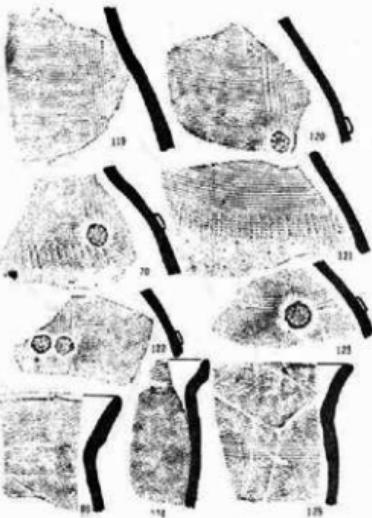
10号(28)12号址(32)出土、及び9号址の37などの壺形土器で、太頸壺ではあるも未だ長頸壺的な形態を残しているものを云う。32の頸部の如く、丈長くもその緊約度は緩いのが好例である。器表面の文様で28は口縁外側に整った横描波状文が繞り、頸部には同じく整った細かい横描直線文が15cmの幅に描かれ、その下端を一条の横描波状文が走って文様帯を括めあげている。未だ表面に赤色塗彩は施されず、文様帯以外は縱走する竪整形で仕上げている。

壺形土器は口縁の屈折が無くなつて丈長く伸び出し第3類との分離が難かしい。強いてその特徴を擧げば未だ折返し口縁や脚台の出現していないこと、横描波状文が帯を為している点等である。(33)。

高杯では10号(29)、9号址(46)出土のものの如く幅狭い頸部下に稜線を形成して大きく収約する口径の大きい割には壺の浅いものが該当する。脚部は丈長く、透孔などの加飾は無い。外面・壺内面には赤色塗彩が施されている。

第3類(第41図54~56・58~45・47 第42図48~78 第43図79~118 第44図119~125)

土塚墓出土土器の主体を占めるもので、壺・甕・高杯・無頸壺・鉢と多くの器形が描かれている。壺形土器は總て太頸壺で、口縁は少しく立ち上り、口縁外側に整った横描波状文が一帯繞るのが普通で(54・55・48・49・54・79・80・105)、中には70の如く竪描き波状文に代えているものや、35の様に口縁を少しく肥厚させて文様帯下部に稜線を走らせているものもある。口縁から頸部にかけてのカーブは朝顔状に収約するも、太頸壺であってみれば長くは引かれず、すぐにつつ部に稜線のある無花果形脚部に移行している。頸部文様は同部に繞らされている横描横走文帯を一条乃至は接近している二条の縱走する横描直線文で数区間に区切っているもので(49・51・70・80)、5本程度の横筋が使用され、その動きは遲滞なく流麗である。文様帯下端



第44図 土塚出土壺形土器

に簡描縦状文を置いたり(49・70)、半截同心円文を並べたり(51)、円板状突起を貼付させたり(49・51・70)して変化を見せてゐるものもある。

赤色塗彩もこの型式の特徴の一つである。器表面はほぼ文様帯を除いて塗彩されているが、全面に塗彩の無いものも、下腹部縫線下にのみ施されないものも僅かではあるが存在する。器高については割合に大形品が多く、49が34cm、80が29cmを計っている。

無頭壺は袖珍的なものが19号址から1点出土をしている(71)。肩の張りが強く、外面は底部裏面にまで赤色塗彩されている。口縁には一孔一対の小孔が斜めに穿たれている。整形土器には大形・中形・小形と数多く存するが、大形品は破碎していて復元は出来ない。破片から窓うに口縁部が肥厚して折返し口縁的な形状をとっているものが多く(88・90)、折返し口縁上には頭部や上腹施文のそれよりも整った、波長の短かい簡描波状文が繋いでいる。簡描波状文の代りに直線文を用いた56や、幅広い文様帯を構成している89などは例外とも申すべきであろう。延びきった口縁部や上腹部には簡描波状文が器面全体を埋め尽してゐるかの如くに繞らされ、その間の頭部には簡描縦状文帯を一条置くことで文様効果をあげてゐる。中形・小形品において、口縁部形状には折返し口縁的なものもまま見られるが、多くは延びきった口縁がさして取扱もしていない頭部を経て胴部へ移行する形態をとる。胴部形には大形品のようにすんなりとした長削形をとるもの(57・72・91・107)と、ざんぐりした小肥りの意を為すもの(58・92・113)とが見受けられている。また、この中、小形品には脚付きのものもかなり見られる。脚部は短かく、側縁は直斜状に強く張つてゐる(59・73)。

文様は頭部の簡描縦状文を挿んで簡描波状文が口縁部と上胴部を埋め尽してゐるものが多いが、との他に圓状

文で頭部の区

切りを付けぬ
もの(72・106

・108・109)

や、円板状突
起を貼付した

り(92)、文
様を消失させ

た素面の95・
110の如きも
のもある。

また、赤色
塗彩され、繁
縛孔の穿たれ
て、その機能

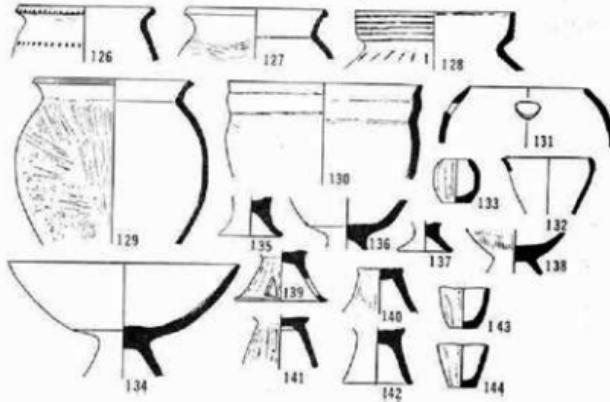


図45回 土器出土弥生式陶4類土器(1:6)

を貯蔵性に代えたもの（112）も存するが、斯様な壺は案外に古い形態をとっており、例品を猪ノ井・伊勢宮遺跡に見ることが出来る（註4）。

變形土器では18号址出土の2点が知られている。61は輪黑色で粗質ではあるが山形を為す。據端が欠失しているので孔の有無は不明であるが、重量の点からすれば變形土器に伴うものであるらしい。60は上部中央に貫通孔があつて明らかに變形土器の壺である。色調黄褐色で粗質である。

概（62・65）は口径に比しては器高の高いもので、側縫直斜状に収約する鉢形土器の底部に一孔を穿ったものである。穿孔は焼成前にかかり、赤色塗彩はなされず色調黄褐色で粗質である。なお、75・76は壺及び壺の底部を焼成後に穿孔したもので、概として考るべきものではない。

高环は环部の形状から二者に区分出来る。前者（44・45・66・98・116・118）は第2類高环の形態を複雑化させたもので、器高のわりには口径がせばまり、それだけに頸部下の縫縫から底部へかけての収約度は強まっている。また縫縫形成部位と口縫との間隔は2類高环よりも幅ひろく、口縫は外反して平面を形成するに至っている。口唇部に数ヶ所山形突起が附されているのもこの類からである。脚部は丈長く、裾部に至って外反して終り、装飾としての透孔には円形孔も一、二は見られるが、多くは脚も下間に三角形の窓を切っている。

次に後者（95・115）は环部が円味をもつた側縫で構成されているもので、口唇には山形突起が附されている点は前者と同様である。脚は前者に比べれば短かく、裾広がりになっていて装飾のための穿孔もあまり見られない。概して小形高环がとる形態のようである。そして、後者の高环と親縁性あるものとして21号址から1点、表裏面に赤色塗彩された鉢形土器が出土を見せていている（94）。

第4類（第45図126～144）

2・7・17～19・21・22号址などの上面に混在していた一群で、量的には多くなく、完形を呈するものは小形の無頭壺や鉢など3点ほどしかない。

壺形土器は縫縫を繞らした立ち上った口縫部をもつ21号址出土の1点のみで（128）、この口縫部は肩の張った胸部に付くものらしい。色調は黄褐色で砂粒を含むも堅質であり、肩部に向って窪みが継走し研磨整形されている。壺形土器は口唇部が外方に屈折して断面三角形を形成し、口縫端に一線の引かれている点が特徴で（126・127・129）、同部の装飾としてこの下端に刻み目を入れた126、中辺に更に一線が挿入されている129などがある。短かく屈曲した口縫部からは円孔をおびた肩部が続き、以下はスムースに収約して小さい底部で終わっている。器表面の文様はもはや無く、頸部下から整形のための細かい刷毛目が斜走乃至は横走している。これに対して小形壺中には脚部を附するものがあるらしい。全面に刷毛目痕跡が見られている140～142が該当するものであろう。また、21号址出土の130は口縫部に二段に亘る弱い括れがつくられていて、広い口径から一見盤形に復元出来そうであるが、やはり壺として取扱った方が無難らしい。

片口土器は破片が2点発見されている。1点は口縫平面が偏橢円を呈するもので、口縫の一辺が外方に突き出して片口となつておらず、器高は比較的深い方である（152）。もう1点（131）は無頭壺の形態をとるもので、恐らくは豊野・西冲例（註5）の如く脚が附されたものと思われる。口縫を少しき下つたところに長径2.5cmほどの一孔が穿たれて、その下端が突き出して片口状を呈

している。色調は灰黄色で窓研磨がなされ、器質も堅緻、焼成良好である。

高环は1点を除き小形で、环部は半球状の瘤形を有するものと思われる。色調は黝黑色で砂粒を多く含み、赤色渲染はなされていない。19号址の134だけは大形で、环部形状は瘤形を呈しながらも、その底部に近く縦線を微かに認めることが出来る。脚は短かいながらも大きく外向し、139の如き三角形の透孔が見られている。

最後に袖珍土器3点。一つは手捏ねになる無頸直筒形土器(133)、二点は17号址より出土している同じく手捏ねの鉢形土器(143・144)、色調は黝黑色で粗質である。

以上が土塚墓発見弥生式土器の大要である。掲図した144の資料を4類に区分して記述したが、これに26年発掘の資料や安源寺周辺の既出資料若干等を加えて本遺跡に見られた後期弥生式土器の編年を少しく述べて小括としたい。

信濃の各谷・各平に見られる中期末の土器のフェイスはそれぞれ異なりを見せてはいるが、長頸、大きな腹部、文様帶の規定など細部に亘っては幾つかの共通点を摘出することが出来る。北信では安源寺1類として記述した壺、及び瘤形土器がそれで、遠賀川式土器文化圏の外郭地城であると共に、先行時期においては亀ヶ岡式文化圏の外郭地城でもあった中部山嶽地城に生起し、東海地方の原流式、矢崎二類、関東地方の須和田式などの諸要素が混然と見られる栗林式(栗林2・3類)(註6)の様式を継承していく、中信の百瀬式(これは今後細分が可能である)(註7)、南信諏訪の天王垣外式(註8)に比定出来る。この時期の生業に起因するのであろうが、兎も角も土器型式上には汎信濃的様相が認められているのである。

これが後期に入ると先行した土器の伝統を踏襲しながらもより明確な地域性をもった土器型式が出現する。彼等の生業の発展が地縁的紐帯をより強固にし、大きい行動圏はもはや必要としなくなったが故であろう。

ところで、かかる後期弥生式土器の型式編年であるが、中信においては百瀬II類、諏訪では海戸式(註9)、伊那では座光寺原式(註10)で見られる如く、櫛齒状施文具を使用しながらも先行型式の器形・文様のモチーフを踏襲しており、特に保守的な性格の強い瘤形土器においては中期末の壺とは何ら変るところがない。けれども千曲川流域においては壺・壺共に器形・文様上に新要素が強く、先行型式との間に相当のヒヤタスを認めざるを得ない。安源寺2類がそれで、かつては尾崎式とも呼称した(註11)。瘤形土器には長頸壺の残像が未だ窺えるも、下腹部に縦線を見る脚部形態は新らしいものであり、頸部を飾る文様も櫛齒状施文具による幅広い直線文帶である。また、この期から現われる高环の形態は伊勢湾沿岸の後期前半のそれと全く同一と云ってよい(註12)。伊那谷や諏訪や中信と異って、千曲川流域には伊勢湾方面の文化を受け入れる何物かが、換言すればこの地域には盤内方面の勢力を導く何物かがあったのであろう。

そして、この事例は安源寺宮裏遺跡で、住居址内から発見された1点の壺形土器からも裏付けが出来る。住居址中央のピット内に横たわっていた壺は算盤玉状の脚部とシャープな櫛齒文様を有していて明らかに伊勢湾沿岸の後期前半に見られる型式特徴に合致していた。これは彼の地において

作成されたものであり、この壺と共に伴した土器片は安源寺2類、或いは少しき下降する型式に属するものである。

この安源寺2類に統く5類は、從来より箱清水式（註13）と呼称されてきた。2類から進展したものともいえるが、伊勢湾地方の型式に不斷に影響されて成立した型式とも云い得られ、その例証として壺形土器に見られる赤色塗彩の盛行や、高环坏部の次第に深みを増して行く事象、斐形土器中に一・二点ではあるが球形に近い胴部にくの字形に外反する口縁部の附された寄道式的な例（註14）の存する点等を挙げることが出来る。

そして、赤色塗彩が遙かに文様を凌駕して行く点や、壺形土器口縁発達のケースなどは僻遠の地に見られる特異な現象であると同時に地域性の確立と見ることも出来るので、北は長峰丘陵を中心にして置く飯山盆地から南は佐久の平までの広い千曲川流域一面にこの式の土器は繁衍しており、この期に至って遺跡数は氾濫原に面して急増をしているのである。

安源寺5類中には文様を消失した壺が一・二存在している。また他遺跡では赤色塗彩のみの壺形土器もあって（註15）、櫛描施文と赤色塗彩を型式特徴とする箱清水式の次に編年される型式には無文の一群が考えられそりである。けれども無文、刷毛目整形になる安源寺4類は海られぬ素面ではあるものの第3類から漸時展開して来たものではない。

この第4類が3類の次に置かれることについて飯山・柳町遺跡（註16）において確認出来ている。5号を埋め立てて4号が造られていると云う重複した住居址があって、5号からは柳町1類（箱清水式）が、4号からは柳町2類（安源寺4類）が出土した。この柳町2類を柳町式として北信における弥生最末期に位置づけをした。その際に、この柳町式をどうしても箱清水式の伝統を見出すことが出来ず、報文中では「箱清水式土器の伝統が柳町式には殆んど認められない。箱清水式に顕著に見られた櫛描手法・赤色塗彩は皆無であり、保守的な性格が強いとされている高环にも赤色塗彩は施されていない。器形についても柳町式の口唇部には先行土器と関連のない手法が存在し、球形丸底の器形も出現してむしろ信濃以外の土器に類似が求められる」と記述した。

そして、その際には佐渡・千種の土器（註17）・新潟・猪立遺跡（註18）の土器に類似が求められる所とし、それらを柳町式と比較すると、器質・形成共に粗雑で、いかにも地方化しているところから新らしい様式は案外にこの方面の経路を辿って伝播し来ったものかもしれないと思われる。この事は安源寺出土の一高环土器（高見沢伴藏氏所蔵）が北陸の石川・次場遺跡出土のもの（註19）と同形である点や、新潟・新井・斐太遺跡の一括遺物（註20）を知るに及んでその考え方の妥当であったことを改めて確認した。

北信における柳町式を出す遺跡としては飯山・柳町、中野・安源寺の二遺跡の他に、飯山・須多ヶ峯遺跡で土塙墓に近接している2ヶの住居址からも発見されている（註21）。この他、断片的な資料としては長野・若狭・田子遺跡などが挙げられ、善光寺平北部には散漫ながらも分布しておるものと考えている。

即ち、濃尾地方の後期弥生式土器の強い影響下に生じた当地方の後期弥生式土器は、その後も

先進地域との接触を保ちつつ独自の文化圏を形成し、その余波を北関東方面にまで及ぼした。

一方、箱清水式の土器型式が中頸域方面にさして延びてはいないことについては、その当時の高田平野が土壤・地形・気候の点で進出するには未だ不適な要素が多すぎたからであろう。この地に開拓の歴史が入れられる様になるのは北陸に畿内から直接に流出して出来た文化の一部が海流に乗って佐渡へ、次いで新潟の海岸平野に伝播してからの事で、その時期は弥生最末期に下降している。柳町式土器はその北信濃にあらわれた一姿相と見てよからう。

そして、この最末期に更埴地方には信濃最古の前方後円墳が築かれていると見てよいから、古墳出現直前の墓制をとる安原寺遺跡出土埴輪の築かれた時期である箱清水期から柳町期にかけては今後特に焦点を当て究明して行かなければなるまい。

(桐原 健)

註1. 桐原健「石器より見た信濃弥生文化の一様相」信濃III 11の12

註2. 小林行雄・佐原真「善川県三豊郡鹿間町紫雲山弥生式遺跡の研究」鹿間町文化財保護委員会

註3. 桐原健「上総金鎧家出土の巴形飾金具—巴形銅器私考」古代42.45

註4. 信濃史料刊行会「信濃考古綜観」

註5. 註4と同じ

註6. 桐原健「栗林式土器の再検討」考古学雑誌49の5

註7. 藤沢栄平「長野県東筑摩郡寿村百難弥生式遺跡調査概報」信濃III 5の8

註8. 麻森栄一「諏訪市天王塚外発掘の弥生式土器及び石器」考古学5の6.7

註9. 岡谷市梅戸遺跡 昭和41年調査による27号址出土資料を標式とする。

註10. 佐藤鶴信「下伊那における弥生式土器の編年的研究」SBC第三回獎勵研究レポート

註11. 舟山市外機区尾崎遺跡出土土器を標式とするが、現在では弥生式土器研究の学史的意義から千曲川流域の後期標式土器を箱清水式(明治35年長野市箱清水の長野高等女学校々庭出土土器)と総称し、これを更にI類、II類と細分したい考えを有している。したがつて安原寺2類(尾崎式)は箱清水I類、安原寺3類は箱清水II類となる。

註12. 久永春男「東海」日本考古学講座4. 同「東海」日本の考古学5

註13. 桐原健「箱清水式土器」信濃史料刊行会編信濃考古綜観

註14. 高橋桂「北信濃多ヶ峯弥生式墓塚調査略報——第3図4」考古学雑誌51の3

註15. 小県郡から佐久地方の後期弥生式遺跡に見受けられる。例えば小県・田中・長瀬手、佐久・前山・後沢、佐久・岸野、西本山遺跡など。

註16. 桐原健「北信濃長峰丘陵柳町遺跡調査概報」信濃III 9の12 同「北信濃長峰丘陵における弥生式遺跡」考古学雑誌45の1

註17. 新潟県文化財報告書第1「千種」

註18. 永澤光一・上原甲子郎・磯崎正彦「新潟県西蒲原郡積立遺跡の調査」日考古26回研究發表要旨。

註19. 横本源夫「北壁」日本の考古学 3

註20. 駒井和慶・吉田幸一郎「斐太一新潟県新井市の弥生聚落址」

註21. 註14に同じ 未発表資料を貸与された高橋桂氏に感謝する。

第6節 安源寺遺跡の既出資料

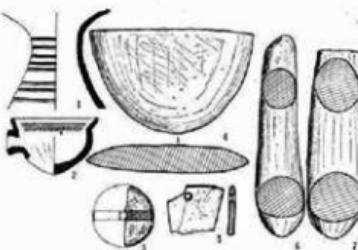
安源寺丘陵周辺の弥生式時代遺跡については早くから神田五六・藤森栄一・金井汲次氏が踏査され(註1)、戦後においては小野勝年氏が当時高校生であった田川幸生・櫻原長剛氏等と遺物の集成を行へ、「下高井」に「下高井地方の考古学的調査」として発表されている(註2)。第1回の安源寺遺跡の発掘が行なわれたのもこの頃—昭和26年のことである(註3)。その後、この附近の遺跡・遺物は高丘小学校に田川幸生、続いて田中清見氏が勤務されるに及んでますます調査・集成され、同校の遺物も整理されて現在に至っている。

以下、昭和27年頃までに発見されて「下高井」に収載された遺物につき、次いで26年発掘の土塙墓、41年春に発見された宮裏遺跡、そして発見された時期は古いがやや出土地点を異にする高見沢伴蔵氏所有遺物についてその概略を紹介したい。

「下高井」記載の弥生式遺物(第46図)

昭和27年頃までに採集された遺物としては、山崎賛一郎氏所有の珍らしい形態をとった注口土器が挙げられる(第46図2)。形態は底の極めて小さい安定の悪い深さのある鉢形土器の一端に短かくはあるがラバ状に開いた注口を附けたもので、口径8.5cm、器高5.5cmを計り、外反している口縁は頸部のところで少しくびれ、以下底部へ向って円味を持つつ收約していく。底部は比較的厚い。文様は頸部に沈線を三條走らせ、その下方に細み目を入れている。器色は淡黄褐色で箇整形、焼成は良好である。他に例品を見ないものであるが栗林式に属するものであろう。第46図1は同じく栗林式の長頸壺破片で、26年の安源寺遺跡

発掘において土塙上面に散布していた後期土器に混じて発見された。口縁部と肩部以下を欠損している。長頸部には1cmほどの間隔で八条の太い寬描直線文が繋っている。同図3も土塙墓附近で発見された。円板形を呈する土製纺錐車で半欠である。厚さは1cmで復元すれば径6.2cmとなる。同図4~7は石器である。4は石製円板。26年夏に高丘公民館で実見したもので閃綠岩製のものである。半欠しているが復元すれば径17cmの円板となり、



第46図 安源寺遺跡既出の土器・石器(1:6)

周縁は大型蛤刃石斧と同様な鋭利な刃となっている。厚みは2.8cmを計る。5は「下高井」に記載されているもので双孔ある磨製石包丁の破片で粘板岩製である。背はやや削せており、厚みは0.7cmで両折りの穿孔がなされている。6・7は棍棒状石器、共に26年夏高丘公民館で実測した。6は「下高井」にも掲図されている。椎状をなす一端は膨らんでおり、一端は手で握るに適した太さである。表面は滑らかに研磨されている。黒色の閃緑岩を使用している。

昭和26年発掘の土塗墓と遺物(第47図)

安源寺遺跡の26年発掘調査は安源寺字清水595番地、山崎正一郎氏の畠において10月5日より11日にかけて行なわれた。発掘指導者は神田五六氏で、参加者は金井喜久一郎・石川税・田川幸生・横原長則・戸沢充則の各氏、及び高丘小・中学校生徒、高丘村古代文化研究会・豊井考古学会・北信学生考古学研究会・長野西高校郷土研究班の諸氏で延員は174名に達した。以下、本調査の経過を発掘日誌から覗ってみると、

10月5日 発掘地を選定トレーナを入れる。表面から510cmまでは耕作土で堆積する。その下30cm位は黒土だが非常に固くしまっている。その下は直ちに粘土である。

10月6日 表土下10cmより始まる黒土は非常に固く発掘は進展しない。

10月7日 偶然、トレーナ西端から東6mのところで地表下20cmから完形な弥生式壺形土器が出土した。同処を拡張すると続々と同一時期と思われる土器が発見された。この地点はおそらく住居址であろうと見当をつけ、土器はできうる限り取りあげず、全貌を露呈させて観察した。かくて、

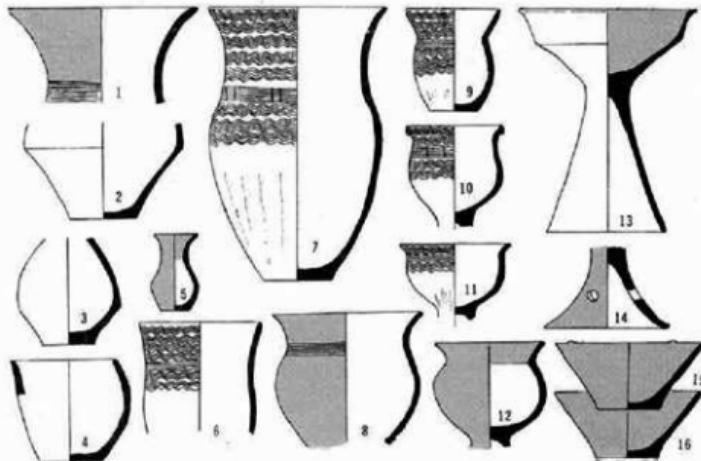


図47図 昭和26年調査土塗出土土器(1:6)

次の10月8日には土器をとりあげながら遺構の検出を行った訳であるが、この結果、土器は地表下20～30cmの黒色土層中に埋没していたが、總て同一水平面にあつた訳ではなく、ところによつては15cmほどの差が見られた。遺構はただ固い黒土層中に長径1.5m、短径0.6mほどの不整橢円形を描く溝だけが発見されただけであった。そして土器は溝で割られた小範囲の中から発見されており、中央東寄りに壺がつぶれ、北側には片口土器が横たわり、西から南にかけて壺・甕・高杯・鉢が多い量にかたまっていた。なお中央には埴土も発見されている。

周ち、この遺構は今にして考えれば周溝を繞らす22・23号と同様な土塙墓であった訳である。出土遺物は総て弥生後期の土器で、今回(41年度)の調査分類で安原寺Ⅲ類としたものである。完形に復したものが多く、器形としては壺・甕・鉢・高杯・片口と多種に亘っている。(第47図1～16)。甕形土器は最も点数が多いが、これは櫛目文の施されているものと、赤色塗彩で飾られているものの二種に大別できる。前者は更に脚の有無による細別が可能で、脚を有さぬもの(第47図6・7・9)はやや長目の胴部に緩やかに外反する口縁が附するもので、文様は頸部に幅1cm弱の櫛描直線文乃至廉状文帯を置き、同帯を挟んで口縁部から上腹部までを堅きの跡の櫛描波状文で充めている。これに対し脚あるものは小形で(第47図10・11)、10は折返し的口縁から円く張った胴部へ続く器形をとり、文様は頸部に櫛描廉状文帯を、口縁外側の翼面部から上胴部にかけて亂れた櫛描波状文で充めている。11は鉢形に近い器形で、文様及び施文方法は10と同様である。次に後者—赤色塗彩された甕(同図8・12)は脚付きで球形に近い胴部に外反する口縁が続くもので、8は胴部に櫛描直線文帯が施るのみで器全面には赤色塗彩がなされている。12は全くの赤色塗彩で口縁内側にまで施されている。また、同じく赤色塗彩されている土器として鉢形土器2点(同図15・16)が発見されており、15の口縁には山形突起が附されている。

甕と対する土器としての壺形土器は破碎が著しく口縁部破片からすれば1～2ヶの大形壺が存したらしいが、その全形は確知することはできない(同図1・2)。3はやや小形な壺胴部、5は所謂袖珍土器である。

高杯は13が完形品で、丈高い脚部を有し、杯部は口径広く、口縁は僅か外反してそのまま杯部の三分の一程度まで直口し、同處に棱線を見せて屈曲し底部に至るもので、杯部内面にのみ赤色塗彩がなされている。

この他、素文の土器で無頭壺状の形態の口縁一部に片口を附した土器が出土している。外面一部に燃黒の痕があり、内面には柏状の粘着物が存していた。

宮裏遺跡(第48図)

安原寺丘陵上面にある山崎賀一郎氏のリンゴ園で、本年春に子息が偶然に完形な壺形土器を発見したことにより住居址の存在が確認された(註4)。地点はほぼ平坦で、既に南方の延徳田園は見えず、かわって西方がひらけて千曲川の流れや信越五山が眺める。

住居址は同地籍の権土が浅く、リンゴ園中で木の根の張りすぎていることや、更に近年水道管を敷設したこと等で破壊が著しく、殊に北半分は完全に不明であった。しかし、かろうじて残った

南半部から推定すると、弥生後期に通有な隅丸方形プランをとるものらしく、その規模は $5 \times 6 m$ 前後と推定される。壁は表土の浅いため甚だしく削られ、数cmを測るのみである。床面はほぼ水平ではあるが軟弱である。床面上の施設としては中央辺とおもわれるところに $1 \times 0.6 m$ の不整橢円形の凹みがあり、その中から後記する壺形土器が横倒しの態で発見された。この凹みの東に接して径30cm、深さ55cmのピットが存在する。おそらく柱穴としてよからう。西壁寄りにもピットが検出されてもいるが、本址に伴うものかどうか確かではない(第45図上)。

出土遺物は土器だけで、それも凹み中の壺形土器を除いては少破片で床面上に散布していた(第48図1~8)。1~3までが壺形土器の破片で、1は長頸壺的な形態をとり、頸部には輪描きで横線を引き桃いて不規則な波状文を置いている。2・3は後期壺形土器の頸部から上腹部にかかる破片で、輪描直線文と羽へ動きの波状文が刻されている。壺形土器破片は4~7で、頸部に輪描直線文帯を置き、同帯を挟んで口縁から上腹部まで輪描波状文で充めている安源寺型類壺特有の文様が施されている。

さて次は間隔の完形壺形土器である(8)。算盤玉状に胴部中辺で屈折を見せておりやや扁平にすぎる胴部に朝顔状に外反する口頭を附したもので、口縁端部に形成されている面上には刻目がなされ、更にところどころに棒状の浮文がついている。胴部文様は上から輪描直線文帯と列点文、次いで屈折部までの間を山形に近い鋭どさを見せた輪描波状文を四帯繰りして終っている。土器考察のところで既述したがこの土器はあきらかに伊勢湾沿岸地方において後期前半に作成されたものであり、彼の地からはるばると人の手によって持ち米ったものである。

高見沢伴蔵氏所有遺物(第49図)

安源寺の高見沢伴蔵氏宅には安源寺丘陵麓に並ぶ現集落の屋敷内より出土した土器と、その前方に広がる氾濫原——延徳田圃中を西へ流れる篠井川の水門工事で出土した土器とが保管されている。安源寺丘陵麓から出土した土器は3点(第49図1~3)であるが、うち2点は土器で、ここでは省略をいたしたい。残された1点(1)は赤色塗彩された高环脚部で筒状に下って来た脚部が舟状にひろがる裾部につくもので、裾部上方には二孔一対の円形孔があいている。この種の形態をとる

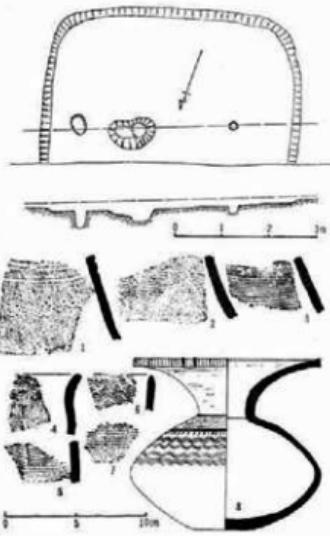
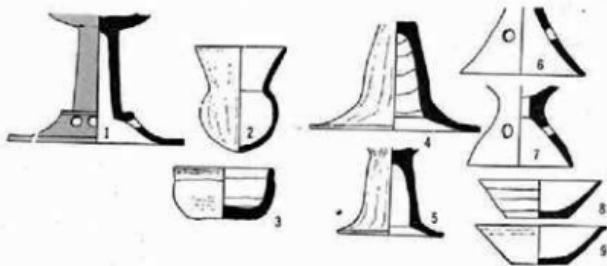


図48 図 宮裏遺跡の住居址(1:30)
と遺物(1:4)

ものは長野県内では数例を知らず、ただ遠く離れた北陸の石川県次場遺跡で同例が見いただされた（註5）。この高杯と共に伴する土器が知られていないのが残念であるが、今後資料の増加を

待つ改めて考えてみたい土器である。

一方、篠ノ井川[水門]附近で発見された土器（同図4～9）は土師器の高環脚部あり系切底の土師器皿ありと推定されるが、そのうちに器台と思われるものが2点（6・7）存在している。共に素文であり、脚部には円形孔が穿たれている。柳町式に属するものと思われる。（桐原 健）



第49図 高見沢伴藏氏所蔵土器(1:6)

1～3 安原寺、4～9 篠ノ井川

註1. 藤森栄一「千曲川下流域・高丘の弥生式石器」考古学8の8

2. 小野勝年「下高井戸地方の考古学的調査」下高井（長野県総合文化財発掘調査報告1）

3. 高丘小・中学校「安原寺遺跡発掘調査報告」昭26年

田川幸生・桐原健「長野県安原寺遺跡の弥生式土器」信濃III 14の4

4. 篠井義久「安原寺遺跡発掘調査」中野市公民館報「文化なかの」95号

5. 横本章夫「弥生文化の発展と地域性—北陸」日本の考古学III

第7節 烟 址 の 調 査

発掘経過

烟址の所在地は宮裏584番地の山崎正治郎氏所有の畠地にある。昭和29年11月末県道拡張工事の際に焚口部が削り取られ、須恵器片、焼成台の自然石等多数が出土してその存在が判明していたものである。今次の工事のため煙尻が削平される恐れがあるため、地主の山崎氏が時に許可くされ、発掘調査を行ったものである。

本址は、県道ぞいに2～4mの段状になっている土堤のところにあって、一面に雑草、篠竹、椿が密生していたため、切られた焚口部断面の所在を確認するのに半日を費やしてしまった。

5月30日午後から発掘を開始し、20cmほどの耕土を剥ぐと、Eトレンチ東端に煙道部が露出した。煙道部は耕作のために、殆んど破壊され一部分が窓床から立ちあがる状態で発掘され、天井も窓壁

も崩れていた。それから次第に下方へ拡張をはじめたが、窓内は流入をしたと思われる粘土が充満していた。上端から2m近く発掘すると、側壁と窓から天井へ移行する部分も残り、西壁の床面には径30cm大の焼けた自然石が置かれていた。さらに下方へ1m余のところからは天井部も完存していた。東壁ではこの辺から須恵器片、焼けた自然石、薬漬多数が出土しはじめた。

窓内に流入した土中からは弥生式土器片、土師器片、須恵器片を得た。また、黄褐色を呈する布目文を付した丸瓦の小破片を検出した。

天井部を完掘し造構を確かめたいと思ひ、発掘を二手に別け、南側の焚口上部から始めた。床面は県道上約30cmからはじまり、木炭、灰層が2mほど続いていた。その灰層の下部からは赤褐色を呈する口径6cmの小形仏器状盤が、焼成されぬまま出土した。また須恵器片を5か所の床面から得た。その中には青海波文様の2片があった。

東壁添いに一列に続くように須恵器片、自然石、粘土塊等が上方に続き、中央部では須恵器片が焼成した自然石多数が出土した。自然石は火炎のため焼けていた。

残存天井部は窓址のほぼ中央部にあって、床面からの高さは約1mでドーム状であった。その他の天井部は全部崩壊していた。(第50図)。

床面は中央部までは黒色、その他の床面は赤褐色に焼け、厚さは4~5cm程度であり堅くはなく、発掘用具で充分削ることができた。側壁および残存天井壁は、前述の床面には接対応しているが黒色の部分が稍々広いようであった。壁面の厚さは窓尻部が15~16cm、その他の部分では約20cm前後であった。天井壁は5~6cmの厚さであった。壁の補修したとみられる跡が所々に残っていた。残存全長は7.6mであった。

発掘は延べ27人の作業員を投入して6月4日に完了した。翌5日に測量を実施し、写真撮影を併せておこなった。

(興津正則)

窓址の構造(第50・51図)

本窓址は丘陵台地の傾斜面を利用して、台地中腹より稍々のぼった粘土層の地山を切り貰いて構築したトンネル式無段登窓である。斜面と平行に焚口を南に向て築造されたが前述のごとく焚口と燃焼部の一部は取り取られ、煙道部、窓尻の一部は耕作の際に破壊され、天井も中央部に僅か遺存していたほかは全て陥没していた。築造当時の規模の全貌は把握するに困難な面が多い。発掘調査によって判明した概要を次に述べる。

窓構築当時は全長10m前後と推定するが現長は7.6mであった。最大巾は削られた燃焼部で1.8m、窓尻付近で1mである。BB'巾1.4、CC'巾1.44、DD'巾1.6mである。窓床下端から約2mは稍々緩傾斜で燃焼部と思われ、それから窓尻までは傾斜が少し急になっていた。平均およそ23度の傾斜である。燃焼部と推定した床面には灰、木炭片が残り、床面は青灰の黒色を呈し、焼成部は赤褐色であった。

窓床には甕の破片と石を配した段状施設の一部分が遺存した。それは中央部の東壁に約3mに列状に残っていた。中央は石に甕片が接着したものや、窓添が石に固く付着したものがあつた。燃焼

部には3か所に塵片や石が置かれていたが、これは上段から滑り落ちてきたものであろう。窓戻から約2m下った西壁にも石が置かれていた。もともとは、もっと多数を施設してあったであろうが、現存しなかった。

天井は窓の中央部に遺存し、また、窓全体にわたって側壁上部から天井部へ移行する部分が比較的よく残っていたので、かなり正確な高さを求めることができた。中央遺存天井の高さは1m、BB'では0.8m、DD'では1.2mである。(第51図)。

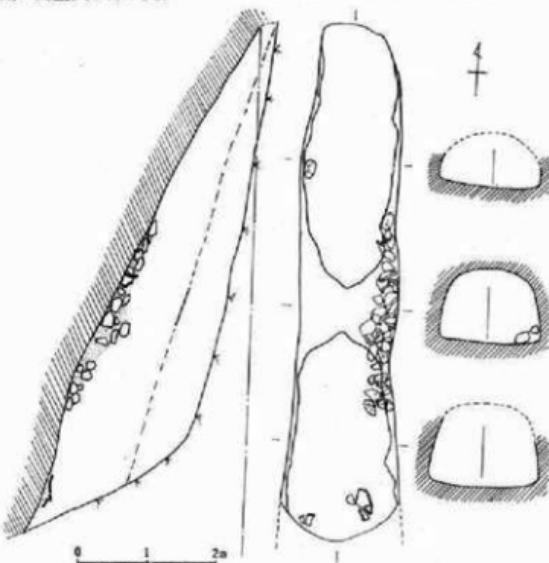
側壁はほぼ垂直に立ちあがり、天井部へ移行する接点はカーブし、ドーム状の天井であった。焼成のため壁も天井も赤褐色に焼かれ、かなり固い焼土となっていた。厚さは15~20cmである。西壁下端部には掘削のために用いた工具の刃の痕が微かに残り、中央部には粘土で補修したとみられる跡も残っていた。

燃焼部下端の床面には中央より稍々東寄りに巾80cm、深さ25cmの落ちこみがあった。その中には木炭片、灰、窓壁片、粘土等が詰まっていた。この上層にあった床は両側の床の厚さよりも薄く、平滑でなかった。これらは燃焼時に破損されたものは補修したものとみられる。

トンネル式無段窯は須恵器としては最も古い形態のもので、茶



第50図 トンネル式無段窯



第51図 トンネル式無段窯 (1:80)

白峯6号窯址(1)(柱1)と築造は同時期と考えられる。葵臼峯6号址の年代を8世紀前半と考定したが本址もそれに比定するわけである。

(金井汲次)

窯址内出土遺物(第52図)

本窯址の発掘調査によつて、窯床面から検出した遺物は次のようなものである。大甕片43点、壺片4点、蓋片3点、环片3点、把手片1点、笠1点、窯滓多量、木炭片多量、自然石31個。この他後期赤土器片、後期土器器片等各10数点、布目文を付した丸瓦小片1点を得た。これらは窯尻付近で、いずれも床面より浮いていた。焼窯後、上部からの土砂の崩れ落ちや流入によって周辺に散布していた遺物が混入したものと推定される。

本窯址の最後の焼成物は比較的小物の壺、环、蓋類であつたらしく、大甕片や自然石は焼成台に使用されたものである。窯溝には高熱のため甕片、环片、蓋片、壺片等を付着したものが数点あつた。

次に窯址内から出土した遺物について述べることとする。

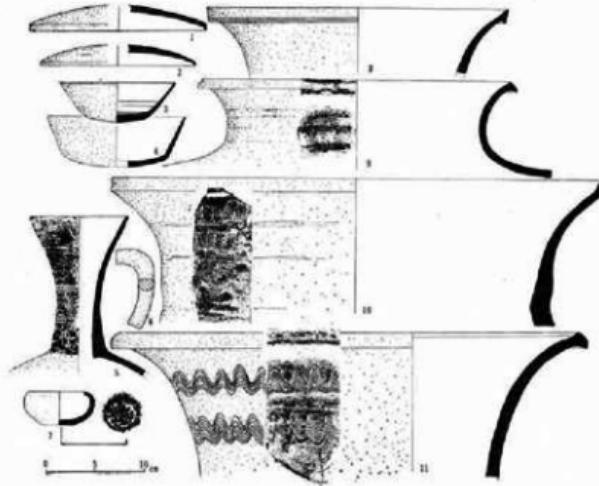
(1) 葵形土器 いずれもつまみの部分を欠失しているためその形を知りえない。1は青灰色で、表面にはロクロ目を残しているが、稚拙な技術の痕と見られる。2は褐色でいゝ見土師器と思われるほどであるが、焼焼が不充分であったためと思われる。

(2) 环形土器

3は口径12cm、

高さ4cmの薄手造りで、断青灰色を呈する。底は築起しの痕を残している。4は破片で焼焼されたため褐色である。

(3) 長頸蓋形土器 頸部のみで蓋の部分は欠失しているため器形は判明しない。(柱1) 頸と壺の接合部はホゾになって、接合した痕が明瞭に残っている。胎土には細粒砂を混入



第52図 トンネル式無段階窯出土土器(1:6)

し、焼成は良好で青灰色を呈する。ゆるやかに外反して口縁に至り、口径は10cmである。頸部には2条の細かい蒐描き沈線を3段にわけて繞らしている。

(4) 把手 6は壺の環状把手の破片で、所々に自然釉がにじみ出ている。黒漆色で光沢を有する。

(5) 塑形土器 塑形土器片はいずれも相当大形のものであろう。前述のごとく焼成台に利用されたもので、須恵器特有の褐色は再三の火炎のため赤褐色ないしは紫褐色と変っている。8は漏斗状に開いて口縁にいたり、先端は割合に深い折り返しをみせている。折り返し帯の下部には2条の細かい沈線が繞る。薫草を付着し、1か所には2本の指紋を残している。

9の壺の肩部から急に立ち上って外反し、口縁で折り返しをみせている。肩部には粗い目状凹文を残している。器面は凹凸が著しく平滑でない。10の口辺はラッパ状にゆるやかに開いて口縁に至り、口縁部の外側の造りは2段である。内側にも浅い段がある。口辺の上部には2条の沈線で区切った帯の市に3本歯の櫛状工具による沈状文を付している。上段のものは1回描きであるが、下段のものは重ね描きである。脚部と口辺の接点には茎による接合調製の痕を残す。所々に薫草を付着している。ラッパ状に開いて外反し、口縁には折り返しがある。口縁内側には小さな段をつくる。9本歯の櫛状工具で模に波状の文様を描く青海波文を付した大壺の小片があった。

以上4個体分は割合に薄手造りである。このほか3個体分の無文の大壺片があつて、いずれも肩部から急に立ち上り、口辺は僅か外反して口縁に至るものがある。造りは厚手で褐色を呈している。殆んどが壺の破片で器面には粒い目状凹文を付す。この他無文の壺の破片多款があつた。

(6) 盆形土器 7は口径6cm、高さ4.5cmの小形の盆である。側面は底から球状に立ち上り、口縁は鋭く内湾し、仏器を思わせる形状である。胎土は極めて良質の粘土を用い、細砂を混入し、器面は良く磨研されている。焼成が及ばなかったのは焼成中転落し、小形であるため灰層に埋もれたためであろう。

本薫址の遺物の中で注目されるのは、薫床面から2点青海波文を付した大壺片を検出したことがある。青海波文は、同心円状凹文によって壺の内面を調製したものであるか、須恵器製作技法からは古い年代とされている。次にロクロから切離法に蒐起しの壺の例がある。茶臼峠6号薫址(註2)の遺物も同様であった。

前述の「壺の形状」の項でも本薫址は茶臼峠6号薫址に平行するとしたが、遺物も共に関連性をもつ点から縦葉は同一時期であったと考える。

(金井汲次)

註1.2 大川清・金井汲次 「長野県中野市草間薫葉遺跡」 信濃里17の12

第8章 土師期住居址の調査

発掘経過

Aトレンチに平行してBトレンチ40m×2mを設定し、表土をはいだところ、第1区中央の北壁に石組みを発見した。一部焼土がみられカマド址と推定し、これに伴う住居址の発見に主力をおい

た。しかし、耕作による擾乱が激しく、プランを確かめることは困難であった。

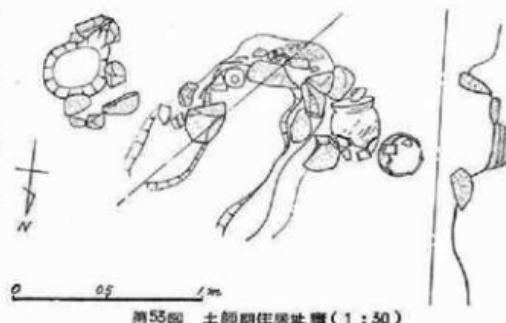
石組みの上面は表土から20cmにあたっていた。壁面はもとより、床面も破壊され壁面、床面からの住居址の追求は困難であると思われるので、石組みを発掘しこれを中心にプランの確認をすべきであると考え、石組みの抽出を行なった。Bトレンチから北方へ4

m×2mの拡張区を設定し、石組みの周辺の土を排除した。

まずカマド址西側から焼土とともに土師器壺形土器、壺が底部を上に向けて出土した（第55図8、9）。統へ壺形土器が横だおしの状態で出土し（第55図2）、石組みは20cm大の河原石6個、10cm大のこれも河原石を数個焼土内に詰めてあった。これらの石の間に粘土を詰め焼灰がその上を被っていた。なおも土を排除していくと、焼土と粘土に連なって赤褐色に焼けた土器片が壁を思わせる状態で出土した。

これを追っていくと、右壁の石組みと対称に橢円形のプランを持つ石組みのカマドであることが判明した。右壁は河原石を用へ、これに粘土をつめているものと反対に、左壁は土器片と粘土でもって築いている。焼土を追って広げていくと、灰混りの強い焼土が現われ焚口を思わせた。

土器の底部、カマド址を中心床面を追求するため、周辺を掘り下げたところ東端の焚口の横に接して、もう1つの石



第55図 土師期住居址壁（1:30）



第54図 土師期住居址壁

組みが検出された。高台付环形土器の底部と、赤色に焼けた土器片と灰が認められた。河原石を20cm大に長方形に割り、厚度直徑30cmのピットをかこむようにして組まれていて、東側には石組みを欠いていた。副設の炉址と考えられるものである。

住居址のプランの確認は前述したように、耕作による破壊によって不可能であった。カマド址は軒間にあって破壊をまぬがれたと思う。（第53・54図）（下平秀夫）

遺址の構造

前述したように、カマド址と関連する住居址プランは全く確認する事ができなかった。カマド址が住居址の壁とどんな方向で取り付けられたものかも知ることはできない。

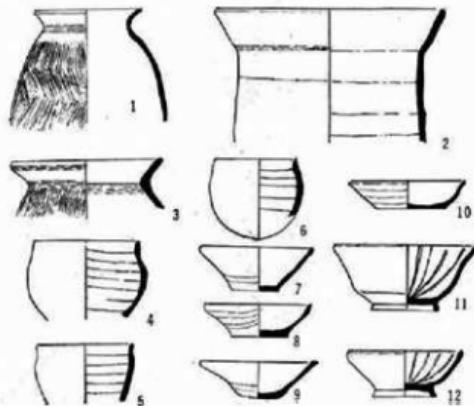
(1) カマド址 河原石と粘土、または土器片の組み合せによって築かれている。焚口巾35cm、火床の奥行70cmで全体として橢円形をしている。全体に20cm前後掘りくぼみ、西壁は約20cm大の河原石を粘土と組み合せて造っている。

まず、基底部を土器片と10cm大の石で築き、その上にはほぼ同じ石を持ち送りの状態でおいて、支脚の代用をさせていたものと思われ、その上に20cm大の石を置いて粘土をつめていたものと思う。奥壁もほぼ同じ構造であろう。奥のつばんだ所の前面に——カマド内に平板石(30cm×15cm)が落ち込んでいた。東西壁の両方に渡して、あるいは煙道の一部をなしていたのではなかろうか。裏面は黒く焼けていたのはこれを更に確かなものとしよう。奥壁に統へて南側に多くの赤色土と赤色灰をみたのは煙道であろうか。東壁は石を用いず、土器片と粘土で壁を築いているが、焚口部には25cm大の河原石を置いている。基部に10cm大の石を芯としている。支脚の代用として高台付环形土器を用いている（第55図11）。

そしてこのところには他の場所より多くの土器片を用い補強している。カマドの袖の部分まで厚く粘土で被われており、カマド址はいずれも赤色に焼け、特に奥壁の焼成は激しい。床面は特に焼けていることはいうまでもないが、地山に達するまでに3層位が認められ、各層とも3~4cmの厚さであった。

- ①土器を混入した赤褐色土層
- ②炭化物が混入した明褐色土層
- ③黒褐色土層→地山という層位を示した。焚口に近くなるほど焼土は少なく、灰は多くなった。

(2) 炉址 楕円形のピットを



第55図 土師陶器住址内出土土器(1:6)

囲むように、これも河原石を割った20cm大の石を用いて築いている。粘土等で被った形跡はなく、ピット内は焼土、炭化物、赤色焼灰、土器片が充満していた。径庭円形のピットであるが、東方に配石がなく灰化物が多くなったことから焚口であろう。焼土の下に炭化物層がみられた。直径約35cmである。

(金井汲次)

出土遺物(第55図)

(1) 壺形土器(1)(第55図1~3) 遺址と接して出土した。1は底部を欠き、2は口縁部の一部のみ残していた。1は口縁部を下に伏せられた状態で出土し、胎土、焼成ともに良好で明褐色で、2は赤褐色であった。1は口縁部が立ち、肩もそれほど張ってなく胴部につながっていく。肩部には巻上げ痕を残し、横に走る刷毛目がみられる。胴部から以下は格子目状の戻き目による整形をしている。全体に荒い整形で裏面はかなり凹凸している。肩部の裏面には、指痕が残されている。内面は煤が付着している。口縁部は稍稍厚く、胴部は稍稍薄くなっている。

3は口縁部のみである。赤褐色で焼成、胎土とも良好である。口縁部から肩部にかけて、擦痕がみられる。胴部は左から右へ横走する刷毛目擦痕がある。口縁は「く」の字状になる。

(2) 壺形土器(2)(4~6) 遺址付近から出土した。明褐色で胎土はあまり良くない。口縁部は外反ぎみて短く口唇は丸味を持つ。約1cm幅の捲き上げ痕を明確に残している。内面は黒磨きしてあり、6は丸底であるが他は底部を欠くも、小さい平底がつくものと思われる。6の胎土には砂が混入されている。

(3) 壺形土器(7~10) 壺の口縁は直線的に開くのが一般的であるが、7.8.9は口唇にいたってやや内高気味をみせている。焼成、胎土は良好で、底部はみな系切りである。遺址内からの出土である。

(4) 高台付壺形土器(11~12) 遺址内からの出土である。台部が稍稍開き底は系切りであるが窓で整形している。内面は黒磨きで、放射状に上方へ窓整形されており、胎土には細粒砂が混入して色調は褐色である。口縁部には煤が付着している。

(下平秀夫)

まとめ

わずか1ヶ所のみではあったが土師期住居址の調査にめぐまれたが、しかし遺址のみで、住居址の全貌を明らかにすることはできず残念であった。遺址の面で床面を追求したが、わずかに黒土層がみられるのみで、精査したが、耕作によって攪乱されて、おそらく貼り床と思われたが、積極的に床面と断言することはできなかった。他遺跡での例から窓の位置及び窓は住居址の北西隅に築いたものと推定される。駒ヶ根市東伊那般村遺跡(註1)や平出遺跡(註2)に数例ある。

次に窓と併せて窓について、更埴市巾田遺跡(註3)において発見されたという。窓は用いられた河原石は、地元の人の話によると安源寺地域では畠内から石が出る事は珍らしく、河原石であることから近くの夜間瀬川か千曲川から持ってきたものと思われる。

本遺址の年代について、現在までの資料をみると石組み粘土窓は、平出遺跡、城ノ内遺跡(註4)

等ではかなり後出的であることが確認され、殆んどが国分期のものであった。

そして出土土器からも、糸切り底の杯、高台付环土器で、国分式の特色を示している。また、駒ヶ根市殿村遺跡、更埴市田遺跡の住居址にも国分期の新らしい要素を持っている。本住居址もこれ等と同様な時期の所産とみてよいであろう。

(下平秀夫)

註1 大場勝雄「駒ヶ根市東伊那殿村遺跡」信濃川 4-11

2 大場勝雄他「平出」平出遺跡調査会 明日新聞社

3 藤島總氏の教示による

4 岩崎卓也「城ノ内」東京教育大学研究報告

第9節 中世・近世の墳墓群調査

土葬墓

(1) 土葬墓1号(第56図) Cトレンチ4区~5区の南側から火葬墓群10基が発掘され、5月31日にこの西限を探る発掘を行った。このとき、西側の接地面に赤褐色粘土が現われた。火葬墓のような跡の集積ではなく、その南側に混土層が深く落ち凹んでいる所が発見された。

そこで、北側の粘土壁を規準に穴を拡張しながら掘り下げた。粘土面から40~50cmで、拳大の礫が3~4個あり、これと共に古銭4枚が発見された(開元通宝、景祐元宝、正隆元宝、淳熙元宝)。なお、発掘終了後に同層位と思われる東壁粘土層中から、密着した2枚の古銭が発見された(紹熙元宝、聖宋元宝)。更に60cm位に達すると、北壁寄りに径10cmの大石が現われ、この直下に丸味を保った頭骨があった。

頭を西に向け、石がこれを押し潰した状態になっていた。頭骨は長い間の土圧のために扁平に圧し潰され、細かにひび割れてはいたが、崩れてはいなかった。頭骨から南約30cmの所に、下肢骨が4本、ほぼ南北に描っており、この両者間に骨の細片が散乱していた。1体分の人骨で、北枕で西向きした埋葬状態である。

頭骨の周辺や下から、古銭6枚が発見された(元豐通宝2、元祐通宝2、景祐元宝、淳熙元宝)。また人骨の西半分を覆むような位置で、鉄釘、竹釘等が発見された。南北約1mの頭骨の北側と下肢骨の南側でそれぞれ30~40cm、コの字形に釘が残存しており埋葬は木棺に納められたものと見て取れるが、棺材は殆んどなかった。

塚は、縱が南北1.2m、横は東西0.8m、深さ北壁0.6mで、塚底は更に10cm程凹んでいた。(第56図)

地表の形状は耕地であったため削平されたか否かは全く不明である。木棺や出土の古銭、磚の状況からは、現在この地方で行われている土葬形式を思わしむるものがある。

なお、人骨の取り上げは6月2日、信州大学医学部香原志勢助教授ほか2名の助手によって行われた。

(2) 土葬墓2号 Cトレンチ2区北方拡張区に発見された土葬墓で、地表下25cmに人骨が出土した。人骨は頭骨と下肢骨で保存状態は悪く、頭骨は完全に崩れていた。下肢骨は一見屈葬の形をとり、腹部辺に近世初期と推定された小柄が調査された形で置かれていた。その人骨を埋葬した墓穴の輪郭は全く不明で、現在の土葬同様に、ごく浅い穴をほり、同上に土築頂を築いたものと思われた。

(3) 土葬墓3号 Cトレンチ3区中央に検出された。後記する火葬墓と同様な状態をとっており、その量は少なく、極めて細片化していた。香原氏によりその骨片の焼成をうけていないことが、指摘されたので、土葬墓3号と命名した。土塙の規模、プランは不明である。ただ骨片の周辺に焼土、禾本科質の木灰が相当量存在したのが注意された。

(4) 土葬墓4号 土葬墓1号発掘のため、南へ拡張した時、東南に隣接して火葬墓11号が発掘された。火葬骨の下から須恵器造りの擂鉢が出土しさらにその下部が混土であるため、6月9日これの発掘を行った。

約50cm下の粘土層上に人骨を発見した。やはり散乱した4~5個の殻があり、その下部に人骨があつて、加底はほぼ1号底と同レベルで、1号南壁が焼となっていた。

人骨は、火葬11号の直下より稍々西へずれ、仰向へた頭部を壁界に少し寄せかけ、下肢骨はこの南約50cmの西壁近くから南北東方向に屈曲した4本が重なっていた。頭骨は腐蝕が多く、歯は頭の一部と共に稍々原形を保ち、下肢骨もひび割れではいたが同様であった。その他の散布骨片は1号より稍々多く、屈葬品等は発見できなかった。

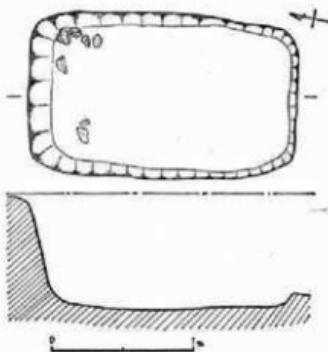
広は地形上充分拡張する事ができなかつたが、東西約70cm、人骨遺存部は南北約80cmである。

(興津正朗)

火葬墓

ここに火葬墓とよぶのは、Cトレンチ及びその拡張部において発見されたもので(第57図)、粘土と一部に小石を敷いたような極めて簡単な造構の上に細かな火葬人骨片を集積し、それをおよそ12個所にわたって配置しているものをさす。

この火葬墓群はいずれも南面する安藤寺丘陵の傾斜地に臨んで立地しているが、もともとこの発見は全く予想されていなかったことである。その動機は、Cトレンチ発掘の際、トレンチ中央部において基盤の落込みが認められ、はじめ住居址等の壁であろうと予測されたのであったが、拡張発掘した結果、はからずも1号から10号までの火葬墓址が次々と発見されたのである。結局、この落



第56図 第1号土葬墓(1:20)

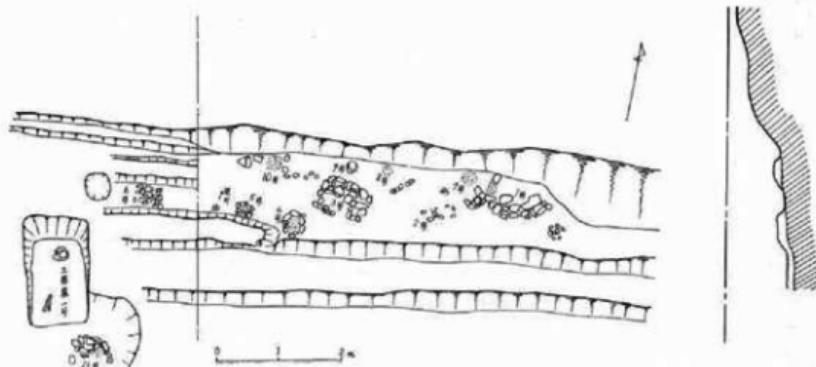
込みも後述のように火葬墓に関連する遺構と考えられるに至った。なお、この一群からやや離れた地点に11号が、Cトレーナーの他の地点より12号址が発見されたが、1～10号が大体一個所にかたまって規則的な配列状態をなしているのに対し、この二つは出土状態等の点でやや趣を異にしているようである。

ところで、火葬墓とするこれらの遺構や人骨の出土状態であるが、これについては特に1～10号において明らかに把握されたといつてよい。即ち、厚さ約20cmの表土（黒褐色土層）のすぐ下に続く基盤（黄褐色粘土層）は丘陵線に沿って南側に傾斜するが、遺構はその斜面を横へ平行に削りとり壁となし、その下部に巾約1.5mの平端面を整地しているのである。Cトレーナーに認められた当初の落込みはこの壁のことである。そして、この平端地の上には粘土の盛土が施され、その部分が土壤状にかためられている。火葬骨は大体この盛土の上に配置され、砂利や小石を伴なっているのであるが、これを全体的に觀た場合、丘陵の斜面を利用して地面を階段状につくり一定の粘土盛土でかためた上に点々と火葬人骨を配列したような状態になっている。径15cmほどの範囲内である。しかし、火葬人骨の出土状態はむしろ不規則なもので、必ずしも一様の形式を保っているとは考えられない。強いてその特徴をあげれば次のように二つに類別されよう。

I類 小石を數き集めた特別の遺構を伴なうもの（1号～6号、9号）

II類 粘土の盛土の上に小石のかわりに砂利等を充當させ、直接火葬人骨を集積したもの（7・8・10号）

I類の場合は更に1・4・5号のように小石を敷いた上に比較的多くの人骨を置いた形跡のあるものや、3・6号のように人骨片は非常に稀だが小石が最も多く集められているもの、また9号のように人骨の集積された上に大形の石を置いているものなどに分別される。この中、1・4・5号の例などは当火葬墓群における典型的な一特徴を示すものといえよう。特に4号址の場合では小石



第57図 中世・近世墳墓群全体図（1:90）

がほぼ円形に敷かれ、その上・下にぎっしり火葬骨が集積している状態であった。1・5号などでも同様であったが、これら的小石群は何らかの用途をもって、おそらく火葬骨を埋葬する際に敷いたものか、あるいは圍ったものであろう。別に、3・6号のように人骨片が皆無に等しく小石ばかり累積しているような状態の例もあり、また9号のように大形の石をもって、集積した人骨を上から押えるようにしている状態のものもあり、一定していない。

II類の場合は前者の1・4・5号等と同じく極めて骨の数が多く、散乱せずにかたく集積している。これらには共通して意識的な石の配置がなく、前者の例にも多少認められたが、粘土盛上に細かな砂利を敷き、その上に人骨を置いている一方、この類例(7・8・10号)はいづれも壁に沿って所在していることが指摘される。

以上の外に11・12号の場合であるが、この二つは出土地点や状態の上から著しく明確さを欠いている。11号は土葬墓の墓穴の上部にある黒褐色土層中から出土したもので、1~10号火葬墓群とどのようなつながりを有しているものか把握されなかった。但し、小石を敷き火葬人骨を伴なっている状態は1・4・5号址のものと同類である。また、この出土地点が中世土葬墓の上層に相当する点、当火葬墓の時期決定の上で重要であると思われた。12号は火葬墓群から離れた地点に出土しているためと、明らかに遺構を伴なわず、細かな人骨片が出土しているにとどまり、趣が異なる。

以上、火葬墓の状態を中心で概略述べたが、これに伴なって出土した人工遺物は意外に少なく、出土遺物としては11号址に小石と共に敷かれていた擂鉢の破片と、4・5号址附近で出土した刀の鍔だけである。このことは当然火葬墓の時期決定の上に支障をきたしているのであるが、今の所擂鉢は中世のものであり、刀の鍔は出土地点にやや難点を残しているも、その時期は近世後半のものであるということが知られている。

なお、5号址のすぐそばに炭片の集積が残存していたが、火葬墓と何らかの関連性を意味するものであろう。

(関孝一)

墳墓群出土遺物

(1) 擂鉢(第58図) 火葬墓11号址の発掘によって検出された擂鉢について、形状を述べ考察したい。底部から口辺に至る大片1点と胴部小片3点の計4点の遺物であるが、復元によって器形の全貌を知ることができる。口径54cm、高さ12.5cmの青灰色を呈する須恵質の擂鉢である。底径5cmから8度の漏斗状に開いて口辺に至る。口辺には巾4cm、長さ2cmの注口を付している。注口の胴部の厚さの2分の1(6mm)で、口辺に後から取り付け接着後は内面を指で、外面は竹籠で接点を磨いている。

擂鉢の内側には10条の櫛状工具によって底から放射状に縦の刻み目を抜き、擂りの機能を高める施文がある。底から6cmの高さまでは擂り波りによって条痕はうすれ、白灰色に変色している。外側ではロクロ目を残し、底全面には内側に描いた櫛状工具によって軽く調製した痕がある。

擂鉢の出土例は長野西高校々塚、上水内郡、戸脇村奥社講堂址や、近くには上条(下高井郡山内町)(註1)に求めることができる。上条の場合は住居址内にあった燒土の周辺から擂鉢片8点

と古銭5枚が出土した。桶鉢の大きさは安源寺のものより稍々小振りであるが、その他は極めてよく類似している。出土銭の例を考慮すると中世も中葉を少し降ると思われる。

本址の場合も中世中葉末と考えたい。本址の下層に存在した土葬墓4号は、1号址と造構、遺体は同様であった。後述のごとく1号址の年代は出土銭例から中世中葉と推定し、層序は土葬墓址2号が中世中期で、火葬墓址11号が中世中期末となる。

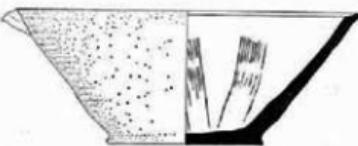
(2) 古銭(第59図) Cトレンチの5区南側弧張部から発掘された土葬墓1号址から12枚の古銭が出土した。銭種・量・鑄造当時の中国帝王・鑄造年代()を示すと次のとおりである。

開元通宝 1枚唐高祖(621年)	景德元宝 1枚北宋仁宗(1034年)
元豐通宝 2枚北宋神宗(1078~1085年)	元祐通宝 2枚北宋哲宗(1086~1093年)
紹聖元宝 1枚北宋哲宗(1094~1097年)	聖宋元宝 1枚北宋徽宗(建中間)
正隆元宝 1枚金世宗(1157年)	淳熙元宝 2枚南宋孝宗(1174~1189年)
景定元宝 1枚南宋理宗(1265~1274年)	

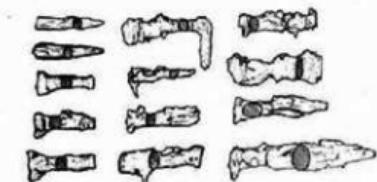
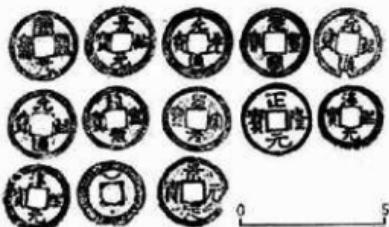
銭種は?種類であるが、元豐通宝は楷書と隸書の銭文であった(第59図上)。淳熙元宝のみが「U」を上部に「・」を下部にして背文としていた。一般に磨滅度が高く、通貨としての機能を充分に果した銅銭で、遺体納棺の時に副葬品として納めたものであろう。

出土銭の殆んどは開元通宝であるが、下限限は埋蔵年代によって異なる。田茂(中野市田茂江本庄一郎氏宅)(註2)は洪武通宝が下限であった。本例は景定元宝が下限であって、次にくる至大通宝、大元通宝、大中通宝等は存在しなかった。さらに次代の明錢、洪武通宝・永樂通宝も無く、もし当該時の埋蔵とすれば永樂錢は必ず含まれる。今回のものには皆無であったゆえに、その年代は景定元宝から洪武永樂錢の間と思われ、輸入の時間的差異を勘案しても中世中期に位置するものと思われる。

(3) 鉄類 土葬墓1号址から得た鉄類は13本で、そのうち鉄製は11本、竹製は2本であった。鉄製の鉗は腐蝕し、鉗のため腐



第58図 第11号火葬墓出土壺鉢(1:6)



第59図 第1号土葬墓出土古銭・鉄(1:2)

状の凸凹が甚だしく原形は判明しない。しかし現存例の最も良好と思われる2本の場合をみると長さは5cmである。

竹釘(図右端下2本)は赤褐色を呈し、原形の半折のものであろう。(第59図下) 釘頭は埋葬場に使われたもので、出土状態は前述通りであるが、長さ2.5cmであったことと、竹釘

の例から棺材の厚さは2cm位のものを使用したのではないかと推定される。

(4) 小柄(第60図) Cトレンチ2区の北拡張部に所在した土葬墓2号址から出土したものである。

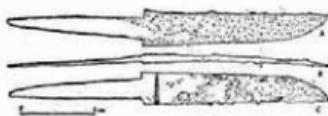
全長21.4cm、刃部12.4cm、柄9cm、巾2.2cmで、A面は上方に向けて置かれ、柄の部分は鈍びずに青黒色を呈していたが、刃部は浅い腐蝕が全面に及んでいた。Bで見られるように右C稍々曲げられていたが、その事情は明らかでない。C面は下方に置かれ柄を除いては腐蝕が甚しく、所々に小さな瘤状の跡がある。

小柄は脇差等の鞘に添えて挿しておく刀剣の小道具であるが、普通には10cm前後の長さをもち、巾は1.2cm位のものとされているが、本品は前述の如く極めて大形なものである。鍛造も良好でないところから崩壊を目的に製作されたものかも知れない。年代は近世前期後半乃至中期頃のものであるまい。

(金井次)

註1. 山ノ内町藤登載予定 昭和28年4月、山ノ内町上集3869番地(地主=池田一二氏)の水田から中世の住居址が発見された。住居址は柱穴14、焼土・遺物は柱片10・櫛鉢片8・須恵器片3・土師器片1・古鏡4(皇宋通宝・熙寧元宝・元祐通宝・元祐通宝)櫛鉢は底径14cmで内側には10本の櫛状工具による縦の高み目がある。

註2. 日比野文夫 長丘村出土古鏡調査「下高井」所収



第60図 第2号土葬墓出土小柄(1:4)

第10節 墓群の考察

本調査地区の西部において発見された墓地群は、火葬墓11か所一群と、土葬墓4基の一群であって、まずこの年代的位置づけについて述べてみたい。

(1) 火葬墓群 本火葬墓群は、南北1.4m、東西7.2mの浅く凹んだ墓域内に設けられた土壇と配葬構造の中に、10個体分の火葬人骨を各個体ごとに配列して埋葬したもので、一定の配列状態が認められるところから、さして時間をおかずして埋納されたものと考えられる。ただし4号土葬墓上層部に検出された火葬墓11号址と同12号址はこれら的一群からやや離れた単独のものであるが、配葬構造や層位の状態から見てさして時期のかわらぬものと認められる。

埋葬状態については第9節に述べられたように二つの形式が見受けられる。すなわち、配葬遺

構を伴うものと、伴わないものとであるが、前者は土壇上に位置し比較的人骨量が少く、後者は、溝状遺構に位置して人骨量は比較的多量である。これは何らかの差異を示すものであろうが、明らかでない。それは男女の差、年齢差・社会的地位、身分等の差等であろうが、副葬品もなく人骨も燃焼度が著しく細片化し、更に傾れ、彎曲が著しく測定不能であるので差異が認められることを指摘するにとどめたい。火葬骨を配列する葬法を他例に求めれば、関東地方には中世の「やぐら」(墳墓)があり、鎌倉市淨光明寺例(註1)によれば、小規模な横穴の内部に、縫を敷き並べた埴を築き、埴上の奥壁に沿って平行に火葬骨数箇体を並べ、その前に石造五輪塔董櫛戸小華瓶、素焼小壺等が副葬されていたという。本例で認められた火葬骨の配列、配葬遺構、小規模な土壇状遺構等はこの「やぐら」の葬法と一脉の関係をもつものと思われる。副葬品については、前述の「やぐら」と異り、ほとんど前葬品らしいものを伴っていない。ただし11号墓は、須恵器質櫛鉢(第58図)を伴っており遺物のうちから唯一の時代決定資料を提供した。「遺物」の項に述べられているように、中世としての特質をもつ本品の出土例を、近くに求めれば、善光寺平においては、長野市長野西高校敷地例、上水内郡戸隠村戸隠神社美社遺構(註2)例、下高井郡山ノ内町上条例がある。特に上条例は、住居址内部に存在した焼土の周辺から宋銭を伴って出土しており中世中葉をやゝ見る時期のものとされている。本例はこの櫛鉢よりやゝ大形であるが、形態、施文、器質等をわめて類似している。また、新潟県金谷墳墓(註3)においては、櫛鉢数箇が壊破片と共に副葬されていた。この墳墓は、円形のマウンド(径7m、高1.5m)に葺石が施され、その内部に、厚い木炭層があり、この中に多量の人骨が埋葬されていたという。調査者は、中世の墳墓と断定している。

4号火葬墓南側出土の刀剣鐔は、木瓜形(短径7.5cm、長径6.5cm)で彎曲が浅く表面に菊文様が浮文で鋲出されている。裏面は無文で、縫はおり返して厚くなっている。全体に铸造が粗悪で、ぶ厚い(厚さ6mm)点等、近世の所産と認められる。出土層位が表土である点と併せて、本火葬墓に直属したものとは認め難い。以上副葬品から見ても、本火葬墓が営まれたのは、中世中葉の時期として差し支えあるまい。

次に層位関係からの問題であるが、櫛鉢を伴った11号火葬墓の直下に存在した4号土葬墓は、後述のように中世中葉も中ごろのものと認められることから、この火葬墓群は、土葬墓1号・4号に後続して営まれたものと解され、その時期は、中世中葉を過ぎる末ごろのものと推定できるのである。

(2) 土葬墓群 前述の火葬墓に近接して出土した土葬墓群は、4基が数えられる。それぞれが単独に営まれたのかその分布にはまとまりがないが、その葬法から見ると三形式に分類できる。

第一類は1号土葬墓に見られる長方形堅穴式墓壙に埋葬された木棺内人骨は、北頭位、西面、横臥屈葬である。副葬された古銭12枚は北宋銭に限られ、その下限は、景定元宝(1274年)の終末期から伝世期間100年として、まず14世紀末と見做すことができる。したがって時代的に見れば南北朝時代中ごろから室町時代初頭のころに係る頃のものであろうか。4号土葬墓も恐らくこれに類したもので、葬法が、仰臥屈葬の点、副葬品がない点が異なるのみで、他は1号墓と同じでありほど同一時期のものと見做すことができよう。

第二類は、3号土葬墓に見られるように、墓塚が浅く、焼土、灰層に囲繞されたもので恐らく、埋葬に伴う火葬火であって、いわゆる幡火の風習をもの語るものであろう。注意すべき葬儀であるが工事中に発見されたもので詳細が不明な点は残念である。この時期については決定できないが本土葬墓中もっとも古い時期を示すものであるかも知れない。

第三類は、2号土葬墓に見られるような浅い墓塚中に北頭位、西面、横臥、屈葬と推定される人骨が存在した。この人骨は、歯類など認められないこと、墓塚が浅い点などから見て、木棺ではなく、棺包または被覆された状態で埋葬されたものであろう。そして墓塚の上は「土まんじゅう」形を呈していたようである。副葬品は、鉄片と大小柄一振（第60図）である。鉄片は、腐蝕が甚しく不明であるが鍛先類似のものである。大小柄は、鍛造でなく、延鉄（のべがね）を加工して形を整えたもので、実用具とは認め難い（註4）。近世に流行したものである点や前述の所見からみて恐らく埋葬用に特に作製されたものではあるまい。現在も行われている葬儀の風習の中に、死者の埋葬前に、遺体や納棺後の棺の上に刀剣を置く風習が県下各地に行われているが、以前にはともに埋納する風習が行われていたのではなかろうか。少くとも近世中葉の頃の時期を示すものであろう。

以上、土葬墓群について述べたが形態、様相もそれぞれに異り、その年代も、中世中葉から近世中葉にかけて當まれた土葬墓群であることは疑いない。

(5) まとめ 本遺跡の古墓は前述のように土葬墓4基、火葬墓12基計16基を数えるが、土葬墓はやゝ散在し時代的にも断続的であり、火葬墓群は一つのまとまりを示し、同時的な存在を示しており、土葬墓第1類（中世中期）—火葬墓（中世中期）—土葬墓第3類（近世中期）という変遷が見られる訳である。このような例を他に求めれば岩手県江刺郡大里村所在の柴崎堂山墳墓が（註5）ある。この古墓群は、山頂の南西斜面に4基の方形マウンドがあり、火葬墓と土葬墓が認められ、火葬墓から永楽通宝、土葬墓から金属小片が出土したのみで、他に副葬品が認められず、この点本例と類似している。調査者はこれを中世の造営としているが本例も中世中葉から近世にかけて土葬墓—火葬墓—土葬墓という変遷が見られる点注意しなければならない。このような葬儀の時代的変遷は何にもとづくものであろうか。この追求は、地域の歴史的背景の追求によって究明されるべきである。例えば土葬はわが国における先史時代からの現在もなお行われている土俗的な要素の強い葬儀であり、火葬は七世紀初頭に僧道照によって始まるように、仏教の影響下に形成された葬法である。本例火葬墓の示す中世中葉における土葬から火葬への変化は、恐らく宗派の変化にもとづくものであろうと思われる。近代都市を除いて火葬の風習を強く示す地域は、浄土真宗の布教されている地域である。前述金井喜久一郎氏報文によれば、この地の名称が示すように、中世開基の安源寺（曹洞宗）が存在し、室町時代末には、関東争乱を逃れて浄土真宗本聖寺がこの地に遷り、やはり領主間の争闘、交代を経てその被覆をうけ、最後に安源寺丘陵の北西、牛出地蔵に寺を置いたといわれる。この間に門徒の拡大、宗旨の布教が行われたことは想像するに難くない。本墓地群がこれら中世終末の宗教集団の活動など社会的様相のもとに形成されたであろうことはいきまでないが、文献史学的にもこの背景を明らかにする端緒となるであろう。記して後考を待ちたい。

第2に、この墓地群に見られる庶民性についてであるが、副葬品の乏しい点、埋葬形式の簡素な点等著しく当時の庶民生活の内容を反映しているものと考えられる。加えて葬制についても、土葬墓群にそれぞれ変化が認められる。これらの追求は、土俗的、民俗学的な面から追求が可能になるであろう。

埋葬に伴う儀礼には、宗教的な規制よりも土俗的、慣習的な規制が著しく強い（註6）とされている。この点本例に伴う具体的な内容が民俗学的に明らかにされれば幸甚である。

また、中世には、庶民的仏教の普及により、板碑などが盛行するが、本例には全く出土していない。上野国、武藏国、あるいは北陸地域等著しい板碑の盛行が見られるが、信濃の地域はどうであったろうか。特に中世末には信仰の対象がその初期にくらべ変化混亂の様相を示す（註7）という、本例がその中ににおいて一般的の様相を示すかどうかとも未解決である。また火葬墓には、両墓制の焼があるが、民俗学的な調査はまだ行われていない。

このように本墓地群は多くの興味ある問題解決の端緒となる性格をもつものであるから、この点についても今後に期待したい。

第3に、この古墳墓の立地についてである。「延徳たんぼ」とよばれる広い冲積面を望む丘陵の斜面に営まれた中世の墓地群は、遺体生前の住居の存在を必然的に追求させしめるのであるが、当時の集落はどこに立地していたのであろうか。領地を統括する領主の居城は別として、水稲耕作を営む庶民の生活立地は、少くともこの墓地より下方の冲積面に近い場所であったことは想像に難くない。果してそうであるとするならば、この墓地の位置は、少くとも水田耕作地帯を一望のものに眺めることのできる高所であり、いわゆる「山上他界」としての立地をもつことになるのである。

火葬墓が複葬的性格をもつものであろうことは、前に述べたが、いわゆる両墓的性格の中で「埋め墓」としての性格をもつものこの位置は恰好の立地をもっている。この地点を平行に直下を走る改修前の県道中野豊野線開設工事の折、江戸時代の墓地が多数発見されたという。これら江戸時代墓地群を営んだ集落も、恐らく、冲積面に所在したいわゆる新田集落の一つであったろう。中世から近世にかけての農耕集落の位置も文献学的に解明できることであろう。そしてその生活の中に営まれた葬送儀礼の風習も民俗学的に追求し得る日の近いことを期待しつつ、二、三の問題を指摘して考察に代える次第である。

（林 茂樹）

註1. 神奈川県鎌倉市淨光明寺境内やぐら」日本考古学年報11所収。昭和35年

註2. 石田茂作他「戸越綜合調査報告書」信濃毎日新聞 未刊

註3. 寺村光晴「新潟県中頸城郡金谷塙墓」日本考古学年報15所収。昭和35年

註4. 長野県刀削銀御室委員岡田久蔵氏の教示による。

註5. 桜井清彦「永源院室を出土した岩手県江刺郡玉里村葉原堂山の墳墓調査報告」考古学雑誌36

の1所収

註6. 桜井謙太郎「在来信仰と仏教信仰の接觸観察」日本歴史研究所収。昭和39年

註7. 千々和彦「中世諸地城における諸仮信仰の比率」日本歴史研究所収。昭和39年

第11節 土葬・火葬墓出土人骨

中野市教育委員会からの人骨出土の報に接し、1966年6月2日私どもは発掘作業末期に近い安源寺遺跡をたずねた。

(1) 1号土葬墓人骨発掘 墓址群の西どなりの一段と掘り下された位置に、頭骨がわずかなから姿をみせていた。注意ぶく掘り下げたところ、左側を上にして、西向きの頭骨があらわれた。すなわち土葬墓人骨第1号である。水気を多くふくむ粘土質の土壤の中に埋没した骨の保存状況は極度に悪く、ただちにはらはらと崩壊しそうであった。骨の腐蝕の程度はかなり進んでおり、骨片というより骨粉といふべきものであつた。土はかなり固く、特に頭骨内部の土は一層黒味がかった。それで、竹べらをもって丁度彫刻でもするような気持で精細に外側の土を剥離していくたところ、かなり原形を保った土塊頭骨が浮き出てきた。一見するとかなり完全な頭骨が発掘されたかのようにみえたかもしれない。歯列はとくにみごとに残存していた。それは丁度マレクラ島の似頸頭骨(ニュー・ヘブリディズ諸島のマレクラ島では、死後近親者の頭骨に土等で肉づけをする風習があった)のようなおもむきがあった。しかし、骨は薄くなつて、その上に金箔のようにならに部分的に付着しているにすぎなかつた。充分観察し、写真等に記録した上で、一時に土塊頭骨を用意の紙袋にそのままの形でおさめ、松本の信州大学医学部第二解剖学教室に運んだ。

1号土葬墓人骨には、頭骨のほかに下肢骨が出土した。それは頭骨より約50cmほど南に位置していた。体幹部や上肢その他の骨は発見できなかつたが、これらから組合位と想像してもかまわないであろう。骨には土がかたく付着し、むりに剥がすと骨そのものを破壊するおそれがあつたので、くわしく同定しなかつたが、のちに骨洗いをしたところ、左右の大腿骨の上部であった。

頭骨のすぐ下から9枚の古銭が出土した。開元通宝、元宝通宝、景德元宝、元隆元宝、景定元宝各一枚、元祐通宝、淳熙元宝各2枚である。金井源次氏によれば、景定元宝(1260年)がもっとも新しく、その点から鎌倉時代後期から足利時代と考えられるということである。

(2) 水洗いと復元 煙熏後、骨の崩壊をおせめて、かなりの期間空気中にさらして自然乾燥させ、その後静かに水につけ、丁寧に水洗いした。しかし、その結果は無残であった。わずかな骨片、それも腐蝕されて軽くなつた小骨片が200片ほどえられたにすぎなかつた。

70～80時間ほど骨つきに専心し、復原をはかれたが、完全頭骨をつくるには質・量ともにあまりに貧弱な材料であった。頭骨片のうち主なものとして次のものがある。

前頭骨の眉間付近、後頭骨片、右側頭骨(顎体、外耳孔を中心とした部分)、右顎体、左右上顎骨の口蓋部、眼窩縁小片、下顎骨(前部、下顎枝の大部分を欠く)。そのほか1枚にみたない小片は多数あり、それらは頭骨各部に属するが、たがいに隣接することはない。歯は17本も保存されていた(右上顎: 第1小臼歯、第1～3大臼歯。左上顎: 中切歯をのぞくすべて。右下顎: 両小白歯、第2大臼歯、中または側切歯。左下顎: 大歯、第1小白歯、第2大臼歯)。

頭骨とともに軸椎、頭椎の小破片も出土した。右大駆骨は小転子をふくむ10cmの長さのもので、後面のみであり、左のそれは小転子の直下から10cmの竹筒状の断片であった。

(4) 人骨の特徴 以上のように不完全であるが、本人骨は大腿骨の強壮なこと、乳様突起の突出、土塊頭骨における前頭部の形状から、男性と判定される。

年令は、現場では50才前後と推定したが、その後精査したところ、歯牙の咬耗はそれほど著しくなかった。智齒の根は形成されており、20才代はこえており、また時代をあわせ考えても50才代後半くらいと推測するのが妥当であろう。わずかに残るいくつかの縫合の状態からみても、この年令見当と考えられる。

頭骨の厚さはあまり厚くなく、下顎骨もそれほど強壮ではないが、大腿骨はかなり厚く筋肉粗面、恥骨筋線は強く発達しており、特に内側広筋の付着線は顕著である。上骨体断面示数は $26\text{mm} / 35\text{mm} = 78.8$ であって、扁平大腿骨platymericに属する。このことから下肢筋の発達が想像される。

歯には禹齒がみとめられる。その程度を示すと、C₂（禹齒が象牙質におよぶもの）：上顎右第1、左第3大臼歯、C₁（エナメル質のみにとどまるもの）：上顎右第3、左第1、2大臼歯であって、禹齒に達する（C₃）以上のものはない。一般に上顎歯より下顎歯の方が禹齒罹患率が高いが、ここでは下顎歯には禹齒はみられぬ。下顎歯があり残存せぬためであろうか。佐倉朝による禹齒は時代とともに出現率が増え、鎌倉時代では一人平均2.1本、室町時代では4.5本という。残存数から考えて本人骨はこれらの時代よりやゝ多いことができる。食生活と関連して考えれば面白いことである。

右上顎第1大臼歯は咬合面が大きくえぐられて、その部分に禹齒あとがみられるのは、対応する下顎大臼歯との咬合の不正によるものであろう。

以上1号土葬墓の人骨についていさかながら知れるところを記した。約700年の間、土中にねむった後再び土塊頭骨として生前のおもかげを伝えるかのように見えたが、日の目をみると僅か1時間あまり、研究室におくられてからは、僅か頭骨片と化してしまった。それは、なにか尋ねの命をおもわせるかもしれない。

(4) 火葬骨 火葬骨については第1号から12号まで観察した。そのうち、大部分は骨焼^ハをしてみたが、12号が肋骨のみであるのを除いて他は量の多寡はある、すべて全身の骨から成っており、それぞれ1個体分と考えられる。

本稿をまとめるにあたり、山崎裕、轟朝五、田中実の3氏から歯学上重要な教示をえた。記して感謝する。

（香原志勢・中村登流・西沢寿亮）

第 4 章 結 び

今次の緊急発掘調査実施にあたっては、県当局ならびに中野建設事務の破格の御懇情を賜わり、また、地域の方々の御協力と御支援をいただき、所期の目的を達した。その間ともに物心両面に亘って御援助を受けた。

調査期間は5月27日から6月10日までとしたが、遺構・遺物の検出があまりにも多く、ついに日延への止むなきに至り、当局へ延長を依頼したところ、快く承認していただいた。その上、工事着手直前まで残余の地区的試掘を許可され、最後の最後まで御協力を賜わった。これ一重に埋蔵文化財に対する深い御理解と愛護精神の発露であって、記して謝意を表する次第である。

既調査・分布調査等によって我々の予想は弥生時代・土師期の住居址、各戸と遺物その他の検出を予想した。しかし、実際には時間的に空間的に幅広い一大複合遺跡で調査員をしばしば戸迷わせた。上は先土器末葉から降っては近世に亘るものであった。

緊急発掘調査の結果、次の如き成果を得た。

- (1) 先土器時代(後期) 石器・石滑(少)
- (2) 楽文式時代(前・中期) 土器・石器・土製品
- (3) 弥生式時代(中・後期) 土器・石器・土製品(多) 土塙墓址(24)
- (4) 古代 トンネル式無段疊蓋(1) 須恵器・布目瓦片(少)・土師期住居址(竈・炉)
- 土器
- (5) 中世 土葬墓(2) 人骨・古鏡(12)・釘(10)・火葬墓(12) 人骨・猪鉢片
- (6) 近世 土葬墓(2) 人骨・小柄・古鏡(寛永通宝)・鏡片

以上はその概要であるが、詳細は前述の通りで、現時点において考察も加えた。

調査は限られた経費と日時の中で、これを克服すべく、尽せるだけの手を尽し、記録保存の万全を期した。しかし、折からの田植時に遭遇し作業員の確保は困難を極め万全であったとは申し難い点もあった。深く反省しているところである。

当遺跡は我々の調査終了後、旬日を待たず県道の付替工事が開始され、大型のブルトーザー・ダンプカーは唸ってその体力を發揮し遺物の包含層は消滅してしまった。その後も工事は続けられ、遺跡の地表下およそ8mは大きな切り通しと変り果ててしまった。我々はスコップ・移植ゴテ・竹べら等で精査した作業に比して、変貌のあまりにも著しいのに驚愕するとともに、調査に従事した者として軒々惜寂の感概一入なるものがあった。我々に歴史の1コマ1コマを物語った遺跡は水効に壊滅し去ったのである。(第61図)

しかし安原寺遺跡は極めて広範囲に亘っている。今回の調査はその30分の1にも及ばない地域である。今後の発掘調査によって、その全貌は把握できると思う。究明の前途は険しく厳しいものばかりで、すべて今後に待たなければならぬ。

こゝに調査が完了し、一応の整理が終った機会に、各調査員が分担執筆して報告書に纏め、上梓する運びとなった。上述の如く今後は更に調査を重ねることによって資料を分析し、検討することによって遺漏なきを期したい。

(金井汲次)

調査直後の道路状況を示す写真。左側の斜面には、車輪式の大型機械が走行する跡がある。



図61 調査直後の道路状況

v
a
b
c

図版第1 安源寺遺跡周辺（航空写真）



図版第2

(上) 遺跡遠景

(下) 遺跡よりの眺望



図版第3

(上) 発掘状況

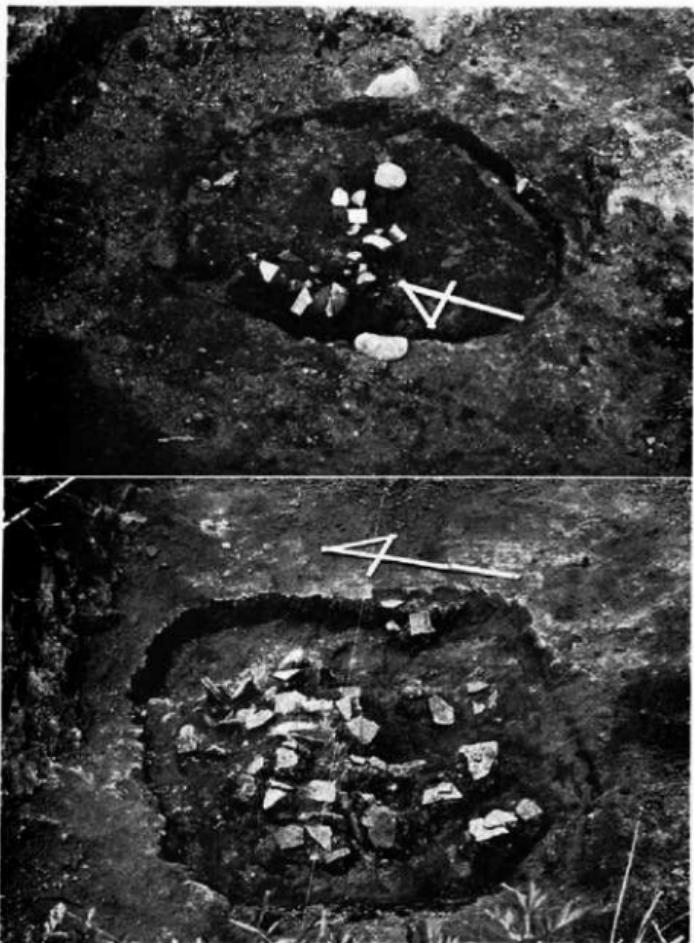
(下) 同



図版第4

(上) 弥生式第6号土塚墓

(下) 同第7号土塚墓



図版第5 (上) 弥生式第9号土塚墓

(下) 同遺物出土状態



圖版第6

(上) Eトレンチ発見弥生式土塙墓群

(下) 同遺物出土状態



$\alpha^* \beta^*$

$\alpha^* \beta^*$

「安源寺」

昭和 42 年 8 月 20 日印刷

昭和 42 年 8 月 31 日発行

発行者 中野市教育委員会
印刷所 双葉印刷

(非売品)